

---

# 実はあの子はごによごによによ

みすず

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

実はあの子はごにごによ

### 【Nコード】

N8072Q

### 【作者名】

みすず

### 【あらすじ】

喜代17才♀は電車の中で異世界トリップしてしまいました。

植物の星という世界で王様の妃にされて！？周りから変人と言われる中でも気にせず自分を貫く喜代と人目と常識に振り回されるある人とのゴーイングマイウェイらぶストーリー

大概が変態と変人で出来ております。挿絵あり、注意。とりあえず恋愛はあとでな感じです。

## 1・始まりの変態（前書き）

いらっやませ

## 1・始まりの変態

「ご・・・うさん。」

黙々と箒で床を掃いていたら、そんな声が聞こえた。きつとあの先生は「ご苦労さん」と言っただろう。ほんわりとコロコロが温かくなる。

喜代は箒を彼方に放り投げ先ほどの先生を見た。先生は輝いている。

・・・なんて素敵な頭頂部・・・

おもわずうつとりと輝く頭頂部とバーコードをみる。眼の中には無論ハートマーク。

その視線に喜代の周りの人たちは2歩遠ざかるのは言わずもがな・・・

冬の廊下の温度も急激に下がった。

数分後掃除開始と共に喜代の意識は戻る。

「あ、はやくやろ。」

竹箒で華麗にホコリを絡め取っていく。

唐突だが、町山喜代は掃除好きである。・・・驚異的なまでにそれはもう掃除を理由に掃除の前の授業をすっばかしたり、集めたゴミ共を恋人を見るような目で見たりといわば掃除馬鹿。そんな変人ともいえる（そうとしか言えねー）

喜代 17歳うら若き乙女のもう一つの特徴

喜代は禿げフェチだった。



## 1・始まりの変態（後書き）

またのお越しをお待ちしております（、ー、）ゞ

この小説は本当に輝く頭部の先生に言われて浮かびましたw  
ぼちぼちやってきます

## 1・2・昔の思い出もしくはトラウマ？

昔々、あたしは愛想が悪いクソ餓鬼だったらしい。  
そう、

あれは幼稚園の年長さん。忘れられない記憶・・・

ミンミンゼミの声がうるさい季節だった  
いつものように砂をかき集め山を作っていた。

……あと少し、あと少しだ！

ひんやりとした砂の中は汗で火照った腕を冷ましてくれる。

砂の山にトンネルが出来ていく。

今度のはかなり大きい。

その時、

「喜代ちゃんはいつも砂遊びしてるね。つまんなくないの？」

一人の男の子が聞いてきて、子供とは思えないくらい冷たい目をして  
そして

あるうことか、あたしの作った砂山に頭から突っ込んで崩した。

呆気なく崩れる砂山。

砂まみれで勝ち誇った顔をしながらこちらを見る子供。

アタシは意味不明＆超理不尽な行動に唯

ふ子供って残酷だ〴〵と考えていた。なんと達観した餓鬼であろう・・・

・

悲しいとは言いたくなかった、負けた気がするから。。

でも、幼いあたしは

ぐちゃぐちゃになった砂山を見ていると視界がぼやけ、目頭が熱く  
なった。すると

「龍くん！そんなことするなんて人道に反するよ！！！」

突然頭の上から声が聞こえ龍という砂まみれの子供はぼくんと上を見る

あたしもつられてみた。背の高い男性がいた。

・・・あたしは見た瞬間思った  
真夏の太陽を背に光輝く頭部は

まるで、

まるで！！！！

王子様の王冠みたい・・・

幼稚園児に人道とか使うこの先生・佐々山英雄先生こそ

忘れられない初恋の相手であった。。。

1・2 昔の思い出もしくは「リウマ？」（後書き）

またのお越しをお待ちしております！

ありがとうございました！

1・3・町山家の方々（前書き）

いらっしやいませ

こんばんわ

### 1・3・町山家の方々

ガガッザー・・・ガピー・・・

「義母さん・・・このラジオ凄まじく入らんだけど・・・。」

リビングには喜代と彼女の継母、幸花へさちか々と古風な丸机の真ん中に

はマーガリン・・・トーストに塗る

残り少ないマーガリンを二人は

争奪し合っていた。

もちろんあたしのこの言葉も相手の集中を欠くためである。

「・・・で？」

幸花は冷たく言い放ちついに喜代のバターナイフに乗ったマーガリンも奪いにかかった。

その時、丸机の側の床下から父親が出てきた。

「・・・おはよう」「」

この光景は町山喜代家には恒例である

父は寝相が悪い。昔よりは良い。

だって行く場所が決まって床下が天井裏なので中学の時の様に海外まで探しに行く必要は無い。

まだ探す事ができる。それは、あたしじとつては幸せな方なんだ。だって、探してもお母さんはもういないから。

リビングの隣の襖の向こうを見る笑う母親の顔がかかった

お仏壇にはお線香が一つ。あたしが立てたものしかない

義母さんはもちろん父さんも立てないそれは  
母さんが死んだときから

そして死んでまだ2年経つか経たないかの内に  
幸花さんが来て。。。

何時の間にかお母さんの使っていたものや寝室のベットやらは皆  
無くなっていた。

粗大ごみにでも出したのか、幸花さんは無口で何を考えてるのか分  
からない。

そしてここはもうお母さんの居た事を証明することは出来なくなっ  
た。

ただ、仏壇とあたしを除いては、、

「喜代、早く学校に行きなさい。」

父さんも、義母さんも、

「んー。」

追い出したいんでしょう？あたしを・・・

カチャリと家の扉をあける。

そう、あたしはまだ知らない。

もう二度とこの家に、帰ることなどない。ということ。

### 1・3・町山家の方々（後書き）

次はトリップを！！！

では

またのお越しをお待ちしております。

## 1・4・電車とお金（前書き）

いらっしやいませ

こんにちは

ちよつと初め視点が変わってますが彼はモブ君です。

## 1・4・電車とお金

「次は〱マルマル駅〱マルマル駅〱。」

熱い・・・。

なぜだ今は冬至になりかけている季節・・・

なのに私の頭は既に汗だくであった。

ああ、うん・・・きつと疲れているのだ。そうなんだろう。

何故なら、その証拠に、最近抜け毛が増えた・・・

「はあゝあ。」彼は重いため息が出た。

「はあゝゝ。」そのすぐ後ろで一人の少女もため息（かなり気持ち  
が違う）

をついたのを彼は知らない。

・・・そして謎の熱の正体ということも・・・

〱この人日に日に男の勲章<sup>はげ</sup>が出てきてるな〱本当に毎日楽しみ！〱

痴漢・・・もといハゲマニア（これもきつい）の喜代は憩いのひと  
ときを満喫していた。

瞬間、電車がガタンツと上下に揺れる。

「！、ほうあゝ！！」（女性としてあるまじき奇声）

バランスを崩したあたしは膝を床に着け四つん這いになってしまった  
「いで・・・ん？」

沢山の人の足ケの隙間に長方形の紙が一枚あった。  
這いつくばりながら手にとってみる

それは、おさつだった。

きつと異国の

「きれいな色。エメラルド？って言うのか？左上と右下に数字っぽいがあるし、

いくらなんだろう？」

あたしはしばらく表側に見惚れそして裏を見してみる。裏には薔薇らしき花と真ん中に

横向きの猫が描かれている・・・と思ったが

違う。正確には猫の仮面を被った男だ

「・・・うわゝ趣味悪いな。誰？偉い人？変人だろ。」

散々な感想を言ったあと喜代はとりあえず立ち上がりそれを制服の胸ポケットに入れようとした。

「駅員さんにでも届けよう。ゝと思った、

刹那。

紙が宙に浮き猫男の顔がこちらを向く。

電車はトンネルに入ったのか？なんだか目の前が暗くなって・・・

#### 1・4・電車とお金（後書き）

またのお越しを。

お話で分からない箇所が

あったらいつてくださると大変ありがたいので  
よろしく願います

1・5・異世界は良いせかい？挿絵あり（前書き）

もうすぐ春なのに

寒くてすみません？

## 1・5・異世界は良いせかい？挿絵あり

あたしの目がこじ開けられる。目の前には猫仮面がいた黒いフードを被っていたのはお札とは違う。

「・・・瞬きさせて下さい。」

「！これはすまない！なかなか起きないから死んだのかと。」  
手を離す猫仮面。

数回瞬きをしたあたしは飛び込んできた周りの状況に顎が外れる勢いでポカーンとしてしまった。

まず、えつと、ここは大きな体育館みたいな所でその真ん中にあたしと猫仮面は背の高い大きな薔薇の花びらの上にいた。

そして下にはたくさんの男の人たちが

土下座、土下座、土下座！！

全員、総・土下座————！！！！！！

そしてなんかブツブツ言ってる耳を恐る恐る傾け聞いてみる。

「「すみませんでした。すみませんでし・・・ぶつぶつ」「」

そうだよね！土下座して言うことって大概がそれだよね！！

あはっなんか頭が痛いぞ！？

電車の中にいたのに・・・

そこであたしはハツとした。

「あの！なんであたしはここに？てか、あんたお札に居たのになん

でてきてんの!？」

猫仮面はあたしに説明した

「うむ、ここは、貴女の世界から言ったら異世界というところだ。星の名前はグリア星。お札と言っていたのは言うなれば宇宙船だ。光の速さよりも早く、しかも人体になんの影響も及ぼさないように作られた

優れものなのだ!・・・そして

貴女が連れて来られたのはその・・・王、王様の・・・妃になるためなんだ・・・。」

あたしの頭は宇宙だの星の名前だのなんて最後の言葉で吹き飛んだ。妃。

「な・に・ゆ・え!？」

「うん。良き質問だ。まあ、うちの王様は性格に難ありでこの星の女は誰も妃になれないし

成りたがらない。!でもすごく女の敵とかではない!むしろ・・・いや俺の口からは言えない。」

どんだけやべー人!!??

・・・ふうんそうか、で違う星から女を・・・あれ?

「もし、あたしも駄目だったら?」

「・・・。。。。。」沈黙。

「。。。。」本当にすみませんでした!!!「。。。。」

さっきまでブツクサ言ってたギャラリーがでかい声を出す。

もしかして、なれなかったらどこかに置いてかれるとか?最悪の場合・・・殺される?

背中に冷たい汗がたれる。

猫仮面からくぐもった声がでた。

「すまない。もう・・・家には帰れない。地球とグリアは10万年離れていて、帰れてもきつと妃殿の家は・・・でも！星一番の待遇をするし、この星は自然豊かで技術も優れ、人間は穏やかでとても、とても良い星だ！だから・・・しかし・・・ごめん。」

遂に猫仮面も頭へこうべゝを垂れた。耳も気持ち垂れてる気がする

あたしは、啞然としてしまった。

だって・・・そんな事・・・

考えなかった。

・・・ポタツ      周りが息を呑む

「・・・ひつ・・・ううえ・・・ずつ。」

「な、泣かないでくれ妃殿、本当に帰せないのはすまない、すまん、ごめん。」

違う、違う違う違う・・・！！考えなかった！思いつきすらもしていなかった！！

あたしは、なんて、なんて薄情な奴だ！！帰りたいなんて思わなくて！ごめん、母さん、父さん、

でも、やっぱり

あたしの居場所なんて、なかったんだよ…

あ、でも・・・いっか。これで邪魔者はきえて晴れて義母さんと父さんは・・・らぶらぶ？

「ひ、・・・はは、ずび、ふへへへ。」

不気味な声をだして笑う、人って絶望状態になると笑いしかでなくなる。

「妃殿つておもしろいな。」

今度は腹をかかえて笑い転げる喜代を猫仮面は不思議そうにみる。そして、つられたのか、一緒に笑った。

二人の笑いは対極的、でもひとしきり笑った喜代は吹っ切れたと見え、

晴れ晴れとして

「王様に会わせたまえ!!」

・・・偉そうになった

> i 1 9 6 9 6 — 2 6 6 8 <

## 1・5・異世界は良いせかい？挿絵あり（後書き）

喜代は作者の予想を斜め上から

裏切ってくれます

またのお越しをお待ちしております

1・6 がんばれ喜代！（前書き）

いらっしゃいませ

## 1・6 がんばれ喜代！

「ちょいちょい、もうちょつと王様のこと教えてよ。」  
あたしは猫仮面の黒い袖（マント？）をつかみながら聞いた。

只今あたしたちは長い廊下を歩いている。洋風の壁には緑色のつるが張り付きその上に  
黄色い朝顔みたいな花が咲き乱れている。

・・・さすが植物の星だぜ・・・

感心していると右上から声がした。

「武道館・・・俺達が最初にいた所に男達が謝ってただろ？あれは  
な王の執事だ。

で、何を最初に謝ってたかというと、妃殿を無理矢理あの王の妃  
にした事だ。

帰せないことよりも妃にするほうを謝る。・・・つまりそれだけ  
の人だ。」

・・・ヤベーーーーー！つど、どどうすべ？？

あたすはト田舎でのんびり育った田舎娘だっぺよ？

そんな、やくざ？何それうまいんだっぺ？ちゅうような頭ん中春の  
おめでた娘が

ヤバイ王様の

嫁子？？あきやん！絶対にあつきやん！！（駄目の意）

喜代がブツブツ言っているうちにどうやら着いたらしい。

壁にもっとたくさんのツルが絡み合い、四角いドアの形を成してい  
る。

すると、トビラに触れようとしていた猫仮面があたしを見る

「・・・王は、確かにいろんな意味でヤバイ。・・・でも、優しい。皆に、優しい。だから・・・心を落ち着かせる。」

「・・・な、慰め？安心させようとした？・・・やばくて優しい王様・・・？」

「・・・なるだけ、がんばる。」小さな決意を口にした。

「王・・・陛下。客人です。」

猫仮面の右手の人差し指がトビラに触れた。・・・開く扉

指紋認証かい！

こんな時に思わずツツコミを入れてしまった...

シュルツシュルとツルが解けツルで出来た扉は少しづつ中を見せていく。

あたしは湧いてきた唾液をゴクリと飲み込む。

トビラが完全に開く。

目の前には上半身裸の背が異様に高いヒョロ男が居た。

ヒョロ男は数秒固まって、

そして

「きゃあーーーーーあああ!!!!!!」  
・・・叫んだ。

喜代は裂けんばかりに目を見開く。・・・眼尻がビキビキ言う。

「っもう！いつもノックしてって言うてるじゃない！そんなにあたしの生着替えが見たいの！？」

この変態！痴漢！」

キーキー喚くヒョロ男（むしろ変態

「うるっさいですよ。一応呼びましたよ陛下。」

面倒くさそうに言う猫仮面。

「なら、返事があるまで待ってよダンデリオンのいけず！ぷんぷん！」

どうしよう、この星に警察って居るかな。。。

本気でそう考えてた喜代とヒョロ男は目が合った。

「・・・まあ！なあに？この子かゝわゝいゝいゝ！！ふわっとしたボブに耳の

途中らへんからのウェーブがかった長い黒髪！眠たそうなまん丸お目目！

ちよっとぬけたような下がりがぎみの気持ち濃いめの短い眉！ちいちゃい鼻！ねずみちゃんみたいなお口！極めつけはピンクのほっぺ！やだゝお人形さんみたい！」

変態（ヒョロ男）は喜代にべたべた触りながら解説をする。

喜代、小刻みに震え始める。

喜代はヒョロ男の解説もしてみた。  
薄茶色い肩くらのウェーブの髪。長くうすいまゆ毛。アーモンド  
形のぱっちりな目  
女性的な筋は通っているけど大きすぎない鼻。口紅の似合いそうな  
肉つきが少しいい口。

・・・美人じゃない！負けた！完敗！うひょーーーー！

「挨拶は済みましたか？王。」

「ええ。」つやつや顔のヒョロ男  
こんにちはの「こ」の字も言ってるねえ！

「気に入りましたか？」猫仮面の声が少し強張る。

「もちろん！ダンデ坊ちゃんにこんな彼女ができてたなんて  
お姉さん感激「あんたの妃だ」」

猫仮面・・・たぶんダンデリオンというのか？は最後まで言わせず  
に言った。

しばしの時間が流れた。

「・・・あんだと？」

とても低いそれは、美人な王様から発せられていた。

1・6 がんばれ喜代！（後書き）

乙女の夢を粉碎させる王様登場！  
すみません・・・

## 1・7・がんばれ王様！

「あの話は断ったはずだが？」

さっきまでの変態ヒヨロ男はどこへやら・・・  
そこには異様に威圧的な王様がいた。

「あんたが王である限り、そんな事はできない。」  
ダンデリオンも負けてない。

にらみ合う二人・・・

「・・・ぐすつ・・・もう、もう王様いや。自由になりたい・・・」

ああー！オカマ泣かしたー！！

あたしの批判的な視線を受けて焦るダンデリオン

「しょ、しょうがないだろ！あ、あんたは王様！男！俺の兄貴！」

・・・益々泣きじゃくる王様。

「うわーん！！もう死んでやるう！男やめたい！！ヒラヒラドレス着たい！」

「だー！面倒だな！付いてるもんはついてんだよ！」

ダンデリオン下ネター！！

.....あ.....

ぴんぴこぴーーーーん！

突然、あたしは閃いた！

「ねえ！切っちゃえば！？性転換だよ！あたしの国にそういう技術あるよ！」

突然、叫びだす喜代に男とオカマは固まった。

「・・・どういうこと？あたし、女に、なれるの？」

涙で瞳をキラキラさせた王様が言う。

「うん！詳しくは分かんないけど、あんな宇宙船作れるんなら楽勝でしょ！？」

ダンデリオンをすぎる様に見る。

「ふむ。なるほど性転換か、、それならいいかもしれん。王が女王になっただけだし、

王なら見た目だけでかなり男が集まるな、、ふむ、

研究員を地球に留学させて・・・ぶつぶつ。」

仮面で後半があんまり聞こえないけど留学って？

「それじゃあ遅すぎない！？10万年だよ！王様死んじゃう！」

猫仮面ぽかん・・・

「ああ、妃殿は気が付いていなかったのか。ここと地球は時間の流れが違う。」

そしてこの人間は長命だ。

実際に測ってはいないがこちらの10分は向こうでは10年だ。

そこに10万年

そして宇宙船の速さも加えていくと・・・

ざっと一週間あれば地球には着くな。そのころにはさらに技術も発展していよう。」

長ったらしい説明をするダンデリオン

「・・・陛下、一月。一月だけ待つては頂けませんか？」

すごい、なんかどんどん話が進んでる。

二人はなにか話している。もしかしたら留学と共に帰れるかな？

10分が・・・10年。今、帰ったら一日60分が24個・・・

限りなく、年が経っている。当然知り合いは死んでいる。

帰っても、生活の保障なんてされないし、なにより

「よし！王様性転換計画！始動よ！！！」

ここ、結構好きかも。

よし、がんばれ王様！！

-----

「・・・で、妃殿。いやもう妃ではないか名は？」

「まちやま、きよ。」

「木よ？」紙に漢字を書くダンデリオン。

「喜代だよ！」ガリガリがり・・・

「喜ぶ？代える？まあ、良い喜代殿。申し遅れた。俺はグリア星第一王子

ククア・ダンデリオン。以後よろしく。」

丁寧に腰を折って礼をする。

「あたしもやるわん！よろしくキヨちゃんあたしはグリア星、殿下

ククア・ローズよろしくねん！」

「ローズさんに、ダンデリオン。よろしくでございます。」  
お辞儀をした。その瞬間目に映ったのは……ゴキブリ？

「うほああああああ！！！！」ぶちいい！！

しまった！勢い余って潰してしまった！

そろりと足をどかす、床にはGの姿はなく変な汁が飛び散っていた

という事は……！！！！

「やああ！靴についたあ！と、取って！取って！……ダンデリオ  
ーん！」

「……たく、喜代殿は……」乱暴にあたしの足を持ちあげるダ  
ンデリオン

「つちよ、危な！……どうええええ！？」ほら言わんこつちや無  
い！

あたしは後ろから床に倒れそうになる。

「喜代殿！」 「うわあああ！ダンデの、馬鹿あ！！」 パシッ

固そうな床にあたしの体は倒れることはなかった。

……体が浮いてる？違う、これは世に言う

お姫様だっこ……

相手は！？そーっと上に視線を上げる。

……誰ですかこの人？

「よかつた喜代殿。危うく客人がけがをすところだつた・・・」  
ほつと息をつく男。この声は、

「だ、ダンデリオン？」

あたしを抱えた男は「そうだが？」と不思議そうにいう。

・・・どえらい男前でした。

1・7 がんばれ王様！（後書き）

遂にダンデリオンの素顔！

恋愛要素少なかったけど

これから入れていきます・・・

1・8・イケ面よりも輝くのは・・・（前書き）

もちろん

頭部！BY喜代

## 1・8・イケ面よりも輝くのは・・・

正直に告白しよう。

あたしの恋は佐々山先生からはストップしている。  
なぜって？

男と関わる機会がまったく無いから。

・・・周りはまだフツサの青二才共だったしな・・・

そんな男性に面識などないあたしは、当然この  
超絶！イケ面にお姫様だっこされる状況！！に赤面しなければなら  
ない。

ならないのに・・・できない。既に鬼のように赤い人物がいるから。  
自分が仮面をしていない事に気がついた  
鬼はあたしをそつと下ろすと、

脱兎のごとく隅の豪華なベッドに直行し、  
かけ布団を頭まで被り丸くなる。

「え、何？これダンデリオン？なんで仮面はずれてんの？」

戸惑う喜代。

実は喜代は覚えていないが犯人は喜代であった。

戻ること数秒前、後ろから落ちる寸前腕を思い切り振り回し側にか  
けよったダンデリオンの顔に

当たり仮面が落ちた。二人は必死で気がつく事はできなかった。

「ダンデ〜？出てこーい。ダンデ〜？」

もそもそと動きだし、布団が少しめくれる。

「あ、ダンデ！どうしたの？」

布団の隙間からは黒い煙のような空気が見える。

「み、見たのか？おおお俺の、、、、顔面。」

「うん。イケてるね。」

なんだ、顔見られるの恥ずかしいんだ！ちょっと可愛いな。

「生まれてきてごめんなさい。」

・・・はずいのレベルがちがうぞ？

布団の隙間の黒煙は倍増されている・・・

「喜代殿が長く見ていなくてよかった、もう少し遅かったら、

・・・倒れていた。」

「なんでやねん。」

「知らん。そんな事、

俺がこの27年間探しても見つけれなかったのだ・・・！」

この状況を見ていたローズさんにあたしは説明を求めた。

ローズさんは両手をほったに当ててくねりながら説明してくれる

(キシヨ！！)

「そんなの、ダンデちゃんがイケ面だからに決まってるじゃない！さすがあたしの弟よね！？

ここの星の女の子って・・・結構ウブなのよね！見ただけで失神。鼻血噴出事件もあったわよ？」

・・・あっさり解決。・・・が

「いや、そんな事など決して、決してない。。。告白すらされたこ

となどないのに・・・」

（だからウブなんだって・・・）あきれるローズと地を這うような声に少しビクつく喜代

まあ、イケ面も大変なのね、、そう思った瞬間布団がガバリと持ち上がった

「っだから兄・・・姉上！きっとこれも樹木の呪いなんだ！見てくれこの髪を！最近益々

緑色になったんだ！」自分の髪を持ち上げるダンデ

・・・！！

いきなりの事に息が止まった。

が、それ以上にダンデの髪に衝撃を受ける。

ダンデの髪は、緑色の葉っぱで出来ていた。

ベッドの上で仁王立ちするダンデを改めてみる。

首に少しかかる葉っぱの髪にローズよりも少し濃い長い眉、猫の仮面と同じ

つり目で丸く大きい目が少し年齢よりも幼く見せているが、全体的に誠実、実直、生真面目、な言葉が似合いそうな空気。そして、高く鼻筋の通った男性的な鼻。うすい大きな口。

「うん。やっぱリイケ、の部類に入るよ！」

ダンデが不可解そうにあたしを見る。

「・・・喜代殿、なんともありませんか？酸欠、眩暈など・・・」  
どんとんと近づくダンデは腰を折ってあたしの顔に自らの顔を近づけた

あたしはダンデのほつぺたを包んで力強く頷いて笑ってあげる。

「うん！大丈夫！あたしのストライクは光輝く頭部を持った大人の

（中年）男性だから！

だからダンデは呪われてないよ、むしろとってもきれいだし、あたしダンデの顔

大好き！！」

大好き！だいすき！だ・・エコー

部屋中に広がったその声は、

のちのち波乱を引き起こすのでした。。。

1・8・イケ面よりも輝くのは・・・（後書き）

なんか、

小悪魔っぽい・・・

## 1・9・恋の虜と屍累々。

「大好き！」・・・部屋中にあたしの声が広がった。

どうだ！これで自信ついただろう！！

すこし満足気にしていたあたし・・・が、

ダンデは固まってしまっていた。

あれ？何で？・・・腐っても世の中で最高、ピチピチ度100%と言われる

女子高生に言われたのだぞ？

何、あたしじゃ役不足か？（イラッ

この時あたしはイラついた、だからこんなことを口走ったのは許しておくれ。

「元気、だそうよダンデ！27年間も恋愛皆無とか枯れ切ってるよ！？」

グサリ。

部屋に不気味な音が響く。

・・・ヤバイ。なんか凄い音がダンデから聞こえた。  
あわわわわどうしよう、えっとフォ、フォロー！

「で、でも大丈夫！27年間とか全然大丈夫だよ！？あたしの星では熟年結婚とかあるし！

ダンデ本当にかっこいいからまだまだイケるよ！？」

将来ウハウハだね！はい、これ決定！！！！」

……沈黙が痛いぜ……

「あの、その、枯れてるとか言って、すみませんでした。」

「……ひいい怖ええ。何でなんも言ってくれないの??き、危険だ。離れよう。」

そろりとダンデのホッペに当てていた両手を離そうとする。

ハッとしたように目を見開くダンデ。

「まて……!」

喜代の離れた左手を捕まえ、自らの右頬に押し当てるダンデリオン。

つぎゅう

左手に力が加えられる。

「!だ、ダンデ?うええ??ど、どどどうしたの??」  
ご乱心か?

いきなり待てと命令され、左手をダンデのほっぺたに押さえつけられ喜代はパニックに陥る。

目を閉じ深いため息をつくダンデを見、そして掴まれている左手と掴んでいる右手を見る。

……結構ぬくい……

さっきまで気づかなかった頬のぬくもりが心地よく思った。

が、ダンデはハツとし、

「・・・何、やってんだ俺は・・・？」

パツと喜代の手を離した。

呆然とするダンデと喜代とニヤニヤするローズ。

どうしようこの空気・・・と喜代が思っていると、

バアンッ！！

扉が、蹴破られた。

「・・・ちーっす。郵便でーっす。・・・あれローズ君なんで上半分マッパ？」

現れたのは坊主狩りの一人の青年だった。

そしてマッパのローズ（まだ着てなかった！？）をうええと言いなから眺める。

「きゃああ！は、ハイド！あんた馬鹿じゃないの！？ノックも無しに、しかも蹴破って入るなんて！

どうかしてるわん！？本当にダンデちゃんと言い、ハイドと言い。ああん、

こんな才オカミ達に狙われるあたしって罪なおん」「キモ男！」「

女だけは絶対に言わせないという感じで叫ぶダンデと青年（ハイド？）

いじけるローズを尻目に、ハイドはつかつかと喜代の側に寄る。

「どうも可愛いお嬢ちゃん。俺は郵便配達屋のハイド・ランガーっす。

嬢ちゃんにお届け物。・・・はい。宇宙船のなかに在ったよ。」  
渡されたのはリュックだった。いつも学校に持っていく・・・

「あ、そういえばあたし背負ってたっけ。．．．わ！ちゃんと中身もある！」

感動する喜代と、ずるりと出された竹箒とちりとりを見て啞然とする三人。

さすが掃除馬鹿．．．

「ふへへへへ。これでこの世界でも生きてけるぜ（そこまで！？）  
あ、あのハイドさん！ありが．．．」

ハイドを見上げ、途中でやめた喜代に三人は首を傾げる。

「う、うあわあ、あの、その」

つくあゝつと喜代はほつぺたが赤くなっていきもじもじする

それと同時にダンデは異様に腹立たしくなりこめかみに青筋を立て、ハイドをギロリと睨んだ。

ハイドはどこと無く勝ち誇ったような顔をダンデに向け喜代に優しく言葉をかける。

「何だい？」

「す、素敵に禿げ上がってますね！！！」

．．．．．  
．．．．．

微妙な空気が漂う。

ハイド、ピシッという音をたてて固まる。

ダンデ、肩を小刻みに震わせ、声を殺して笑う。

喜代、「きゃー言っちゃった！」もじもじもじ

ローズ、爆・笑。

「どわーーーーひゃひゃひゃひゃひゃ！ひいーーーー！さ、最高！  
は、ははははげ！！！」

ハイドが、はっげ！？オdフィぢえうえhshふghげ（笑）（  
笑）（笑）」

「な、う、うるせー！

きつとなんかの聞き間ちが「つるりとしたおでこが魅力的！！」  
ハイド、撃沈。ご愁傷様。

そんな時、はうーんと目がハートマークの喜代を見ていたダンデは  
「喜代殿・・・。ハゲが・・・好きなのか？そうか、俺も・・・」

未知の領域に足を入れそうな青年が一人。

「あ、でもダンデ！貴方の顔の方が何故か輝いてて好きだよ！」  
元気付けてあげなきゃね！それに事実だし魅惑のおでこに勝るなんて  
名誉な事だよ！ダンデ！

・・・ボワンッ！

ダンデもその言葉に顔から蒸気が噴き出し。  
その場で撃沈。（意味が違う。

屍と化した二人が居るカオスな部屋に  
ローズの馬鹿笑いだけが響いていた。

1・9・恋の虜と屍累々。(後書き)

おおう・・・なんも言えません。

喜代は作者でも止められません、無理。

でわ、またのお越しを！

1・10・好きとは違う好き（前書き）

わーいわーい！

投稿だーい！・・・すんません。

いらっしやいませ

## 1・10・好きとは違う好き

・・・チ、チチュンチチュンッ

朝の日差しが眩しくてあたしは目を覚ました。

「ぬーんむうゝ・・・はあ。よく寝たゝ。」

思い切りよく伸びをした後、まだ半目<sup>いつもだが</sup>の目を擦り辺りを見回す。

ふわふわの白い絨毯と今にも落ちて来そうな馬鹿でかいシャンデリア  
喜代が上で寝ていたベッドはこれでもかと言わんばかりに横長で縦  
長だ。

いわゆるキングサイズ。

そして、最も気になるのは山済みになされた様々なダンボール共であ  
った。

部屋の隅まで埋めつくすそれに軽い足取りで駆け寄り、

「うゝん。さすが物置・・・謎のものがたくさゝん。えへへ。」

にまにましながらダンボールの中を漁りだす喜代。

すると、なにやら黒くブニブニしたものを拾った。

「お？おおお？これは、・・・グほっうっげほっけ・・・！」

得体の知れない黒いものはかなりのホコリをかぶりかなり鼻が参る。

ヤバイヤバイヤバイ！くそっあたしとしたことが・・・！

涙目で窓を開けると真下にそれを投げつけた。

びゅう！・・・。「うわあああ！！！」

同時に耳をつんざくような叫びが聞こえ、視線を下げる。

・・・顔に黒いものが付きそれを死に物狂いで取ろうとしている葉っぱ頭の王子様がいた。

「あれ？ダンデリオン！？何してるのそんなところでー！」

喜代が投げつけたそれを取ろうともがいているのだが

喜代はダンデのいる場所に違和感を持った。

喜代の部屋の窓の数メートル下、城から出た木の枝に紐をくくりつけて

出来たハンモックの中にダンデリオンは横になっていた。

「ダンデー！おい！ダンデー！？」

黒いものを取ろうとしていたダンデはピタリと動きを止める。

次の瞬間、

コンマ一秒でそれを剥ぎ取り、腹筋だけで体を起こしギョロギョロと声の方角を探る。

「こつちこつち！王子様くすくす。」余りに必死だったので思わず笑みがこぼれた。

「・・・喜代殿・・・。」

呆然とその笑顔を見ていたダンデは、我に返ったように体をビクリとさせ、咳払いをした。

「お、おはようだな。挨拶が遅れて、すまない。喜代殿。ところで、な、ぜそんな、物置に？」

歯切れ悪く言葉を区切りながら尋ねてみる。

可愛らしいネズミ口からでてきたのは衝撃的な一言であった。

「ここがあたしの部屋だから。」

しばしの沈黙が降りる。

ダンデが唇をわなわなと震わせながら息を大きく吸い込み

城中に彼の喚き声が響いた。

ドッ  
カーン！

ドカドカとノックなしに扉を蹴破り、王様の寢室に上がり、  
寢室が空なのさらにキレル王子。

般若の表情を浮かべているダンデを必死で止めている喜代に  
さすがに少し物騒だったと思い般若から通常の顔にした。  
しかしまだ頭に沸々と怒りが煮えている。

ああ、なんと可哀想な喜代殿……！こんなに困った顔を……困った……顔を……うん、

可愛いな。

「あ、あのダンデ？顔、近いんだけど。ていうか、手をどかして。」  
気づけば絹のように柔らかい頬を指先で撫でていた。

言われていることは紛れも無く拒否の言葉だが何故か手が止まらない。

「喜代殿……。」

俺の顔はいま恍惚としているのであろう。

「……ダンデ？」

小首を傾げる喜代殿の黒目にひたと自分を映された。

プツン。

何かが切れた気がする。

喜代殿の顔が眩しい。心臓の鼓動でどうにかなってしまいそうだ。

やばい、……やばいやばいやばい！！！！

震える体を必死で鎮めようとしたが間に合わず、喜代の肩を両手で掴んだ。

「っ喜代殿！好きだ！恋人になってくれ！」

「ごめん。ダンデは好きだけどそういうのじゃあない。」

「……どういうことだ？」

1・10・好きとは違う好き（後書き）

ダンデ視点いれたけど、、  
やっぱりお馬鹿さんだったな。。。  
w

## 1・11・日常にするために

グリア星最高権力者、ククア・ローズ  
ここは彼の（彼女？）寝室

そして、そこはこの星最大の氷点下と化していた・・・

「どういう・・・ことだ？」

固まったダンデの口から、零れるように言葉がでてきた。

「どうって、そのまんまの意味だけど。。。」「

首をひねる喜代。

首をひねるダンデ。・・・ゴキリと音がしたが大丈夫かな？

「だから、友達としてはすきって事！」

「同じすきという言葉だ。」

ハア！！？

「恋と友情は違うでしょうが・・・」

しばしの無言。・・・何なんだ？

「では、俺のこの気持ちは？・・・どちらだろう・・・」

つぶやくようにダンデの言った一言に

あたしはイラッとした。なんじゃそりゃ

「・・・あんた、自分の気持ちもわかんないの？」

それで付き合えとか、かなり意味わかんないんだけど！」

少しダンデが怯んだのを見てあたしはこの馬鹿に説教をしようと  
思った。

「いい！？恋つていうのはその人がいなきゃ心が満たされなくて、居たらいたでドキドキそわそわして、なんかむず痒くて、その人をずっと見てたい（主に頭部）と思つて、ん〜と、とにかくその人の側に居たいって思うの！！！！強く！！！」

ダンデは呆然とその説明を聞いていたがハツとした（よくなるな）そしておもむろに紙の束をワイシャツの胸ポケットから出し、つらつらと何かを書き始める。

「・・・では、喜代殿。先ほど俺の中で何かがぷつりと切れてあのような

事を仕出かしてしまったのだが・・・コイと何か関係があるのか？」

「ああ。そう。きれて、いたんだ。・・・うん。あるよ。それは理性の糸だ。

あたしも切れたことがあるから、その時の感じはよく分かる・・・

「  
瞼のうらに先生の笑顔が見えた。

・・・あたしは、あの時先生の笑顔を崩そうとしたんだ・・・

「・・・よどの。喜代殿！」

「え！な、ななな何！！？・・・てか近い！」

両手を突き出し目前まで近づいたダンデの顔を覆う。

「・・・すまない。確かに近すぎたな。だが、どうしたのだ喜代殿。顔色が悪い。ん？待てよ？喜代殿も・・・ある？つまり、まさか

「  
ブツブツと俯き、だんだん顔を渋くさせていくダンデ。

「喜代殿も、コイを・・・したのか？いつ？だれに？どうして？  
まだ思っているのか？」

マシンガンかあんたは！こ、怖い！怖いよ顔！しかもまた迫ってるし！

「朝っぱらからアツイわね、人の部屋で。」

人のくらはんからを皮肉のように強調する人物。

この部屋の主、ククア・ローズであった。

「いや。別にイチャついてなくてダンデが意味不なこというから・・・」

「喜代殿と恋について議論をしていた。ほら、これが喜代殿の意見。」  
ペラッとき書いていた紙を見せる。

え？ちよっ！何書いてるの！？

「あらやだホント、貴方達へんじんね、恋なんて理屈じゃないのよ！  
本能よ！」

ローズの目が燃えている・・・ダンデ！書くな書くな！

「なるほど・・・で、貴様に用があつたのだ。」

急に声のトーンを落とし、ダンデの目が鋭くなる。やばいかも・・・  
「何故大事な客人に物置などを与えた？余りにも酷な仕打ちだ！

一星の王ともあるうお方がなんと情けない。

この恥さらし奴が、貴様には常識を一から叩き込まなければ気が済まない！」

凄まじい剣幕でローズを責めるダンデ。ガタガタとローズが震え始める。

「や、ち、違うのよ！お願い！お願いだから常識はやめてえー！ー！ー！」

あゝあ、ローズさん頭抱えて泣き叫んじやったじゃん・・・  
しょうがないからダンデに理由を話すか、…でもなあ。

「・・・ダンデ。あそこをお願いしたの、あたし」  
ピタッ！

ローズさんの髪を引っ張っていたダンデが振り向く。

「？なぜだ？あんなホコリまみれの「だからだよ。」」

ローズ&ダンデ、ポカーン。仕方が無いね・・・

「あたし、掃除が大好きなの！ホコリっばい？大歓迎！謎の物がある？」

それを整理するのが掃除の醍醐味さ！それにあそこは日当たりが良かったし

だから、頼んだの・・・変人って思ったでしょ？」

だから言うのに渋ったのだ。面倒臭い。まあ、今更変な目で見られるのは・・・ね、慣れてる

「もとから・・・思っていたが・・・」

ダンデから失礼な発言が聞こえた。おいこら！

「キヨちゃん・・・素敵い！！！！うわゝいいなゝ掃除好きなんて！！  
いいお嫁さんの第一条件じゃない！！」

「へ？」

「うむ。そうだな、この星は整理という概念が余り無いからな。

・・・しかし、喜代殿。もう少し早く言ってくれ。・・・ほら」

ダンデの手中にはローズの栗色の柔らかい髪が1本、2本、3本・

ごっそり抜いたなー！！！！！！

「きいやああああ！！！！か、髪は乙女の「陛下はあゝ、男つしょく？」」

結局、女と言わせてもらえないローズ・・・哀れ！

・・・あれ？今、女の子の声が・・・

「あ、猫の中身もいんじゃくん。チヨｗｗウケるんですけどｗｗ」  
何がウケるんだろ？

入り口に視線を向けるとガムをクチャクチャした小柄な女の子がいた  
肌はガン黒で、垂れ目の長いまつげが少し色っぽいそして、  
黒のルーズソックス。

・・・どこのギャルやねん！！！！

「てゆくかゝその子って例のお妃って子？陛下ってロリ？」

「やだもう！違うわよクレマティス！この子はダンデちゃんの！」

「・・・はあ！？あの干からびニヤンコの！！？マジありえないんですけど！」

キラキラと笑い転げるクレマティス？という子。

誤解なんだが・・・

「五月蠅い。誤解だ。さつき俺は振られた。・・・諦めはしないが。」

ばそつと言ったようだがガン聞こえた！

「ああ、そうだ。クレマティス、お前今は誰にも仕えていないよな？」

ダンデに見られ、ガン黒ギャル子はコクリと頷く。・・・どこか顔が赤い。

「そうですが、なにかあ？」

「喜代殿に仕えてほしいのだ。喜代殿、こちらの黒女はクレマティスと言って、

この星で一番難しいと言われる女中検定1級を持つ奴だ。

・・・まあ見た目はかなりアレだがきつと喜代殿の役に立つ。」

え？え？女中？何それ？必要ないよ？

「そういうわけにもいかない。喜代殿には最高の待遇を約束したし、せめて、部屋が物置なら他の事でもてなさせてくれ。いいな？クレマティス。」

クレマティスはニカッと笑い、

「もちろんっスよー！ダンデ様の思い人の女中なんて鬼楽しそう！」

鬼ってなんだ鬼って！

「あ、あと喜代殿、喜代殿はまだこの星の事をなにも知らないだろう？」

一応、この星の言語と二ホン語はほぼ同じだからいいがこれからこの星で生きていくのだ。教育係も必要だな。」

確かに。ずっとこの城の中だけで生きるつもりはないからこの星の事についてもっと知りたいな！

「うん！で、それは誰？」

すると、自分を指差すダンデ

周りが息を呑む音が聞こえた。

「ほ、ほほ本気っスか？ダンデ様???

き、喜代様、死「クレマティス何か言ったか??」

ダンデの氷の笑顔に遮られクレマティスが顔を青くして俯いてしまった

死・・・??????

「ダンデちゃん・・・やめ「黙れ。小蠅」瞬殺。

「喜代殿、安心してくれ。喜代殿を立派な自立した人間に育てるため。

全身全霊で常識と教養を教えてあげよう。」

そういったダンデの目を見・・・

死期を悟った。

「・・・これで、もっと長く側に居れるな。・・・やはり、恋なのだな...。」

喜代はこれからの自分の運命に不安を募らせることに  
精一杯でダンデの眩きは届かなかった。

そして彼の頬が朱に染まっているのことも・・・

## 1・12・ガムの酸味（前書き）

いらっやませ。

## 1・12・ガムの酸味

「さて、と。ではクレマティス早速、喜代殿と喜代殿の部屋へ行つてくれ。」

俺は図書館に必要な書類などを探しておこう。」

言うだけ言つとダンデはさつと、扉まで行こうとする。

すると、クレマティスはあつと思ひ出したような顔をしてダンデを引き止めた。

「チョット待つつス！そういうえば、あたし二人に手紙を預かつてきたんスよ！

えゝと・・・これこれ！」

カサツとローズの手に渡ったのは、可愛らしい淡い紅色の花柄便箋。

「？誰かしら？・・・んまあまあ！！！！ダンデちゃん！  
？ちよつと！」

「どなただ？」

「アゼイリアよ！あのアゼイリア！昔よく遊んだでしょう！？金髪で大人しい子で・・・

えつと、確か今は西の方の別荘で療養中じゃなかったかしら？・・・  
・体が弱かったものね。」

そついうと、いそいそと返事を書きに机に向かうローズ。

「アゼ？・・・リア姉さんのことか！懐かしいな。ふむ、よし俺も書こう。」

一泊遅れて気づいたダンデもローズに同調する。

完全にあたしらは置いてけぼりだ・・・。

「・・・んじゃゝ行っちゃいますかゝ。」

口を開いたクレマティスにあたしは頷いた。

「あ、案内お願い系でいいっすかゝ？にしても、喜代様のお部屋って絶対豪華ですよねゝ。」

「物置だよ。」

「そっすかゝ。じゃあ行きますかゝ。」

・・・どうやら彼女にとってはどうでもいいらしい。

テロテロと廊下を歩く二人は暫し無言。

「・・・喜代様ってダンデ様の顔みても大丈夫なんすか？」テクテク  
「？うん。」「すげゝっすねゝ。その気の無いあたしでさえ顔直視はムリなのに・・・」テクテク

「あ、気なかつたんだ？」テクテク

「性格知ったらムリっす。27歳の童貞っすよ？」テクテク

「あー確かに・・・。それに、ダンデレベルで顔直視ムリだと、、

フクヤマ。サハルとかだとクレマティス失神すんじゃないね？」テク  
テク

「誰っすか？」テクテク

「あたしの星の人間。」テクテクテクテク・・・

ピタリ。クレマティスが止まった。

「・・・やっぱり喜代様はスゲーっす。」

・・・？

「なんで？」

「だって、、昨日の今日でここに連れてこられたんシヨ？なのに、帰りたいとか

言わないし、もう普通に前の星のこと話せたり、  
冷静に今の状況を受け入れるとことか。・・・スゲーっス」

ああ、そうか、、すごいって・・・？

「唯・・・地球が居場所じゃなかっただけ。あたしは薄情なだけだよ。」

「・・・そっスか・・・じゃあここは？」

「・・・考え中。」

本当は少しだけ、ここが好きになれそうなんだけどね・・・まだ、怖い。

また、白い眼で見られないか。拒絶されないか・・・

暗い気持ちがじわじわと湧いてくる。手が震える。

あの視線気にしていない訳じゃない。でも、何だか気にしたら負けな気がするのだ。

「じゃあ、あたしは頑張るっス！喜代様がめっちゃ此処がいいっていうくらい！

だって・・・自分が生きて、生かされてる場所を好けないなんて、可哀想っスから！」

・・・え？

二カツと笑ったクレマティスが眩しい。  
眩しくて、眼が痛くなる……

「……!? 喜代様!? ちょちょちょ泣かんといて下さいっすよ! え  
と、

ほら! ガムあげますから! プクッってウケるっすよ?」

あんだ、スゲーっすよ。。

「喜代様のほうがスゲーっす!」

……ほらまた、二カッてる……無邪気だな?

小さくありがとうと言ったけどどうやら聞こえてなくて、ガムを受け取り口に運ぶ。

葡萄の酸味が体中にしみて、スカッとして気持ち良かった。

頑張る。あたしも、居場所にする。やる。できる。したい……!!

だって、あたしを受け入れようとしてくれる人がいるから。  
たくさん……いるから。

「あ、着いたよ。ここ。」

……それから、あたしとクレマティスは夢中で謎のもの達を片付けた。

気づけば夕方。空はもう既に夜の藍色の方に染まり始めていた。

コンコンとノック音がした。シュルシュルと人影が出て来る。

誰だ、ゝゝ！

「喜代殿？いるか？・・・そ、そのう、もうすぐ夕食が、できるの  
だか、い、

一緒にどうだろうか？で、で、・・・ゴホンっできれば、ふ、二  
人で！！」

・・・ダンデ、ガチガチじゃん・・・

正直、疲れていたが食事は大事だ。

「ふう・・・いいよ？どこで食べる？・・・あたしの部屋？」ニヤリ

「！！！！！」

固まるダンデに苦笑しつつ嘘だと言おうとしたが、

ダンデの頭から薔薇が飛び散っているのを見て、出来なかった・・・  
この植物野郎。

「そ、そんなことはできん！こ、恋人でもない男が

婦女の部屋に夜分遅くにあ、上がり込むなど！常識に反する！！」

言いつつもつま先を入れようとするんじゃない！！

「ダンデ様キモイっすよ」

仮面を被っているからクレマティスもダンデの薔薇を見れたらしい。

「ん？え？・・・クレマティス！？居たのか？」

どうやら喜代しか見えてなかったようで、ピタリと薔薇を止めるダ

ンデ。

「酷い言い方っスね。．．．まあ、あたしは鬼優しいから  
初々しいカップルにとっておきの所教えちゃっス。」ウィンク  
を華麗にきめた。

「なぬ!?」ダンデは嬉々としてその場所を聞こうとする。

ナイス！クレマティス!．．．でも、くどいけどなんで鬼？

「ふむ、ふむふむ。わかった。．．．では喜代殿、行こう。」

すっと思われた手は、微かに震えて見えた。

たく、く、しょうがない奴。

ふっともう一つため息と苦笑をダンデに捧げて、

その手を握りクレマティスに手を振りながら部屋を出た。

1・13 ドッキング！(前書き)

ダンデ視点

## 1・13・ドッキング！

カツカツカツ…

輝かしいシャンデリアが天井に吊るされているこの廊下はこの城えは自慢の廊下だ。ただ、光が灯っていればなのだが、…、なにぶん、この廊下は余り使われておらず照明は落とされっぱなしな様だ。

まあいいが。。

そして、

喜代殿と俺はその薄暗い廊下を歩いている。

手を繋いで。

うん、ここは注目すべき点だテストにも出るぞ？

あ、ちなみに世に言う恋人繋ぎではない。

普通の…いや、普通ではないな何せ

指相撲をしあっているのだから。

「1・2・3・4・5・6」ぎぎゅーっつと音がする程強く俺の指を押さえつける喜代殿。

だが全く痛くはない。むしろもっと触れ合っていたい。

そして、俺は喜代殿が自らこの遊びに誘ってくれたという事にいたく感激していた。

…普通は負けた方が良いのだろうか？

いや、しかしわざと負けてあげても喜代殿は喜ばないな。

「7・8・9…」するりと喜代殿の指から自分の節くれだった指を

抜き、逆に押さえつける。

「1・2・3・4・5・6・7・8・9・10」

「ぎやあああああああ！」喜代殿の断末魔の叫びが聞こえ慌てて離れた

「す、すまない喜代殿！痛かったのか？」

「いんや全然！？唯、ダンデリオン？あんた、ちとKYだね？普通9秒で逆転狙うか？」

何？嫌味？いやみなのかコンチクショウ！！」

うむ、文句を言われてしまった。

……では次は8秒だな

ダンデはこの後わざと負けるまで文句を言われる事となるが当の本人が凹んでないので良しとしよう。

「あー！楽しかった！本気を出せばダンデなんて一捻りなんだから！」

晴れ晴れとした喜代殿の顔を見れて満足感にひたる

「喜代殿、もうすぐ目的の所に着く。そこにシェフを呼んで夕食を運ばせよう。」

「うえ！！？まじでもう？どんな所だろ？ドキドキー」

「俺も…実はどんな所までかは聞いてないんだ…楽しみだな。」

喜代殿さえ喜んでくれれば良いのだが…ドキドキだ。

そして俺らはいつものツル製のドアではなく鉄でできた不可解な模様の扉の前に止まった。

「……………」

喜代殿は言葉を無くしているようだ。

確かにかなりの迫力である。。。

「喜代殿、入ろう。」

ぎゅつと喜代殿が握っている手に力を込める。俺もそれに応えながら扉を開けた。

ぎぎい…

目に飛び込んできた部屋はなんて事のない簡素な部屋だった。

茶色いアンティーク調の椅子と丸いテーブルがある以外まわりは白い壁

一つだけの窓。

部屋の四隅に蝋燭が立ててあり優しい雰囲気させている。

「ダンデ、、綺麗だね。」

「あ、ああ。」

…こんな時、洒落た文句一つ言えないのか俺は……！！

「！え？ちよつとダンデ！窓見て窓！海が！！」

興奮気味で窓を指差す喜代

ダンデはああ、と頷きながら説明した。

「この星は夜間、夕方、は街が海に沈むんだ。街の人はそこら辺の大樹達に家を

作っていて、昼間はテントを張って商売をし、夕方には帰るのだ。」

「ふええ！凄い凄い！なんかガチでファンタジーだよ！……？でもあそこの海が光ってるのは？」

向こうのうすぼんやり光る場所を指す……あれは、

「りゅ、竜宮城だ。うん。あそこに居るのは特殊な種族なんだ。

城内に入れば息ができるようになってる。」

「へえーあの浦島太郎の？そうか、浦島太郎って異世界トリップだったんだー。」

ブツブツと呟く喜代殿には悪いがそれは嘘だ。

・・・遊郭だ、などと誰が言えるか！！！！

「…行ってみたい。」

さらりと爆弾を落とさないでくれ…

「だ、駄目に決まっているじゃないか！」

「やっぱり？亀助けなきやいけないんだねー。あ、ダンデはいった事ある？」

「…！！む、かし友人に連れられて…少し…」

あまり良い思い出ではない。

むしろ二度とあんな所は御免だ。喜代殿のような愛らしさなど微塵も感じられないし、

俺の仮面を無理矢理剥ぎ取ろうとしたし、それに少しも気持ち良くはなかった。

「ダンデ？どうしたの渋い顔して。」

喜代殿に指摘されて慌ててひそめた眉根を緩める。

せつかくの二人きりに嫌な事を思い出してしまったが、まあ良い。食事にしよう。

「では、シェフを呼んでこよう。キャクタス。悪いがここまで食事を運んでくれないか？」

「え…ダンデ？誰に言ってるの？何処に居るの？」

喜代殿が辺りを見回す。…見つけられはしないだろう。

こおおおおつと音がし、砂煙が舞うと同時に小さな人が現れた。  
「キヤクタスレッド！ただいま参上だ忍！！」

真つ赤な忍者衣装に身を包んだ少年キヤクタスは  
ご馳走片手にやってきた。

「ご苦労様。悪い、遠かったな。」

「うるさい呪われ王子！今日は大人しく運んで引き下がるが次こそ  
は拙者がその首

頂く忍！！」

何処で覚えたのか、、苦笑混じりにその頭を撫でてやる。

「ダーンデ…？だ、誰？その子…シェフ？」

喜代殿が変なポーズを取りながらキヤクタスを凝視している。

……………時折、キシヤーツと奇声が聞こえるが幻聴か？

すると、喜代殿に気づいたキヤクタスが目を見開く。

「お

お……………？

「おつかさん！！！！」

言つなりキヤクタス喜代殿の胸に飛び込んでいった。

な……………！！！！！！

「ひぎゃあああ！だ、ダンデ！やだやだ取って！？こ、怖いよおお  
！！！！」

喜代殿の顔は尋常じゃない程に青い。若干涙目である。

「おつかさん！！あんたおつかさんにソックリだ忍！う、うわああん！」

「あたしはまだ若いんだ！花の１７歳の乙女だー！ダンデ！早く！！」

肝心のダンデは１０才差と言うのに衝撃を受け、

そして喜代に抱き付いているキヤクタスが羨ましくて仕方が無く、一人悶々と胸を嫉妬で煮えたぎらせていた。

1・13 ドッキング！（後書き）

あーやっちゃった。。

ダンデって見せ場無いよなー――。――。

## 1・14 感謝感激雨あられ

「おつかさんー!」

「やあああ!も、もうはなしてえ!…ダンデえええ!!!」

「キヤクタス!いい加減にしろ!彼女が怯えているではないか!

女性を怖がらせるなど、常識に反するぞ!…うおい!

は・な・れ・ろ!」

キヤクタスの赤い忍者衣装が千切れるぐらい引つ張っているのに一向に離れようとしない少年とダンデ闘いは未だ続いていた。

「う、ううつ、ぐ、えぐ、ふえええん!!!」

遂に泣き出してしまった喜代にダンデとキヤクタスの動きは止まった。

「お、おつかさん?泣かないでおくんなせい!い、い、い、今すぐ離れる忍!」

ピョーンと地面に降り立ったキヤクタスはオロオロと喜代を見上げるが

喜代は腰を抜かして膝から崩れ落ちた。顔は真っ青になり、小刻みに震えている。

「喜代殿!大丈夫か?…キヤクタス、今すぐに救護室に行く!

お前はこの事を陛下にお伝えし、飯と水を持って来い!」

それだけ言い残すと、ダンデは喜代を横抱きに抱え

脱兎の如く去った。

「…おつかさん、御免なさい…。」

キヤクタスのつぶやきは夜の闇に飲まれて行った。

- - - - -

小さな声が聞こえる。。

誰の声だ？

何をいつている？

・・・けど

小さくてもしつかりした声はあたしの心臓に突き刺さる。

あたしは気がついたら青い空に囲まれ、  
青々とした草原の上に居た。

懐かしいランドセルの重み、春の風。

少年達が中央でたむろして何かをしている。

「ねえ、何を・・・してるの？」

近くにいた坊ちゃん狩りの男の子に聞く。

が、無視されたので少し場所をずらして彼らの手元を遠目で覗く。

何かが次々と彼らの手から出て行く。さらに目を凝らす。

・・・たんぽぽだ。首だけの、たんぽぽ。

どうやら茎から筆り取って、誰が一番遠くへ飛ばせるか競っているらしい。

ここまで見た瞬間、あたしは全て思い出した、  
これがいつの時か、そしてこれから何があるか・・・

でも、あたしの口は止まらない。

「・・・そんなことしちゃいけないよ！たんぽぽだって生きてんだよ！？」

自分がそんな風に首取られたらどうすんの！？」

あたしの体はその群れに居たリーダーっぽい男の子に飛びかかり、  
・・・呆気なく地面に叩きつけられた。

「はあ！？んだよいきなりウゼエな！たく、く、ブスが、調子こいてんじゃねえっつーの。」

「いい子ぶりやがって、あ、つーかお前んとこの父ちゃん再婚したんだってな。」

ウチの母ちゃん毎晩、あえぎ声がうるさいってばやいてたぞ

？」

「マジ？やべえなお前の新しいママちょく盛ってんじゃん！」

「ぎゃはは！やべえ！やべえ！やりまくりママじゃん！」

そんなセリフを吐きながら最後にあたしに砂を蹴って浴びせかけ、  
少年達は去って行った。

悔しくて泣きそうになり、慌てて下唇を噛む

あんなの嘘だ。

そんな大きな声出るわけないし、義母さんと父さんは彼らの悦ぶよう  
うな

低俗な事などしない。．．．．あたしは義母さんを信じる！

カチャリとドアを開ける。もう夕方で、そろそろお父さんも帰ってきているだろう。。。

「ただいま。」精一杯、笑顔を作って入る。

温かい声が聞けると思っていた。．．．その時まで

．．．ああ、あたしは真実を知るには幼すぎたんだ．．．

耳に聞こえる獣のような咆哮も、ベットが激しく軋んでいる音も、汗と何かが混ざり合った独特の匂いも、全て、

消したい。

そう思つて、目を閉じる。

すると、一瞬だけ包まれたようなぬくもりが降ってきた。

一粒、

涙を落としたら、頬を撫でられる。

誰？

誰？

「だ、れ？」

「気がついたか？喜代殿。」

目を開ける。

猫のような瞳孔が視界いっぱいに見えた。

「ダン、」

「喜代殿、心配した。・・・良かった、気がついてくれなかったらどうしようかと、」

肩に埋められたのでダンデの顔はよく見えない。

トントントとゆっくり宥めるようにダンデに背を叩かれた。

「うなされていた。。喜代殿、深呼吸を試みなさい。」

？

すーっはーっすーっはー、

「うん、後は飯を食え、人間は卑しいことに腹が満たされれば少しは

幸せになれるんだ。」

どんつと置かれた井の余りの大きさに

啞然とした、

しかも中身はお粥でちょこんと小さな梅干しが一つ。

「・・・つぶ、こんな、食べれないよ。」

思わず吹き出してしまった、

すると、ダンデはあたしのほっぺたを驚掴み、己の顔に近づける。

「そうだ、喜代殿。笑うんだ、腹の底から恐怖も、嫌な事も全て、

吐息にのせて、さん、はい!!」

・・・。。。。。。。。。

「さん、はい!」

・・・。

あは？

「あははははははははは!」

てめえが笑うのか!!

ダンデが顔を赤らめて笑うので嘘笑いではないらしい。

釣られて笑ってみた。

「  
ふ  
^  
^  
^  
^  
^  
^  
^  
」

ダンデ、さらに爆笑。

くそ！やけくそだ！！！！

[illegible]

・  
・  
・  
・  
・  
あ、なんか良い。

ダンデもあたしも、なんも面白い事などないのに笑って、互いに向き合って笑顔を見せ合って、

ああ、うん。

笑い合うつて素敵なんだな。。。

ここに来てからあたしはちよっぴり救われてばかりだ  
感謝感激雨あられ。

もう少しだけ、笑い合いたいな。よし、もう少しだけ……

しかし、事態を聞きつけ飛んできたローズに二人は見つかり  
即

精神科行きとなった、

## 1・15・小さな異変

シャッシャシャッシャ…

「はあ。」

シャッシャシャッシャシャッシャシャッシャシャッシャ…

「はあ。」

喜代はここ最近物置の掃除ばかりし、塵一つ無くなった床を未練がましく竹箒ではきつづけ時折、ため息を溢していた。

「なんかあつたんスカねー？喜代様。」

「うーん、分からないわ、、もしかのもしかで、乙女のお悩みかしらん？？」

「陛下」喜代様は元から乙女ツスよ？」

「いやん、ち・が・う・わ・よ 乙女のお悩みって言ったら、アレしかないわよ！」

喜代がここに来て一週間が経とうとしていた。そして、

喜代の所に遊びに来たローズとクレマティスは喜代の異変に気づき、

こつそりツルの扉の隙間から様子をうかがっていた。

・・・後ろに迫る影には気づかず、

「喜代殿は悩んでおるのか!？」

焦ったような声に二人は後ろを振り向く

そこには・・・

Yシャツを来て帽子を被った

今日はどうやら仮面をして居ないらしいダンデリオンが大量の本の

山を抱えながら  
突っ立っていた。

ローズはこれから言おうとしていた言葉を慌てて飲み込む。  
非常にダンデリオンには不愉快な内容であったから。。。

「あらやだダンデちゃん！・・・貴方って本当に空気の読めない子  
ね、何だってこんな時に

そんなんじゃ将来女の子にモテないわよ？」

「現在進行形でモテたことなどない・・・で、喜代殿は何故悩みな  
ど、！？」

この世の終わりみたいなおーラをしてズンズンと迫り来るダンデに  
少々閉口しながらローズは  
しぶしぶ答える。

「だ、だからきつと恋しい……………なんじゃないかな？って、、

お、女の子のため息なんてそれ以外にないのよお！」

ピシリ。

何かが固まった音。

「いや、それ以外にも色々あるツスよ。ガムが髪についたり、  
？ダンデ様？何で動かないんスカ？……………応答無しツス。」

「・・・あららホント。ダンデちゃん？おい、まあ、しょうが、  
、ないわね」

ローズがポリポリと頬を掻いていると

それまで返事も何もなかったダンデはおもむろに  
右手を握りしめると何かを呟く。

瞬間。

シュルルルルルルッ！！！！

ツタがダンデの握りこぶしから出て来て床に到達する。

さらに何かを呟くダンデ。

ゾルッ！

気色の悪い音がしたと同時にツタから何本もの棘が生える、、と  
っても鋭利だ。

「・・・どいつだ、何処のどいつだ、喜代殿のことを誑かすような  
腐れ外道は！！！！

殺る。確実に仕留め火で炙り、目玉をくり抜き、蜂の巣にし  
てやる！！それから、それから、」  
目が完全にイッっちゃっている。。

そして、一介の女中と王様でしかない二人は余りの激昂に顔を青ざ  
めさせる。

そしてダンデはギリギリと歯を食いしばりブンブンとツタを振り回  
し、更なる拷問を  
思案している。

すると、ツタが壁にブスブス突き刺さって壁を壊し、城内が見る見  
る内にボロボロになっていった。

やっと我に還ったクレマティスはボロボロな城を見て、さっと  
ダンデを止めにかかる・・・ことは流石に勇気がないので説得を試  
みた。

「ね、猫仮面様？ま、まだ喜代様が恋しいとは決まっていッスよ？

第一、相手だつて分からないんスよ？お願いッスから止ま  
つて下さい。頼むッスよ。。。

「…………喜代様は、散らかす人は嫌いって言っていました  
よ。」

最後の一言でカチーンと音がするくらい固まったダンデを見てクレ  
マティスは  
驚きを遥通り越して最早呆れた。

ダンデはだらりと腕を垂らし、重いため息をつく。

「…………もし、喜代殿の好きな男が、俺と正反対だったら、俺は、  
どうすれば、」

ぼそりと重々しく落とされた言葉と片手を顔につけたダンデにロー  
ズもクレマティスもすこし彼を  
哀れに思った。

ローズは失恋しているかもしれない（一回フラれているのもうし  
ている）

弟に何か慰めの言葉をかけようと口を開いた。

「ダンデちゃん、まず、そのツタをしまいなさい。」

女の子の前ではいつも紳士でいなきゃ！あと、可能性は0じ  
やないんだもの。。。

せつかくの恋なんだもの、精一杯やって、玉砕するならス  
カツとよ！

「…………ガンバんなさいよ！！」

バツシーン！とダンデの背中を力強く叩き、喜代の部屋の前に

立たせる。

「行って、聞いてらっしゃい。何故悩んでるか、そんなもって力になっただけ」

株をガンと上げて来なさい!!」

グツと親指をたてるローズはとても遅い。

「・・・兄貴、「殺されたいかしらん?」、、姉貴。ありがとう。」

まさに姉弟愛!!

クレマティスは感動の涙を滝の如くドードーと流す。

ダンデは深呼吸をした後、真顔になって、ノックをした。

「・・・はい。。。」

やはり、喜代殿は何か落ち込んでいる。。

うん、自分の失恋よりも今は喜代殿のことだ!!!

シウルツとツルが完全に開くと喜代殿のクリツとした目に射られた。そしてその目は大きく見開かれ、

顔は口を真一文字に結び、覚悟を決めたような表情になった。

「・・・遂に来やがったな。・・・さあ、あたしは逃げも隠れもしない!」

殺るなら早くやってくれい!!!!」

意味不明な言葉を吐いた喜代殿はその場で正座をする。

・・・殺る?

随分と物騒な話だな。。

自分はその数百倍物騒なことを言っていたのだがダンデは覚えがな  
いらしい。

「喜代殿？あの、どういうことだ？全く話がみえない、、」  
すると、喜代殿はすつくと立ち上がりキツと俺を睨む。  
若干ウルウルしていた。

・・・キュン。

只今ダンデの胸中で不穏な音がしたがあえて無視しよう。

喜代は息を短く吸うと、  
「もういいじゃん！こんなに一週間も地獄のお勉強時間がいつ来る  
か、いつ来るかって

悩んでいるのもういやなの！どうせ後にも地獄先にも地獄  
なら早いほうがいいのー！ー！」  
という悲痛な叫び声をあげた。

じたじたと地団駄を踏む喜代に  
一瞬ポカンとしてしまったが、ダンデはああ、とどうやら納得した  
らしい。

直ぐに喜代に説明をする。  
「喜代殿、すまない。何分資料集めや仕事が忙しくてこんなに空い  
てしまったのだ。。」

だがもう大丈夫だ。今日から始められるよ。」  
そついうとよつこらしよと扉の前に置いておいた本の山を持ってく  
る。

バサササー！ー！！！！

その量に言葉をなくす喜代。

「そうか、そんなに心待ちにしていたのか、、悩むくらい・  
・！！」

歡喜の声を漏らすダンデは喜代が恋患いじゃないのとダンデの授業を待っていてくれたのだと都合よく解釈をし  
ダンデは嬉しくて嬉しくて、今にも頭から薔薇を飛ばそうとしていた。

「あ、喜代殿、問題集も沢山用意しておいた。一緒にぜんぶやろうな。

・・・う、嬉しいか？」

もじもじとハニカミながら出されたざつと厚さ1mはあるであろうそれに

喜代の顔は引き攣る。

・・・地獄なんてもんじゃなかったな。。。

ニコニコと微笑むダンデと苦虫を噛み潰したような顔の喜代をみていた

ローズは自身の王様になるためのマナーなどをダンデに教わった時の事を思い出す。

・・・キヨちゃん。お愁傷様。ダンデちゃんあなるともうダメなの。。。

心の中で喜代に合掌。

「では、早速やるか！まずは、、ん？喜代殿ちゃんと、席につけ。

・・・ほら。」

ぎゅっと手を握られ席に導かれる喜代。  
笑顔のダンデの瞳にひたりと射抜かれる。

・・・トクン

あれ？

・・・心臓がはねた気がした。

・・・握られた手が熱い気がした。

・・・ダンデの笑顔が眩しい気がした。

その小さな異変の正体に喜代が気づくのは、  
もう少し後。。

## 1・15・小さな異変（後書き）

だああああ！

できたあ！風邪なのに！明日卒業式なのに！！！！

まあ、いいか。ちなみに教師マンなダンデのモデルは母だったりします。

お気に入り登録、評価共に増えて感激しました。

ありがとうございます！！！！

## 1・16 歓迎会その一（前書き）

いらっやいます

## 1・16 歓迎会その一

ガリガリガリガリ、、、、

ガリガリガリガリ、、、、ガリガリガリガリ、、、、

「喜代殿、今は何ページだ？」ガリガリガリガリ

「24、」ガリガリガリガリ、、、、

「では、25ページに入ったら今日はやめて夕食にしよう。」ガリガリガリガリ

「ん、、でもさ何であたしは高校の数学を解いているのかね？」

「喜代殿は高校生であるし、勝手に連れてきてのだから勉学の面倒ぐらいはいくらでも見るさ。」

ガリガリガリガリ、、、、

「ふむ、では何でダンデは高校の数学が分かるの？あ、後ここがわかんないよお。」

それまでダンデは隣の机（段ボールの中にあつた）で自分の書類を片していたが

ため息をつきながらあたしの糞分厚い問題集を覗き込む。

「喜代殿、さつきから一問ごとに俺を呼んでいないか？まあいいが、、ふむ、地球の学問は

非常に興味深くてな妃探しに俺が地球に行った時、こつそり小中高の学校に行つて見つからないように授業を

受けていたんだ。。。それで殆ど地球旅行の期間を使い果たしたな。」

このガリ勉め。

「最後の一日。大臣達は高校生がいいと言っていたし、電車内で宇

宙船を踏みつけられ、

時間がもうなかった時に喜代殿が拾ってくれたんだ。まさに喜代殿は、救いの女神だった。。。」

おえっ。キシヨ。キシヨ。キシヨ！

「うん、本当に喜代殿が妃にならなくてよかった。。。あ、しまった、、で何処が分からないんだっけか？」

うつとりと感傷に浸っていたダンデはすつと問題集に目を戻す  
・・・もうそろそろ夕方になりかけているなあ。

すると、ノック音がして扉が開いた。

「喜代様〜。ご飯ツスよ。今日はなんと！ステーキスよ〜！！  
マジパナいッス！」

へええ！

ステーキ！？この星にあんの！？

「わーい！行く行く！今すぐ行く！」

「25ページまでやれ。」

「ええええ？何でさダンデの馬鹿！・・・・やります。調子こいてすんません。

マジすんません。殺さないで頼むから。」

鬼のように頭から棘を生やし、威圧的なオーラを醸しまくるダンデに即降参した。

ガリガリガリガリ、、

「で、ここはこの公式を当てはめて、やってご覧。」

「えつと、・・・で、でき、た？」問題集をダンデに渡す。

「うわ、なんスカこれ？」

「クレマティスうるさい。ふむ、正解だ。よし良くやったな喜代殿。」

わしわしと頭を撫でられる。うん、今日渡されて一日で全問題集25ページ

やったのだから、このぐらいは褒められるべきなんだな！嬉しいんだな！

ニコニコした喜代に少し驚き、ダンデは頬を染め更に荒々しく頭を撫でる。

・・・今日はもうこの右手は洗わん！！！！

馬鹿な決意を胸に秘め、ダンデは喜代と共にリビングに行った

リビングにはもう既に何人が集っていた。

「あ、来たのねキヨちゃん、ダンデ！今日はキヨちゃんの歓迎会をしようと思って！」

ルンルン気分ではしゃぎ回るローズ。

「ちーっす嬢ちゃん。覚えてるか？お茶目でキュートな郵便配達人。ハイド・ランガーでーつ。」

100パーセントの無表情と死んだ魚の目のぶっちゃけ作者も存在を忘れていた郵便配達人もいる。

「今なんか失礼な紹介の仕方しやがったな！！！！」  
急に上を見上げて叫ぶハイド。

残念ながら周りには分からない。

「わあ！おでこさんもいるんですね！？今日も素敵な、・・・伸びました？」

声をワントーン低くさせて聞いた喜代に何処か勝ち誇った感じでハイドは答える。

「ふっ。１ミリ、、、な？」

何が、な？だよ！！！！

周りは頭の中で総ツツコミをいれるが、喜代はショックでその場に崩れ落ちる。↑馬鹿

それをみて少しびっくりしたハイドはまた少し微笑むとポンポンと喜代の頭を撫でた。

「よしよし。よく聞け嬢ちゃん、人間誰でも成長すんだ。まあ、もし、嬢ちゃんが

前の方がいいっつーんなら切ってやるよ。・・・だから泣くな！」

別に泣いてはいなかったのだが。。

しかしその言葉と手にあたしはハッと気づいた。

この人って、この人って！！！！

「お兄ちゃんっばい！」

「喜代殿に触れるな。刺すぞ。郵便配達人。」

ハモった声の方向を見るとトゲの生えたムチを持っているダンデ。ハイドの顔に冷や汗が一つ垂れる。

「お、俺にそういうSM趣味はないんだけどな？」

「趣味ではない、いたって真面目だ。」

「だ、ダンデちゃん！やめて上げて？確かに乙女を泣かせたのはいけないけど、」

ヒヨオンッ

ムチを一振りしローズの言葉を拒否し微笑むダンデ。

すると、さっと赤い何かがダンデの前に立ちはだかった。

その隙にダッシュでローズを盾にするハイド（うわあ・・・）

「おつかさんを怖がらせるな！だ忍！！小さなヒーローキヤクタスだ忍！」

かつこ良く現れたキヤクタス、、が次の瞬間には喜代の胸の中に飛び込んでいた。

「きゃああああ！だ、ダンデリオン！助けてえ！！！」

「おつかさん！いい加減な慣れてくれー！だ忍！」

「いい加減にするのはお前だキヤクタス！この前で懲りていないのか！」

一度ならず二度までも！お前だけズル・・・ごほん、離れる！」

言いかけた言葉を全力で押し戻し、キヤクタスを離れた。

全員息がゼーハー上がっている。

「・・・と、いう訳でキヨちゃんの歓迎会のはじまりはじまり。」  
「イエーイッス！」

このグダグダ感をちゃっちゃとまとめ上げたローズとクレマティスによって、

喜代の歓迎会は  
始まった。

1・16 歓迎会その一（後書き）

うーん、なんか、

すみません

## 1・17 歓迎会その二（前書き）

いらっやいます

## 1・17 歓迎会その二

歓迎会が始まって、数時間。

歓迎会の会場のリビングはシン、と静まりかえっていた。

ローズはすつと目を細め、

「ダンデちゃん。これは王様命令よ。」

と喜代に背中をたダンデに命じる

「ダーンデー。ねえってばー」するりとダンデの首に腕を巻きつける喜代。

「常識的に考えて、無いな。」腕組みをし、気難しい顔をするダンデ。

・・・己らこの空気どうしてくれる・・・

歓迎会の参加者全員が、疲れたようにため息をこぼした。

何故こんな事になったのか、、

まず、このえーなーな空気になる数分前にもどって見よう。

「ほうら！皆、そんな疲れた雰囲気になっちゃダメよん！？まだ始まってすらいらないのに！

キャクタスちゃん、お料理を出して頂戴？クレマティスは食器類の準備。

ハイドは届けてくれた荷物の中から、クラッカーを持って来て。

ダンデちゃんは、お花を出してキヨちゃんを楽しませてあげて？」

最後の指示は絶対に適当だな。とダンデは思った。

しかし

テキパキとそれぞれに指示をだしていくローズに喜代はかなり関心していた。

うわあ！なんか、やっぱり王様なんだなあ！すごい的確。

惚れ惚れとローズを見てみると、ふと疑問が浮かぶ。

「ねえねえダンデ。なんでローズさんが王様辞めたいって言った時、

ダンデが王様になろうとしなかったの？それなら、跡継ぎだの嫁だの解決したのに。」

それを聞いて、ポンポンと白や黄色のチューリップを手から溢れさせていたダンデは急に眉を顰めた。

「それは、俺が呪いを受けているからだ。、コホン、喜代殿この話はいずれこの星の歴史の授業でやろう。

今はするべきではない。せつかくの、歓迎会なのだから。」

そう言って、

ダンデはポンツと一段と大きな音をさせて鮮やかな色のハイビスカスを出し、

喜代の頭に差し込む。

「・・・綺麗だ。喜代殿がな？」

ふつと仮面の奥から優しい息が聞こえた。

な、な、！？キ、キレイとか、やめてよ！こしょばい！なんかめっちゃ身体がこちょばいいい！！！！

突如、うつひやあと奇妙なダンス（喜代にとっては照れ隠しらしい）を披露し出した喜代にダンデは狼狽えたが、

ふむ、となにか考えるように顎に手を当てたあと

ローズを呼んだ

「兄、姉貴、ちょっと。」

「なあに？ダンデちゃん。」

「舞踏会でもやらないか？その、喜代殿はよく、突然踊り出すからきつと踊りが好きなのだろう。」

どうせ踊るならうんと踊れる所がいいだろう？　ほら、リア

姉さんが来た時にでも。」

「きやー！！いい！それグッドよん！？ありがとねダンデちゃん！」

後に、ダンデはこの提案をした事を後悔する事になるのだが、まだこの時は、ダンデリオンはよく理解していなかった。

「陛下！。準備okッスよ？」

ひょっこりと二人の間に入って来たクレマティス。

気付けば、ピカピカにテーブルクロスの上には光り輝く大皿と

鳥の丸焼きを始めとして、数々のご馳走が美味しそうに並んでいた。

「じゃあ、皆食べましょう？はい、いっただつきまーす！！」

いただきます！！！！

・・・ガイガイ、キヤーキヤー、カチャカチャ、ザワザワバクバクモグモグ、、、

様々な擬音を響かせ、パーティーはかなりの盛り上がりを見せていた。

そして、成人した者が多い事より、酒が混じっている。

酒の入ったローズやその他諸々共は段々と馬鹿騒ぎをしていく、ムンムンと酒臭さが漂い、

あちこちで奇声や笑い声が飛び交う中、一番出来上がっていたローズは椅子の上に立ち上がり、叫び出した。

「はい！こりえかりや！おうしゃまゲームをはじめちゃいまーしゅー！！笑」

これが魔の時間の始まりであつた。。。

この時まで、俺は酔っ払いは酔っ払い同士で楽しくやっているようであつた。と油断してしまっていたのだが、、、

甘かつた。

酔っ払いが楽しくクジを引き合っている中、喜代殿が酒の入った杯を手にとつたのを

身損ねてしまったのはこれ以上無い失態であつたと、思う。

「あ、ちょっとダンデちゃんもとりなしゃいよ！・・・はい、

おーしゃまだーれだ！？……キヤーキヤー！あたし！あたし

王様！しゅごくにやい！？」

王様ゲームでも王様になるとは、  
全く、クジ運がいいやら悪いやら、、

ダンデが苦笑していると、ローズが爆弾発言をした。

「んじゃーあ、2番が4番にチューってことで！」  
な！？おいおい、いくらなんでもそれは冗談ですむレベルじゃないぞ？

ダンデの頭にノリという言葉は存在しない。  
常に常識に反するか、沿っているか、で決定するのだ。

・・・しかし、喜代殿は何番なんだ？  
もし当たっていたら、全力で阻止すればいいし、喜代殿も嫌がるだろうから  
まあ、いい・・・ん？

急に仮面に覆われた顔が空気にふれる感触がした。  
そして、  
頬を掴まれグリンツと後ろをむかされる。

「ダーンデー！ダンデ！あたし4なの～！えへ～チューされちゃうよ～？」

・・・心臓があり得ない音をたて、暫く動いた気がしなかった。

え？え？ちよつと、

喜代殿おお！！？出来てる！完・全にベロンベロンだ！！！！！！

何故だ何故だ何故だ！？

そしてなんだこの

超おいしい状況は！？頼に！頼に喜代殿の手がああああ！  
これで二回目だ！！なんたる幸運！！！！

しかし！ヤバイ鎮まれ俺の全煩惱！悟れ！心を無にしろ！

色んな思いが身体中を全力疾走している間、

喜代殿はヒョイと俺のクジを取る。

「・・・ああ！ダンデ2番じゃあん！！やったあ！じゃあ、ダンデ、  
・・・チュー。」

とろんと熱っぽく見つめられ

俺はこれ程までになんとも言いがたい気持ちになったのは  
初めてである。

相手は酔っ払い、相手は酔っ払い、相手は酔っ払い！！！！

迫り来る魔の手から全力で抜け出し、抱きしめてしまいそうになる  
腕を組み、

喜代殿に背を向けた。

・・・そこで冒頭に戻るのであった。

「ダンデー！チュー！して！」

何故、せがむのだ！喜代殿！！

## 1・17 歓迎会その二（後書き）

ダンデの苦悩は続くのでしたw

ありがとうございました。またのお越しを

## 1・18 押せよ

「ダーンデ！ねえってばー！」

すりすりと寄って来た喜代殿は悩殺オーラをムンムンと放っていて俺はすっかり過ちを犯してしまいそうで怖くなる。

・・・せめて、はだけた胸元を隠してくれ！

喜代が寄る、ダンデが離れる、、そんな攻防戦を繰り返して遂に部屋の中に来てしまい、喜代がダンデの膝に乗り込んでダンデの逃げ道が塞がれた時にハイドは欠伸をしながら  
気だるそうにダンデに言葉をかけた。

「おーいお二人さん。俺もう眠いんだけどさ、もうそろそろ終わりにしない？」

ふ、わあゝあゝ、いいじゃんダンデえ、チャンスじゃん。

惚れてんだろ？

好きな娘にチッスなんかそうそう出来ねえんだからよお。」

茶化しながら言っているが、実は相当退屈して眠たくて仕様が無いのだよ？君ら。

このハイドの言葉はかなりの効果があったらしく、ダンデはピクリと肩を震わせ、  
ずっと顔を引き締める。

やっとやるか！！！周りが期待に目を輝かせた瞬間、

「愛しているからこそ、してはいけないのだ。」

決意を孕んだダンデの物言いに、一同はハア？となる。

「きつと、喜代殿は酔っ払っている。それで判断力が低下して、こ

の様な事になっっているのだ。

もし、そんな時に貴様らの言うノリとやらでキスを強要されて好きでも無い男からされてみる。

後できつと喜代殿は、酷く傷つく。・・・それだけは絶対にしてはいけないのだ。」

ダンデの一人ごとのような呟きは、部屋に木霊していく。

余りの冗談の通じ無さに全員は完全に酔いが冷めてしまっていた。そんな中、凜とした声が響き渡る。

その声の主は、酔っ払っているはずの喜代であった。

「ヘタレ。

もう、ダンデなんかヘタレだよ！ずうつと思ってたけど、好きになったらそんなにモタモタ

してちや駄目なんだよ！思い立ったが吉日なんだよ！

・・・じゃないと、佐々山先生みたいにあたしもなっちゃうかもよ！？佐々山先生はなー、佐々山先生はなー！あんな、仕事熱心な態度しやがた癖になあ！

それなのにいい、こ、こんにやく者とかなあ！あり得ないっつの！

ちくちよーう！子どもだからってなんだよおお！法律がにやんだよお！そんなにゃの、愛の前では、、むにゃむにゃ…」

それだけ言うと、喜代殿は糸が切れたように俺の胸に頭をもたれ掛け、

すうすうと寝息をたてはじめた。

余りの出来事に重苦しい沈黙が降りてくる。

リビングのご馳走やらなんやらが散乱した状態はひどくこの空気の不釣り合いで、

何処か滑稽にも見えた。

そして、気まずい空気が漂う中だったが、ダンデはそれどころでは無かった。

佐々山先生……とは、

ダレダ……？愛の前では、だと？

喜代殿、だれなんだ。。喜代殿の何なのだ！

誰だ、どんな奴だ！

おい喜代殿！

頼むから、何か言ってくれ

喜代殿！

喜代殿！！！！

喜代殿！！！！

激しく心の中で問いただしても肝心の御人の香気に愛らしい寝息しか聞こえない。

手を見ると微かに震えている、、動揺を隠せない俺は、歯痒い思いでギリギリと

下唇を噛む。脳内にあらぬ妄想が次々と浮かんでは消えていき、さらに自身の心をかき乱していく。

同じ疑問が繰り返し頭に反響して頭痛もして来た。

ダンデのヘタレ！

喜代殿！そうなのか！？おれは、ヘタレなのか？？どうしたらいい！？

どうしたら、喜代殿の理想に近づくんだよ？・・・教えてくれ！誰でもいいから！！

そう思い、ぎゅっと目を閉じて懇願した瞬間。

肩にかすかな温もりが伝わった。

おそろおそろ頭をあげると、見知った顔が並んでいた。  
俺の肩に手を置いたハイドがふわりと微笑む。

目の前に光が差し込んだ気がした。

これ程までに頼もしい人間だと思ったことはないぞ、ハイドよ！  
そして、今まさに俺を救ってくれるだろう、ハイドが口を開く。

「もう寝るぜ。」

そして、周りの人間もその言葉にうんうんと首を縦にふった。

・・・そう言う奴らだよ、お前らは、、

そうして、奴らは早々と会場を去って行った。

・・・ふう、ああもう、なんか毒気が抜かれたからいいや。とりあ  
えず、

今は小さくYシャツを掴んで居る小動物さんをどうするか、、だ  
な。

はああっと何処か呆れたような、吹っ切ったようなため息をつきな  
がら、

ポンポンと愛しい背中をたたく。

喜代殿、、俺はまだ喜代殿の理想が良く分からないけど、勉強す  
るよ。勉強は好きだし、

喜代殿はもつと好きだしな。。。

ダンデリオンは二人しか居ないリビングを見渡し、もう一度短いため息をついて、  
ぐっすり寝ている喜代を見つめる。

思い立ったが吉日・・・か。

少しずつダンデリオンの顔が喜代に近づいていく、

喜代が額についた唇に気がつくことは最後まで無かった。。。

## 1・19 朝っぱらから騒々しい

ヒヨウヒヨウと、冷たい風が頬に当たる感触がした。

「・・・ん。んむうう。。。」

まだ起きたくなくて、暖かい場所を求めて身じろぎしていると、バサッと暖かい毛布をかけられた気がした。

ああ、こりやどうもご親切に、、ちよいと顔が寒くてねえ。

・・・あ、なんかあったかくてかたい物にたどり着いたぞ？

なんだろう。この感じ、懐かしい。この温もり・・・って

うう、嫌だけど、目を開けてみよう、気になる。一体なんなんだこれ？

・・・なんだ、ダンデじゃん。びっくりしたなあ。

まあ、いいやお休み、これでもう少し寝られ、る。むにゃむにゃ・・・

！！？？？

ちよいと待って！？衝撃的な事が今さらっと流されていたぞ！？

まさかの事実を確認するべく、

ゆっくり、ぎこちなく首を右横に曲げてみた。

もそりと何かが起きてきた。

「ふ、わあゝああ。。。喜代殿、早く起きなさい。

早寝早起きは健康維持の常識だからな。」

と言いつつ、うぬぬ・・・と伸びをするダンデに、  
あたしは何を言っているかわからず、口をパクパクさせた。

・・・・・・とりあえず、起きよう。

「ふむ、おはよう喜代殿。」

くしゃくしゃになった、（元からくしゃくしゃ）の髪をガシガシと  
掻きながら、

ダンデは挨拶をしてきた。

「お、、はよう、、あのさ、ダンデ？」  
なんでここにいるの？

その疑問を口にしようとした瞬間、

ちゅっという音がほつぺた辺りで聞こえた。

目の前にいたはずのダンデの顔は、あたしのほつぺたにくっついて  
いて・・・

あれ？あれ？あれ？

「喜代殿・・・？」

「きいやあああああああ！！！！！！！！！！」  
パアアアアアアン！！！！

青い空いっぱい、乾いた音が響き渡った。。。

ところ変わってここはローズの寝室。

チュン、チチュン、チュン。

「うーん！良い朝ね。そう思わない？ベイアーちゃん？」

細っこいが逞しい二の腕で抱き上げたフリフリのクマのぬいぐるみに話しかけながら、ローズの朝はスタートした。

朝はやっぱり紅茶よねん。何にしようかしら、ハーブ？それとも・  
・うーん。。

途端、

ローズのうきうき紅茶選びタイムは、けたたましい音と共にかき消された。

ん？なによなによ今の音！？なんだか女の子の叫び声も聞こえたよ  
うな・・・

やだあ！こわい！！

大の男がベットの上で身をくねらせながら怖がる様の方がよっぽど  
恐ろしい。いやむしろ、おぞましい。

「ちよつとダンデチャー！来てー！なんか外が怖いことになって  
るのよー！」

テトテトと寝室から這い出して、ダンデの寝室に向かった。

そして、音の元凶であるダンデの寝室では・・・  
会議がなされていた。

「す、すまなかった喜代殿。そのう。俺も少し酔っていたみたいで、  
あと、寝惚けていて・・・」

ダンデはハンモックの上での正座はキツイらしく、

グラグラとバランスを取りながら説明（言い訳）する。

「言い訳無用！」

般若か！っていうくらいの喜代の顔にうな垂れるダンデ。

「だいたい！健康の常識を説くくせに、なんで恋人でもないあたしとあんたが

同じハンモックで寝ているのさ！」

「……実は」

「何？もっぺん言ってみ。」

「ごめんなさい。」

「え！？はい！？そこへ来てのごめん！？いや、ふざけるな。ガチでざけんな？」

そして、さらに喜代の機嫌を損ねたダンデはこんな事を考えていた。

「いや、喜代殿。実は俺もよく覚えていないんだ。」

覚えているといえは覚えているのだが、

確か、喜代殿と二人っきりになったあとに喜代殿を寢室に送り、

一人でこのハンモックで飲んでいたら・・・

忘れた。

駄目だ、完・全に忘れている。

なぜだ？なぜ喜代殿がここにいる？

そして、俺はなんであんな事をした？あんな、恋人にするようなことを、

うーんと一人で考えごとをしていたら、頭の上にゲンコツをお見舞いされた。

「バカ！バカバカバカ！ダンデなんてスカポンバカだ！」

スカポンバカってなんだろう？

「喜代殿。スカポン馬鹿とは？・・・うわ！」

どこのボクサーかと間違うくらいの華麗なアッパーをダンデは寸で、かわす。

「す、すまない喜代殿！本当に、キスなどする気はなくて！ごめんとて！」

ポカポカとそれまでダンデの胸を叩いていた喜代はハッと手を止めると

顔を真っ赤にして頭を掻き毟った。

「ぐああああああ！言うな！言わないでよその言葉！！なんか一気に

自覚しちゃったじゃん！ダンデのバカ！」

もはや、半狂乱となった喜代を必死で宥めようとするダンデはもうかなりへとへとになっていた。

ガラッ！

突然、

喜代の部屋の隣の窓が開けられた。

「ダンデちゃん！どうしましょう、外に何かいる、、、あら、お邪魔だったわね？」

「ごめんなさ〜い！うふふ！！」

この状況をみたローズはなにを勘違いしたのか、そんな言葉を吐いた。

「ああ！ローズさあん！！うええええん！聞いてよダンデが酷いのお！」

涙目の喜代にびっくりしたローズは一瞬顔を無表情にして、ダンデをギロツと睨むと低い声で叱りつけた。

ゴゴゴ・・・と地鳴りが聞こえて来る。

「おい、女の子泣かせるたあ、こういう事だダンデリオン。てめえ、ブチ殺されてえのか。ああ？」

叱るという限度をぶっ飛んでいるセリフで叱るローズに逆に喜代が堪らずダンデの背中に隠れてフルフルと震えた。

「へ、陛下！申し訳ございません！喜代殿の事は十分に詫びるのでどうか、怒りをお鎮めください！喜代殿が怖がっていて、」

今度はガクブルの喜代を宥めにかかる。

「あら、そう？ごめんねキヨちゃん！・・・ダンデ、次あねえぞ。爽やかな笑顔で素晴らしい残すと、サツと窓を閉めていった。

何だったんだあの人は。・・・いや、でもかなり怖かったなあ。。喜代はローズが去った事を確認すると、ホッと一息ついた。

「はあ〜。ありがとうダンデ。いやもうメツチャ恐くってさ〜。」  
「いや、気にするな。元は俺のせいなのだし、」



そうだな。

あ、でもね二人だと結構温かいんだよ。・・・やっぱりこの感じ、懐かしいんだ！。

お母さんとね、よくこうやって寝てお父さんを待っていたんだ、、あ、頃は、ホント、たのし・・・むにやむにや…

・・・喜代殿は幸せだったのだな。。おやすみ。

1・19 朝っぱらから騒々しい（後書き）

なんなんだよあんたら！

とツツコミたくなるお話でした。

## 1・20 お料理！？教室

次に起きた時はちょうどお昼どきだった。

「・・・お腹減ったなー。ねえダンデ、なんか食べ・・・あれ？」  
隣を見るとそこにいたはずなのに毛布の中はもぬけの殻であった。  
？あれ？もうどこか行ったのかなあ？  
ヒヨウと胸にさみしさがよぎった気がした。

「あたし、どうやって部屋に入ったらいいんだよ。」  
とりあえず一番の問題を口にしてみる。  
しかし、呟いたところで解決はしてくれないので、  
やっぱり頭を悩ませた。

ダンデはどうやって入ってんだろう？  
瞬間移動？いやいやそんなファンタジーな事はないっしょ。  
じゃあ、なんだろう。ツルにつかまって・・・無理。  
なんだよこのツル、ヒヨロヒヨロやん。  
ダンデはそこそこの体重だと思うよ？

じゃあ、、、、、、どーしょ。どーしょ。

少し頭痛がして来たので気分を変えてもう一度考えるため、街を見  
てみる事にした。

鬱蒼とした木々の隙間にちらほらとテントが見える。  
あれが市かな？  
いいなー行ってみたい。  
そう思っていた瞬間。

顔に何かが覆いかぶさった。

「わぷ！！！なに！？なにこれ！？」

よくみると何かのポスターらしい、何々、えーと、

【突然！お料理大会！参加者募集中！貴方の腕前を披露してみませんか？

一等の方には今話題の魔法の箒をプレゼント！」

な、な、に？

ぐるぐると賞品の文字がループする。

魔法の箒魔法の箒魔法の箒魔法の箒………

「なにiiiiiiiiiiii！！ちょ、急がなきゃ！だ、ダンデ！ダン  
デエエ！！」

魔法の箒つてきつとあれだよ！

大きなゴミとかを瞬時に集めてくれたりするんだよ！

ああもう！早く何か作らなきゃいけないのに！ええい、もういいッ  
ルをつたって行こう！

ガシッとツルを掴んだとき、いきなり頑丈そうなロープがあたしの  
部屋から

垂れ下がってきた。

不思議に思ってた上を見上げるとチラリと赤い影がよぎった。

あれは、キャ、キャクタス？だっけ？・・・助けてくれたんだよ、  
ね？

厚意に甘えて、登ったらもう部屋には誰にも居なかった。

・・・ありがとうぐらい言いたかったなあ。子どもは苦手だけど、

あの子は少し好きになれそう。

「あ、しまった！おおい！ダンデー！お台所って何処ー？」

てるてるとダンデを探しながら歩いていると、

クレマティスに会った。

「あ、クレマティスー！突然だけどお台所って何処？」

「？お台所ツスカ？そつすね」。確か向こうに会った気がスルツス。  
一緒に行きますか！」

「あ、いいね。お願い！」

しばらく歩いていると、小さな扉にたどり着いた。

「ここツスカ。ではごゆつくりツス！」プクーとガムを膨らまし  
ながら彼女は去って行った。

ふーん、ここか。．．．よし！！やるかあ！！！

- - - - -

「ダンデ様。この書類はどうしたらいいでしょうか？」

「奥の棚にいれとけ。」ガリガリガリガリ…

「ところで、陛下の女性化計画はどうなってるのでしょうか？」

「研究員がもうすぐで帰る頃だ。こちらで研究施設を設け、持ち帰  
ってきた資料を

応用しながらやる。．．．なあ、さっきから異臭がするのは

気のせいかな？」

「え？何かおつしやいまし…」

彼が言い終わらない内に、爆音がした。

「！！」なんだ？奇襲か？いや、厨房で聞こえたな。。。

嫌な予感がする。火災などしていたら大変だ。

「ウッド、様子を見てくる。消防器具を用意しておけ。」

「え！？あ、はいすみません！今すぐ！」

ツカツカツカツカ……勢いよく扉の前に立つと慎重に中を覗く。  
無残に色んなものが辺りに散らばり、最早形をなして居ない。  
異臭がしているし、足元には何かの臓器がベチヨリと落ちていて、  
そして、

誰かが倒れていた。

「……おい！無事か！？何があつ……喜代殿！！」  
急いで抱き上げた人はまごうことなき喜代殿である。

「喜代殿！しっかりしろ！返事を！くそっ一体なにが……！！」  
すると、彼の腕の中で喜代が身じろいだ。

「うつつ、ダ、ダンデ？……りよ、料理してたら、、いきなり  
具が、、爆発した。」

なんだと？喜代殿は料理をしていたのか！？

……何を作っていたんだ？

「と、トリュフを作ろうと、したら……」

トリュフとは、喜代殿の世界の甘い菓子的事ではないか。  
ぐるりと辺りの食材であったもの達をみる。

ふむ、トリュフには魚の目玉を入れるのか。

「か、隠し味。。。早く、、完成させなきゃ、いけ、ないの。」  
それを言った後に喜代殿はふつと気を失ってしまった。

喜代殿を救護室に連れていったあと、もう一度厨房に戻ったダンデは  
おもむろに腕まくりをすると、キツと顔を引き締める。

喜代殿、大丈夫だ。俺が何とかしてこの食材からウマイトリュフを

作ってみせるからな！！！！

グツと握りこぶしをして、ずんずんと大量の食材に近づいて行く。

・・・本日二度目の爆音は、それから間もなくであった。

1・21続・お料理！？教室 挿絵あり（前書き）

挿絵を付けます

## 1・21 続・お料理！？教室 挿絵あり

もの凄い音であたしは目を覚ました。

え？何ここどこ？えーと、確か料理、、ああ！しまった、早くやらなきゃ！！

ダッシュで保健室の匂いのする部屋を出ると、

第六感で台所をつきとめた。

・・・何じゃこりゃー。どうなっとんじゃこりゃー。

もうもうと煙のあがる部屋に唖然呆然になってしまった。  
棒読みの感想を述べると、そうツと中に入る。

人影が見えはじめて、それが見知った人物だと分かった。

「っダンデ！どうしたの！？何でここに！っていか何してるの？」  
同じく呆然と立ち尽くしていた猫のお面に質問を浴びせる。

「・・・喜代殿？ここの材料はきつと全て火薬が入っておるのだ。

そうだ。うん、きつとそうなのだ。」

一人うんうんと頷くけど、そんな事はある得ないよ？

「ねえダンデ、ダンデって料理した事あるの？」

「昔、リア姉さんと泥製の団子を作った事なら。」

それ違うね。

「そっかー。まあ、あたしも似たような者だし本当は三人だけど二人でも文殊の知恵は

出せるさ！ダンデ、頑張ろうね！！

一人ではもうやりたく無い！と言うことを目一杯視線で訴える。

「うむ、分かった。頑張ろう。。喜代殿、魚の目玉は常識的に使

わないそうだぞ？」

「え？そうなの？残念。」

「うん。通りすがりのハイドに聞いた。

まずは、料理の本を見るべきだともな。本には色々と書かれて居るらしい。」

少し待っている。」

スタスタと何処かへ行った彼を見送り散らかった部屋を見渡す。

・・・掃除のしがいがあるなあ！

ドシドシと大股で廊下を歩く人間が一人。

早く、早く、ローズに知らせなければ！

やばいもんができるぞあんなの・・・

「あ、ハイド様じゃないツスカ」。どしたんスカ？」

あ、クレマティスじゃねえか。・・・こいつでもいいか。あれを一  
刻も早く止めなければ。

「クレマティス！頼みがあるんだか、今すぐ厨房に行つてあの馬鹿  
王子をなんとかしてくれ！

あいつ、絶対に最新兵器を作り出すぞ！！」

「ほえ？何言つてんスカ？ちょー意味不ツスよ？だって今は厨房  
は喜代様が・・・」

「何だとお！？やべえ、じゃああの嬢ちゃんの命も危ねえぞ！・・・  
ああもう！

とりあえず、行つてくれ！頼むから！俺はまだ配達中なんだ

よ！頼んだぞ！」

風のように去って行くその背中を見ながらクレマティスは頭に疑問が一杯だった。

ナンス力あれ。喜代様の命？・・・まあ、とりあえず、様子ぐらいなら、

そう考えながら足を厨房に向けた。

シユルツシユルルルル。

「あ、おかえり〜遅いじゃん。どうだった？」

「・・・それが奇妙な事にチヨコレートに関する本が一冊も残っていなかった。」

チヨコレートの歴史等はあったけどな。」

大方、それを読み漁っていたんだろうな。。。

すっかり夕方になってきた。

これじゃあ、完成はきつと夜だな〜。

「そっかー、じゃあいいよ。やつちやお？」

「うむ。」

そして二人が手にした物は、

皮むき機と人参。

なんと素晴らしいコンビネーションであろう。  
が、

「・・・人参いらなくね？」

「最近野菜を使った甘味が多いらしい。むしろ、要らないのはそちらであろう？」

「うっん。これでチヨコレートを細かく切るんだもん。」

何故かにらみ合う二人。

「あたしの方が要る！」

「いや、俺だ。」

そんなどنگりの背比べ並の争い事を止めたのは  
呆れ顔のクレマティスだった。

「何してんスカー？痴話喧嘩？」

「あ！クレマティス、聞いてよ。チョコレート菓子作るのに

ダンデが人參なんか取り出してきてさあ！」

「いや、皮むき機など不用の極みであるぞ。」

・・・どっちも要らないッス。

バチバチと火花を散らし合う二人は止まらないので、  
何を作りたいのか聞いてみる。

「え？トリユフ。」

・・・ナンスカそれ？

「クレマティス知らないの！？甘くて、柔っこくて丸い。。。」  
???

「喜代殿、トリユフは地球にしか無い菓子だ。知らないのも無理は  
ない。」

「ええ！？こんなに食べ物が地球に似ているのに！？そっかー。ま  
あ、うる覚えだけど

やってみよう！」

気合いを入れ直した喜代とダンデは、料理に取り掛かる。

何も知らないクレマティスに爆発しそうな時を注意されながら、

ゲテモノが出来上がった。

「・・・なんか、俺が見たのと違う気がする。まず、ゲル状ではな  
い。」

他にもツツコミ所は他他あるかな？  
本能が食べ物じゃないと警報してるツス。

「だよねー。なんでこんなにゴボゴボいつてるんだろう？」

ちよつとダンデ味見する？」

え？ちよ、喜代様？？」

「うむ、見た目悪くても味は悪く無いっていう場合もあるしな。い  
ただこう。」

こーの命しらず

「ん、じゃあはい。あーん」

へラごと出されたソレはせっかくの甘い雰囲気をぶち壊す色合いだ。

「う、うむ。」そんなこと気にも止めていないダンデは少し嬉しそ  
うに

仮面をずらしてそれを喰らおうとした。

クレマティスは余りの衝撃的な場面を目の当たりにして、膨らませ  
ていた風船ガムを  
破裂させる。

「ちよちよちよ待つツス！き、喜代様！殺人！それ犯罪ツス！」

「へ？そうかな？？」しかし時すでに遅し。

モグモグと口を動かしていたダンデは口を開く。

「・・・喜代殿。食べれるぞ？舌が溶け出しそうな刺激が一瞬した  
が。」

大丈夫ツスカ！！？

少々顔が青い事にダンデは気がついていないらしい。

「え！？本当！？やったあ！これで出品出来る！」  
飛び跳ねて喜ぶ喜代に二人は？マークを出す。

「出品？何処に？」

「ん？ああ、これだよ。」

そう言つて喜代様が渡してきたのは、汚いポスター。

・・・あれ？これって、

「喜代様、これもう終わってるッス。ほら、ここ。」

「・・・え。」

「ふむ、本当だな。もう一ヶ月前のだ。喜代殿、こんなの何処で拾つた？」

ダンデの疑問は、喜代には聞こえなかったようだ。

喜代は瞳一杯に涙を浮かべると

その場にしゃがみ込みボトボトと泣き出した。

周りが慌てふためく。

「ふ、ふええええん！ま、魔法の箒がああ！」

ショック…箒欲しかったのにい！

一生懸命頑張ったのにい！！

何だったんだよこの苦労は！

もういやだ！料理なんて、料理なんてええ！！

・・・ポン。

不意に、何かが頭に乗った。

「ふえ??？」

上を見るとパタパタと黒いものが飛んでいる。

・・・フライパン？

そこには羽の生えたフライパンが飛んでいた。

「うわあ…なにあれ！面白い！」

「？唯の料理器具だと思うが。」

「ええ！？そうなの？へえーなんかいいかも！箒は残念だったけど、あたし料理もつとしたくなっちゃった。」

あたしもつと殺人したくなっちゃった・・・？

いや、幻聴ツスね。うん。聞こえない聞こえない。

「でも、どうしよう。捨てるの勿体無いなー。クレマティスも食べる??」

「丁重にお断りいたします！」

遂にクレマティスのギャル語が消える。

「・・・ていうか喜代様。あたし、今日がなんの日か知っていてそれを作ってたと思ってたツス。」

？なんの日？

ダンデを見ても首を捻るばかり。

「だから、今日はバレンタインデーツスよ！女の子が男の子にチョコを贈る！」

え？バレンタイン？とてつもなく聞き慣れた単語だ。

・・・なんでそういう文化は一緒なんだろ。。。あ、本が無かったのもそのためかな？

「ダンデ知ってた？」

「そういう恋愛行事は知らないし、知っていても意味無いだろう?」  
ずれた仮面からにつこりとされる。

あー、、、ごめんなさい。

そうか、それなら

「ダンデあげるよ。義・理チョコね?」「え?喜代様?」  
誤解を招かない様に義理をつける。

「ギリチョコ?・・・ああ、ギリギリチョコの略しか。確かにギリ  
ッギリでチョコの匂いはする。」

この野郎。

「本命のチョコじゃないって事!分かった!?」「二人共、そうい  
う問題じゃ……」

「分かった分かった。俺も地球には居たから分かる。では、いただ  
きます。」

「ダンデ様ストップ!!!」

ガバツと大口を開けたダンデはボールを抱え込み  
飲み込んだ。

・・・傾くダンデの身体。

「!!!!!!だ、ダンデエ!どうしたの!?大丈夫!?

「きゃああ!ダンデ様!い、今すぐ手当を!食べたもの吐き出させ  
なきゃッス!」

すると、ちょうどそこにハイドとローズが来た。

「おい!止められたかつて、ど、どうした!?

「え?ダンデちゃん!?ダンデちゃん!」

どうしよう。ダンデにとんでもない事しちゃった!ごめん!ごめん  
ねダンデ!

お願い目を覚まして!生き返って!

その一心でダンデの背中を摩ったり、頬を叩いたりする。

「・・・う。」

「「ダンデ!？」」「「ダンデちゃん!？」」「「ダンデ様!？」」

うつすらと開けた目を、あたしに向けた。

「ごめん。ごめんなさいダンデ!自分で処理すれば良かった!ほんと、

本当にごめんなさい!」

暫くぼうつとして居たダンデはそつと口を開く。

「・・・本命にしてくれるか？」

「うん、する!何だつてするよ!だから、だから元気になってよお願いだから!」

わあ!つとダンデに泣き崩れる。

・・・・・・あれ?

ポンポンとダンデが頭を撫でてくれるが、

嵌められた気が、、

見上げれば

にんまりと仮面で見えない筈の顔が笑った気がした。



## 1・22こ？い？

ダンデに本命チョコをあげてから、5日後、ダンデの様子がおかしい。

いや、あれから食中毒で寝たきりになつてた事じゃなくてね？

それに気がついたのは、どうやらあたしだけのようだった。

「ふわあゝ ああ。。。 あー良く寝たー。」

伸びをして欠伸をして、眠気をとばしながら窓へと向かう。

ボタンツと開けてまばゆい朝日を浴びながら、そうツと下に視線を移した。

「・・・なんだよ、今日もないじゃん。。。。」

ムツとして、主のいないハンモックを睨んだ。

ここ5日、いや、暫く救護室にいたから、、、3日。

ダンデは何故かこのハンモックで寝ていない。

「まあ、病み上がりだしね。普通は入院ものなのに2日で直したから

寒いハンモックで寝るのはまだ無理なのかも。。。。」

そんな風にひとりごちて居たら、ノックがして扉が開いた。

「嬢ちゃーん？起きてるかー？届けもんだ・ぜ！・・・うお！？起きてる！？早！。」

おでこさんだ。

完全無表情のくせにやたらと声は明るいんだなー

「嬢ちゃん？なんか酷いこと思ったっしょ？どう？切ってやったぞ？。」

しかも心まで読めるんだなー。あ、というか切った？  
ううう！

ちくしょう、今日もキラキラおでこしやがって！朝日にも勝るだとう！？

でも・・・なんか・・・はーああ。

「ん？どうした嬢ちゃん。なんか嫌な事でもあったのかい？」  
え？なんでそんな事聞くんだろう？

「んー？ははっんな顔してりゃあ一発で気づくだろ？で、どうした？」

ふつと柔らかい顔つきになるハイド。

ポンツと頭を撫でられるけど、そんなに落ち込んでいるのかなあ？

「あの、別にあたしは落ち込んでないよ？なんも、、あ、ダンデ元氣？」

あれから5日、ダンデに会って居ないから流石に気掛かりになる。

「んー？馬鹿王子の事か？ああ、ま、元氣じゃない？」

何その曖昧表現。気になるなあ。

「て、いうか良いの？一国の王子様を馬鹿呼ばわりして。」

「嬢ちゃんだつてよく、ダンデノバカ！！って言ってるじゃねえか？」

何今の、突然、九官鳥が鳴いたよ！！

・・・え、あたしの真似？

「あたしはそんな声じゃないよ！それにあたしはこの国民じゃないし！」

うん、異世界人なんだもの！」

ここに住む決心はしたけどね？

「あっそう？なら俺だって異世界人だな。しかも王子様だし。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？

「ふはっかなり驚いてるみたいだな？そうだろうそうだろう。」

あのな、俺は隣星の王子で郵便配達人になりたくてこの星に亡命したんだよ。

そんなときにローズが手助けしてくれてな、名前も、捨てて、俺はここに居るんだ。」

ぼっかーん・・・・・・・・

「・・・・あの、今日ってエイプリルフル？」

「馬鹿、エイリアンなんか関係ねえよ。」

いや、違う違う違う！！

え？嘘、嘘、王子様？うわああああ！どうしよう！

夢にまで見た。頭部輝く王子様！？うつひゃあああ！

「なあ、嬢ちゃん？独り言は小さく頼むよ。俺泣きそう。。。」

そんなにハゲか？？俺。

「え？声でてた？え？でも、うつ、わああ。。。」

顔を赤らめながら後ずさりする喜代に苦笑しながら一歩ずつハイドは近づいてく、

「何？照れてるの？・・・そうだ、嫁にでも来るか？夢にまでみたんだろ？」

ピシリッと喜代は固まってしまった。

「・・・・おい？嬢ちゃん？お返事は？」

・・・よ・め??

え?あれだよな?妻だよな?ワイフだよな?

そ、そりゃあ、嬉しい・・・よね?

【喜代殿!恋人になつてくれ!】

ああ、もうダンデの馬鹿。なんでこんな時に出てくるのさ。。

あたしの夢は神々(光光)しい位の頭の人のお嫁さんなの!

・・・そうなんだよ。

【・・・本命にしてくれるか?】

したけど、、あんなのお詫びだし!全然気持ちなんか入ってないし!!

入ってないし!!・・・ああもうダンデ五月蠅いよ!忘れる忘れるおお!

「嬢ちゃん。今、ダンデの事考えただろ?」

心臓が跳ね返った。

「ぴiiiiiiiiええええええええ!」

ズザザザザーーーーツと、喜代は部屋の壁に後ずさり、

ドオオンツと背中であつかり、

チーンとなった。

「おお!動揺してる。動揺してる!考えたんだなこりゃあ。」

身動きを取らず、ばったりとしている少女に

ニヤニヤしながら近づいて行く。(変態!)

「悪いな。嬢ちゃん。冗談だよ。もし、嬢ちゃんが奴のこと考え無かつたら、

俺も乗り気だったけどな?人の告白の最中に他の男の事を考

えるなんてなあー。

なあ、嬢ちゃん、何でダンデの事考えたのか教えてやるつか。

「

喜代の耳に囁きながらハイドは次の言葉を一息に紡ぐ。

「嬢ちゃんそれは恋だ。」

その言葉を聞いた瞬間、少女の指がピクリと動いた。  
ため息をはあつと吐き出したハイドは

「たく、まだまだお子ちゃまなんだよ。君は。いや、馬鹿王子もな？」

この言葉がお届け物。ローズからのな？心配してたんだぞ？

あいつも、皆も、・・・頑張んな。」

そう言い残すと、気を失った喜代をベットに横たえ  
静かにその場を後にした。

・・・こい？

恋？これが？いやいや嘘だろこんなの違う。

佐々山先生の時と全然違うよ。。。

ダンデの馬鹿。

佐々山先生は考えるだけでドキドキしたもん。。。

だってさ、ダンデ、ダンデ、ダンデ、、、

考えるのがあたりまえになって居るんだから。

何をするにしても、ダンデが居たからかなあ。  
ダンデが心に深く根付いて・・・

心臓が、大きく一回高鳴った

そして、全てにあたしは気がつく。

・・・あ、そうか、そうなのかも。

これも恋の一つ・・・なんだ。

頭を撫でる温もり。

・・・ダンデだ。

目を閉じていても分かる。・・・起きなきゃ、で、ちゃんとかわな  
きゃ。

「・・・ダ、ンデ。」

「喜代殿？大丈夫か？話があるんだ。起きてくれないか。」  
話？

「んんっあたしもあるから・・・ちよいと待つて。」

もそもそとお布団から這い出して、ダンデの目を見る。

たった5日なのにすごい久し振りの気がする。。。

「喜代殿。」

「なあに？」やべ、ちょっとブリっ子入った。あちゃーキモい！キ  
モいぞあたし！

「その、すまなかった。弱味につけ込んで喜代殿に本命にさせるな  
んで、

外道のやる事だ。本当に、ごめんなさい。」

床に土下座して許しを請うけど、、、そんなに重罪じゃないよ！??

外道！？今外道って言ったこの人！

日常生活で外道なんてそうそう耳にしないぜ！？

「ダダダダンデ！お、落ち着いて？全然怒ってないし、そ、それに  
そのう、あ、あたし、」

くそう！最後の言葉出せよ！あたし！たった二文字じゃん！  
魔術師が美術室で手術中より数倍言いやすいぞ！？？

「喜代殿、ここからが本題なんだ聞いてくれ、喜代殿にあんな事を  
言わせたけど、俺、この街を出て行く事になった。  
もう、二度と会えない可能性があるから。  
・・・元気でな。」

ほらいえ！今すぐ！好きって！好きって・・・え？

「なん・・・で？」

「南の方で戦争が起きたらしい。それに俺が行って鎮めてくるんだ。  
」

「いつ？なんで？なんでダンデが行くの！？」

「俺が呪いを受けた人間だからだ。」

・・・そういえば、会ったばかりの頃そんな事を。。  
・・・って！！

はあ！？何それ！？

「そんなの、わっかんないよ！！ダンデは人間じゃん！植物が生え  
てても、

人間じゃんか！！」

「喜代殿・・・。」

気がついたら、ダンデが抱きすくめていたけどそんなのどうでもいい。  
い。

「喜代殿！」

「何なのさ！その呪いって！！なんでさ！なんで・・・何なんだよ！  
あたしは、ダンデが！ダンデが好むうう！！」

背中が軋む位抱きしめられ、言いたい言葉が出なくなった。

「だ、ダンデ、、ぐるぢ、、」

しかし、そんな事お構いなしにダンデがさらに抱きしめてくる。

何なんだ・・・???

その思ったら耳元から声が聞こえた。

「・・・喜代殿、ありがとう。俺を人間と言ってくれて、ありがとう  
う・・・!!」

微かに聞こえる嗚咽に、頭に上った血がさあっと降りて行く。

何で・・・ナイトルノ？

「何があつたのか。ちゃんと教えて。泣いてる理由も、呪いについても。ちゃんと。」

「・・・分かった。。喜代殿、すまない。やはり、愛している。  
すまない。」

「・・・あたしもだよ。」

## 2・正妃の息子（前書き）

残酷描写あり。

## 2・正妃の息子

「ふむ、まずは・・・どうするか。」

ベットに腰掛けて、俺は何を話し始めようかと思案する。

喜代殿の手は、緊張からか微かに震えている。

俺はその華奢な手に触れて、握った。

その手はどこか懐かしい感触で、母さまの事を思い出させた。  
うん、

「そうだな。まずは、その時の事を詳しく教えよう。。。」  
目を閉じて、いまだ鮮やかに残るあの瞬間を俺は語り始めた。

「・・・俺が呪いを受けたのは5歳の時だった。」

「ローズ！母さまは何処か知ってるか？」

テトテトと覚束ない足取りで、庭にいるローズの所に行った。

「！ダ、ダンデ様。どうなされました？正妃様なら、向こうにいらつしゃいます。」

「そっか。あんね、そこできれいな花があっただ！あ、ローズもみる？」

「あ、よ、よろしかったら。ご一緒に構いませんか？」

「うん！でもさ、何でローズは僕にケイゴなの？お兄ちゃんだって、僕聞いたよ？」

ローズは少々狼狽えて、

何処でそんな事を聞いたのか尋ねた。

「んーと。えーっと。忘れた。」

ずっこけそうになるが必死でローズは耐えた。

「さ、左様でございますか。その、ダンデ様は正妃様の息子ですが、私めは、側室の息子ですので、身分が全く違うんです。」

「ミープーン？」

「そうです。町人と貴族ではかなり身分、格が違うように私とダンデ様にも差があるのですよ。さ、行きましょう。」

彼はそう言ったが、よく理解できなかった。

少し行くと、母さまがお茶を飲んでいた。

「あら、ダンデ！貴方どうしたの。泥だらけよ？」

「母さま！早く！さっきお花を見つけてね！見せてあげるから早く！」

ぎゅっと母さまの手を握り、勢いよく歩き出した。

そして、

見つけた時のことや、花の色を説明している途中でその場所についた。

しかし、そこに居たのは鬱蒼とした緑色の草だった。

「あれえ？無いやー。何でだろ？、あつたんだよ？本当に、

うすーい赤色で見たことの無いヒラヒラのお花。」

「そ、そうね。きつとあつたのよね。不思議・・・さあ、ダンデ、諦めてそろそろ帰りましょう？ここってなんだか不気味だわ。」

確かに、じめじめとして居て気味が悪いと思った。

そう母親が言ったので、諦めて帰ろうと立ち上がる。

立ち上がれなかった。

足元をみると、

さっきの赤い花があつて、うねうねした葉っぱが足に絡みついて来ていた。

「か、母さま。ローズ。。」

助けてと言おうとしたけど声は何故か出てこない。  
すると、葉の先端が尖って、

足を突き刺した。

「あら？ダンデ？？・・・！！！！ダンデ！貴方足が！！」

「ダンデ様！！！！え、えと、直ぐに救護班を呼んできます！」

母親達が気づいてくれたが、

葉はどんどん肉を抉り、中に侵入して行く。

激痛に声の限り叫ぼうとしたが、声が出てこない。

「ダンデ！ダンデ！！今、今すぐ取ってあげるから！！」

母さまが手を伸ばして葉を取ろうとした。

・・・！駄目だ母さま！触れてはいけない！！

とても嫌な予感がした。

「え、ちよつと、嫌！何これ！？こ、来ないで！！・・・ぐうつ！  
！」

草が母さまの首に巻き付いて、

締め上げる。

母さま！に、逃げてくれ！死なないで！！！！

その光景を最後に、目の前が深い闇に包まれて行った。

・・・目が覚めたら、薄暗い牢の中にいた。

ローズも母さまも居無い。

妙に血生臭いそこに、怖くなって身震いした。そう言えばと、足をみるとそこには何もなくて、挟れていた肉も元に戻って居る。

すると、声が聞こえてきた。

「・・・ダンデが呪いを受けたというのは、本当か？」

「はい、あの髪と、ローズからの証言で全く呪いを受けた状態と一致します。」

・・・一人は父様だ、もう一人は誰だろう。。。

「そうか、、、王位継承権は、ローズにいくことになるだろうな。

呪われ者だ。何をしでかすか分からん。このまま幽閉しておけ。」

え？幽閉？

「し、しかし陛下！ダンデ様はまだ小さい。この状況に混乱成されるかも、、、」

「構わん。呪いを受けた彼奴らはもう人間ではない。どうとでもしとけ。」

人間じゃ、ない？

「陛下！！・・・いつてしまったか。まあ、いいか。確かにこの容姿では人間と同等とは思えんな。」

餓鬼は好かんが、今後の実験台としてありがたく貰おう。」

その言葉に背筋が凍った。

人間じゃない。・・・実験台。

牢の重い、鉛で塗りたくられた扉では外の様子が見えず、何が起こつて居るのか分からなかった。

扉が開く。

外に立っていたのは先程の男であつた。

「よお。生きてるな。言つておくがお前は呪いを受けたんだ。．．．もう二度とここからは出られない。」

死ぬ事も出来ないぞ。呪われた奴は中の種が身を滅ぼして、植物にするまで死なない。」

実験してみたら分かつたと、その男が口の端を曲げて笑っているのを見て

何があつたかすぐに分かつた。

「まあ、なんだ。これから仲良くしような、492番。」

492。それが今後の自身の名前なのだろうか。

そして、一つだけどうしても気掛かりな事があつた。

「．．．かあ、さまは？ど、どうしたの？」

震える声で問う。

「ん？ああ、君の母親か、死んだよ？首を何かで千切り取られていた。」

死んだよ。．．．

「そ、んな、．．．！！うつ」

さつとあの光景が蘇り、吐いた。

「あーあー、汚しやがっててめえ。いいじゃねえか別に。生きてた  
って逢える訳じゃねえんだ。」

それに大方正妃様を殺したのは、呪いの植物だ。

その種が埋まってんだよ。お前の中に、な？お前は人間じゃ  
もうねえんだ。

分かったよな。じゃ、また明日。」

そして、再び重い扉は閉ざされていった。

母さま、母さま、、

その種が埋まってんだよ。お前の中に。  
なら、母さまを、殺したのは、、

大方、正妃様を殺したのは呪いの植物だ。

母さまを、殺したのは、、

僕だ。

僕が母さまを、、殺したんだ。

冷たい壁にもたれて、この先の事を考えると死にたくなった。

頭痛がしてきて、思わず頭に手をやる。

カサッ

葉っぱの乾いた感触に、

自分は本当に人間ではないんだと、自覚した。

## 2・2人間の身体

固く冷たいベットのの上に  
僕は寝ていた。

「・・・今、何時だろう。。。」

ここに来て随分になるが、ここには時計が無い。

あるのは、トイレとベッドのみ。

外にはたまに出してもらえるけど、楽しい事なんて一つも無い。  
いや、そもそも楽しいという感情を忘れてしまった。

何もする事がないから、どんどん過去の思い出が湧いてきて  
必ず母さまの死に際で終わる。

悲しいとも最近思わず、ただただ胸が痛くて掻き毟る。  
そして、

牢の中で何度も自身を責めた。

何故あの時花なんて見つけたのだろう。

何故早く帰らなかったのだろう。

声が出なくても、何かで母さまを逃がせたかもしれないのに、  
母さまは死んだのに、それなのに、

何で僕は、、生きているんだ。

化け物め。死ね、死ね、

もう、もう死にたい。

その頃僕の中の感情は死にたいという事だけだった。  
死にたくて仕方が無かった。

首を本気で締めた事もあるけど、気を失う寸前で  
力が入らなくて結局咳き込んで終わりだった。

僕は実験台でもあったけど、

どうやら兵器でもあるようだ気づいた。

何故なら

外に行かせてもらう時はいつも何処かの戦場で、

そこで僕は何人もの人を殺さなければいけなかった。

僕は死なない身体だから。

背中を切られようが、首をはねられようが、生き返る。

そして、身体からたくさんの

ツルを出して敵の首を落とす。

そのサギヨウを繰り返す。

何度も、何度も、敵が降参しても、泣き叫んでも。

僕には蠅を潰す事のように簡単に出来た。

死にゆく人間を見て、

自分が化け物という事を思い知った。

そして死ぬ事が羨ましく、妬み、更になぶり殺していった。

僕のその能力を鍛えたのは、あの男であった。

父様の命に従い、僕を牢に入れた人間。

母さまの死を僕に伝えた人間。

いずれ殺す予定だった、人間。

でも、殺す必要は無くなった。ある日突然。

僕の牢の扉が壊された。

何が起きたか全く分からなかったけど、

目が痛い位の光と共に

ある青年が現れた。

抱き締められて、その温かさに触れ、分かった。

僕には、人間の部分が残って居た事に。

久しぶりに、返り血以外の液体が  
頬をつたう。

青年もどうやら泣いて居て、  
その声は何処か兄を思い出させた。  
そして彼は何かを呟いて居た。

でも、僕には聞こえない。  
だって青年の体温や青年の心臓の鼓動。  
そして

僕の心臓の鼓動がうるさすぎて、聞き取れなかったんだ。

冷たい牢に、熱い二人の涙が幾つも幾つも落ちる。  
何で泣いているのだろうと思ったけど、  
結局分からずじまいだった。

それから僕は懐かしい城に帰ってきた。  
でも、帰ってきたくは無かった

僕はもう化け物だし、母さまを殺した張本人でもある。  
そして父様も居るから、戻ったら何をされるか分からない。

もう普通の人間ではいられない。

「・・・ダンデリオン。ほら、あそこがお城だよ？  
分かる？」

空は夕焼けで真っ赤に染まっている  
海の水が足元が浸かる位になって、僕らは舟に乗った。

青年が向こうを指す。

いよいよ怖くなって、逃げ出そうともがくけど  
たくさんの男達に羽交い締めになれた  
パニックになって

ツルを出そうとした瞬間、  
また青年に抱き締められた。

「っダンデ様！落ちついて下さい！もう、父様は居ません！

貴方を傷つける人は、もう、居ません！！」

！！！！

その口調は、兄のもだった。  
懐かしい兄。ローズの、敬語。

「ロー、ズ……。お兄ちゃんなのに、敬語って変だよ。」

掠れた声で前に言った事を繰り返した。

随分と人とは変わる物だ。あの少年が、こんなにも変わるとは。

「・・・うん。そうだね。・・・ダンデ。おかえり。」

また、目頭が熱くなったけれど、

僕はただいまとは言わなかった。言えなかった。

ここを帰る場所には出来ないから、  
だって化け物だから。

城に着いてから、とにかく色々な事を学んだ

僕が行方不明になってからの城のこと。

先代の王が亡くなって、

ローズが王になって、

本格的に僕の行方を探って居たこと。

あれから、かなりの時を経て居たこと。

そして、これからの僕のこと。

呪いを解く方法はない。

ローズ達も、僕が見つかって始めて呪いについてしっいたらしいし、治る見込みは、あの男の研究データから皆無だという事が分かった。

ああ、あの男は死んだよ。自殺。

罪に問われるのが怖かったんじゃないかな？

僕はたくさん勉強して、

ついでに一人称も俺にして、

成長をした。

召使いの人は優しく、いきなり城に入って来た俺におかえりと言ってくれた。

教育係の人も俺は勉強熱心だと褒めてくれた。

食堂の人達も温かいオニオンスープを夜食に出してくれた。

その度にその髪はどうしたと聞かれるのは困ったけど、

何とか誤魔化して、それを信じてくれる優しい人達。

ハイドという奴にも会った。ちょっと無表情で怖そうだったけど、案外へばくて良い奴だと思う。

幸せだと思う気持ちを、思い出させてくれた時間だ。

そして、そんな生活を送っているとある時ローズから

呼び出された。

「ダンデ。君はこれから忙しくなるよ。

私が王座についたから、君は王子になるがその仕事も覚えてもらう。」

いいね？と王室の椅子に座りながら、ローズは念を押した。

「ああ、分かっている。俺の事は皆にはどう言っただ？呪いの事も。」

「呪いについては、考えておく。皆の者には、伏せておくつもりだけれど、研究は進めて行くつもりなんだ。」

今の技術を使えばもしかしたらって事もあると思うから。」

そこで咳払いをした後、ローズは僕の間を見るところで途端にハラハラと涙を流し始めた。

兄の涙を正面から見るのは初めてで、俺は酷く狼狽える

「ダンデ、ダンデ・・・！ごめんね。ごめんなさい。」

折角、貴方をあんな地獄から出せたのに、、、！

また、同じ事になろうとしてるの。」

意味が分からず、  
聞いただと

「父様の代からの臣下が、貴方を実験台にしようとしている。

何とかして阻止しようとしているけど、何故か実験台賛成派が多くて、

もう、どうしたらいいか分からないの！！」

パシャンッと胸の中で何かが割れた音がした。

・・・ああ、そうか。そうだな。

皆、呪いの正体が分からなくて怖いのだろう。

もしかしたら伝染るものかもしれないのだ。

そして、呪いを受けているのは俺一人。

しょうがない。

俺は、化け物なのだから。

しょうがない。

「ローズ、ありがとう。いいよ。別にもう。

前と同じ事でも、もう良い。俺は死なない身体だから。

何をされても大丈夫だ。」

ローズの顔がさつと青ざめる。

けれど、これだけは言っ  
て置かないといけないんだ。

「・・・俺は、あんたとは違う。」

## 2・3 姉兄弟きょうだい（前書き）

ハイドとローズの会話

## 2・3姉兄弟くきょうだい

シュルツシュルルル。

扉が開き、ハイドが入ってきた。

「おい。一応伝えておいたぜ。」

その事を伝えるに、依頼主のローズの元を訪れたハイドは、  
疲れた様のため息を漏らした。

「そう、ありがとう。キヨちゃんは今、どうしてる？」

「どうしてるもこうしてるも、動揺しまくって気絶したよ。」

「たたく、こう言うのは本人が気づくべきじゃねえのか？」

ローズは気難しく頬に手を当てる。

「しょうが無かったのよ。もう、時間が無い。」

「だとしても、まだそうだと決まった訳じゃねえ。嬢ちゃんの夢は  
ハゲの嫁らしいぞ？」

沈黙。

「・・・冗談、じゃなさそうね。でも、私にはそう見えたのよここ  
最近のあの子をみて、だって

あの子毎朝、早起きしてハンモックを覗いてはため息ついてい  
るの。」

「キャクタス情報か？」

「ええ、でもね。あたしにも会うたびにダンデチャンの事を聞くの。」

「

「ああ、俺にも聞いてたな。・・・ダンデは今どうしてる？」

「今はキヨちゃんの所に行かせたわ。事情を話す様に勧めたの。」  
ハイドはうんうんと頷いていたが、

ピクリとローズの言葉に反応した。

「事情って、戦争の事か？」

「・・・全てよ。」

！！！！

ハイドをローズの机ダアン！と強く叩きローズに詰め寄った。

「どう言う事だ！？まさか・・・ダンデリオンの過去や、呪いもか・・・？」

ローズはふるふると首を振る。

「そこまでは分からない。あたしは全てと言っただけよ。」

「もし話していたら！？どうすんだよ！あんな過去、嬢ちゃんに受け止められるとでも？」

「・・・分からない。」

「また、ダンデを傷つける事になるかもしれないぞ。良いのか？」

ククア・ローズ。」

ローズは胸元でギュッと両手を握りしめ、吐き出す様に言う

「ハイド。これは一種の賭けよ。」

怪訝な顔をするハイド。

「あたしはダンデが全てを話そうが話さまいがは別に良いわ。

でも、キヨちゃんはきつと全てを知りたがると思った。」

ひゅつと息を吸い込みくつと顔を上げたローズの目には

決意の色が垣間見えた。

「あたしは、キヨちゃんならダンデを止めてくれると信じてる。」

ハイドは眉をひそめ、腕組みをした。

奥歯を噛み締めて、怒りを含んだ声を出す。

「あの弱そうな嬢ちゃんに、何を期待してるんだよ。なあおい、お前のやった

この賭けは相当重いもんなんだ。それを、分かっているのか？  
人の・・・ダンデの心がかかってんだぞ！！！！」

「わかってるわよ！！！！」

凜とした声にハイドは怯む。

「分かっているわ！ダンデリオンの受けた傷も、諦めたように化け物だと言う眼差しも！

全部、全部隣りで見てきた！！」

ローズの瞳に涙が盛り上がる。

「全部・・・！だ、から、あたしは、賭けた！だって！だって恋をしたのよ！？

あの、子、が！！！！あんっなっにズッ自分を人間と線つを引いた。  
た。

あの子が・・・！人間の、女の子の側に、い、居たいって！！」

「だからあたしは、信じ、てるの。あの、二人を、

キヨちゃんだって、舐めて、かかると分から、ないわよ？

あの子は、いつだって私達の予想を超えて行く。

大丈夫。あたしは信じてるわ。」

ニヤツと笑いかけたローズをハイドは啞然と見ていた。

信じる心つつーのは理屈が通らねえな。。。

ま、こいつらしいっちゃらしいな。

いつもこうと決めたら突っ走るところ。

「・・・二人の様子。見てくるぜ。」

苦笑混じりにそう言うと、ハイドはクルリと踵を返していった。

しんと静まりかえった部屋は

不安を誘う。

一人になったローズはカタカタと震え始めた。

ダンデの心がかかってんだぞ！

分かっているわよ。けど、どうなるかなんて本当に分からないわ。

もし、もし、キヨちゃんがダンデリオンを傷つけたら・・・

【俺はあんたとは違う。】

不意に、あの時のダンデの言葉が脳に過ぎった。

あの言葉は、深く心に突き刺さった。

慕ってくれていた弟から拒絶。

全てが変わってしまったのだと気づいたあの日。

・・・そう、あたしではあの子を救えなかった。

姉弟なのに、受け止め切れなかった。ダンデの傷。

力も度胸も無いあたしは、その希望をキヨちゃんに託している。

狡い女ね。私も

ふふつと自嘲の声を漏らす。

目を静かに閉じ、祈る様に手を握る。

・・・信じているわ。二人とも。

日が傾き始めて、夕方に近づいて行く。  
海が土を濡らしていった。

## 2・4二度目のぬくもり

静寂が漂う。

それは、

水を含んだ雑巾の様な、重苦しく、濁った静寂。

そんな中でふう、と軽い息がダンデから吐き出された。

ダンデは、初めて人に呪いの事を語った

牢での生活も、犯してきた罪も。

それを聞かせたのは小さく、愛らしい弱い人間。

喜代の顔を見ずにダンデは再び口を開いた

「喜代殿。・・・分かったか？俺の真実。」

ドクドクと心臓が鳴り止まない

拒絶されたら・・・

化け物を見る様に、怖がられたら、俺は、、、どうなってしまっんだろう

いや？

それはそれで、きっと良いんじゃないだろうか？

そうだ。そうだろう。

だって、俺は心置きなく戦火に飛んでいけるし、喜代殿だって、きっと、この先俺がいない方がいいだろう・・・

話した時は、受け入れて欲しいと願って止まなかった。  
だから話した。

でも、

しかし、

やはり・・・無理だ。冷静に考えてみるよ俺、か弱い喜代殿に何を話した？

血生臭い思い出と罪を背負った男に、心から微笑んでくれるなどと期待するなんて笑えてくる。

ギリツと胸が締められた感覚がした。

痛い・・・！

こんな痛み、感じた事無い。母さまの時だってこんなには無かった。

愛しい者が自ら離れていく事がこんなにも苦しいとは、自分で殺ったときのなんかとは比べようも無い。

とてつもなく、痛くて、痛くて、悲しい。

喜代殿……

「ダンデ。」

ふわりと体が温められた。

「ダンデ。」

触れられているのは、手、だけなのに、

「ダンデ。」

鼻の奥がツンと痛む。

「ダンデ。」

「・・・何だ？」

やっとのことで、それだけ言い切る

そろそろと隣りを伺うと、涙に濡れた喜代殿が居た。

視界がカツと開いた

泣いている？喜代殿が？何故？

・・・ああ、喜代殿は優しい。こんな俺に泣いてくれるのだから  
微笑んでくれる事も嬉しい。

けど、喜代殿が泣いている事もすごく嬉しいと思ってしまう。

「喜代殿・・・。その、ハンカチ、使え。」

おずおずと黒いハンカチを差し出す

伸ばされた腕は差し出したハンカチを横斬り

俺の首にまわった。

何が起こっている？

頭の上では、喜代殿のしゃくりあげる声

耳の横では、喜代殿の温かい鼓動

心地良い、喜代殿のぬくもり

しゃくりあげながら、彼女は掠れた声で、それでも力強く俺に言葉をかけた。

「生きててくれて、ありがとう。」

その言葉に

ふっと一筋だけ、涙が出た。

ああ、なんだかとても懐かしい。そうか、あれだあの時と一緒にだ。牢で兄貴に抱き締められた時、

ローズ、お前も、こんな事を呟いていたのか？  
口元が優しく緩む。

「ダンデ、ダンデ、」

「喜代殿・・・ありがとう。本当に、ありがとう。でも、行かなくてはな？」

喜代殿の腕が震えて居た。

「ダンデ、、好きだよ。」

ポトポトと喜代殿の涙を俺の髪の毛の葉っぱがはじく。  
至福の時間が過ぎてゆく。

「・・・ありがとう。喜代殿・・・俺なんかを慕ってくれて、ありがとう。」

・・・行くよ。俺。」

でも、違うから。俺と喜代殿は。

もう、受け止めてくれただけで十分幸せだ。

「ダンデエ・・・化け物って何さ。ダンデは、化け物じゃ無いよ？」  
「違う。」

「っ何が!？」

「この能力も、この髪も、全て人の域を脱している。化け物では無くて何だと言うんだ？」

自嘲していると、ますます喜代殿が後頭部を押さえつけてくる。

「なら人の定義って何さ!!皆、普通普通って言うけど、その基準ってなんなの!？」

あたしだって色んな人から白い目とか向けられたりした!

けど、そんなのどうだって良いって思ってる!」

「だってあたしは、自分が人間だって思ってるもん!!」

喜代殿の言葉にダンデは顔を歪めた。

「それは、、喜代殿が本当に人だからだろ?俺みたいな力も、髪も持って無いくせに!」

「ダンデは人間の方が良いとは思わないの!？」

「良いに決まっている!」

「じゃあいいじゃない!それで!何の不都合があるの!？」

「でも俺は人間じゃない!もう、戻れない!!母さまを殺した奴が中に居るんだぞ!!」

息が上がって、肩を上下に動かす喜代殿は、眉を潜めている  
いつのまにか、俺と喜代殿は抱き合う形から変わり  
真正面に向き合っていた。

「・・・ダンデは違うじゃん。」

吐き出された言葉に、俺は絶句する。

「違わない。あの種と俺の身体は一心同体になって、融合されている。」

ギリリツと喜代殿が奥歯を噛んで噛み付くように言った。

「ダンデの心は人間だ!!!!!!」

「.....」

そう言った喜代殿の目は、吸い込まれそうな位綺麗で、背筋がゾクツとした。

茫然とする俺の手を両手で握ると、喜代殿はくつと顔を近づける。

「解こうよ。」

?????

「解こうよ。呪い。」  
「な.....!」

「む、無理だ。あいつのデータからそれはもう明らかなんだ。」

「本当に？」

「あ、ああ。」

「酷い実験ができる程残酷で、兵器として活用しようとする人が本気で呪われた人を助けると思っの？」

「そう言われて、ハツとする。」

確かにそうだ。いや、しかし、でも、

「もう少し、頑張ろうよ。」

ほどけた様に笑いかける喜代殿。

「ダンデ・・・ダンデは、人間だよ。断言してあげる。」

世界中の誰もが化け物だとか言おうとも、あたしは人間と言うよ。

「だってそれが事実だもん。」

今度はにへらつと笑う喜代殿に、

酷い脱力感を覚える。

緊張がほぐされてふふつと笑って仕舞う。

もう少し、足掻いてみても良いのかもしれない・・・

## 2・5恋する乙女（前書き）

久々に喜代視点

## 2・5恋する乙女

ダンデリオン、

大丈夫。何とかするから、絶対にあんたを戦争の道具になんかせないから。。。

「ようし！それじゃあとりあえずローズさんの所に行こう！

きちんと話して、力になってもらおうよ！」

グワツシとダンデの手を握り、扉に走り出した

「え？ちょちょちょ、き、喜代殿！？そんないきなり！？」

当然でしょうがに、時間は無いだもん

「ほら！早くダンデ！そんなもたもとうわっぷ！」

ドオンツと何かに激突する音、

額に何かが当たってかなり痛いけど涙目で

ぶつかったモノを見た。

激しく咳き込み、腹を痛そうに抱えてよろけている

ボロボロのハイドが居た。

「！ー！おでこさん！？どうしたんですか！」

「ハイド？婦女子の部屋入るときはノックをしる。非常識な奴め」

「う、げっほ！ゴホゴホ！ー！ー！っゲホ、て、てめえらのせいなん、だけどな？」

？あ、もしかしてぶつかったのおでこさんだったんだ。



「……ダンデ。化け物って事、考え直してくれたんだ。。  
胸が熱くじいんつと感動した。」

「あ、あの、あたしもダンデの戦争行き断固反対です！ダンデは化け物じゃありません！」

「よし！よく言ったあたし！」

ローズさんだって、愛弟が戦争にいくなんて嫌なはずだもの。

「！！ダンデ、あなた。。キヨちゃん。」

「え？はい！！」

「ありがとう。。ダンデを止めてくれて、、、、」

若干うるうるしたローズさんの目は優しさで溢れて居た。

「ローズ。それで、大臣達にも話さなければいけないんだが、

何かうまくやり込める事は出来ないか？協力を願いたい。」

大臣達？

居たんだ。大臣なんて

「ええ、そうね。彼らを大人しくされるのは骨が折れそうだわ。

でも、やってみましょう！」

ニコツと笑ったローズさん。

「どうやら大臣達がダンデを戦争に行かせようとして居るらしい。」

「でも！ローズさんは王様じゃ無い！鶴の一声みたいに大臣達の意見なんて、」

「キヨちゃん。この星は王様は居るけど、そんな絶対王政みたいなんかじゃあもう無い。」

大臣達の見解だって、複数あれば力はあるの。。悔しいけど、  
」

そんな、、いや、でも目げ無いぞ。なにか方法がある筈だ！

「とりあえず、王帝会議を開きましょう。そこで、大臣達を納得させるのよ。」

「そうだな。戦争の事は敵と和解とかして穏便に済ませたい。」

「そのための策も必要・・・ね。」

「あの、敵って誰なんですか？南の方の戦争とかなんとか、、」「敵と言うより、、地球的に言えば一揆のようなものだ。」

国民が不満を持ち、近くの貴族邸を襲ってまわって居るんだ。

「

なるほど、でもダンデがわざわざ行かなくてもいいじゃない。

「俺は王邸の者でもある。国民の不満は王政の不満だ。」

俺も関わりある。しかし、殺しはもう二度とたくない。これが本心だ。」

「ダンデちゃん・・・お姉さん嬉しいわ。やっと、やっと言ってくれた・・・！」

堰を切って泣くローズさんは凄くうれしそうだった。

良かった。

ダンデが考え直してくれて、本当に良かった。

ダンデが化け物なんてあり得ない。

人殺しを嫌う。普通の優しい常識人だ・・・

ぎゅうつと手を握られた。

見上げると包むような優しい笑顔が目に見え込んでくる。

唇を動かしている。微かに聞こえる言葉は・・・

『ありがとう』

もう一回動いた

『大好きだ。』

・・・トクンッ。トクンットクンットクンッ

あ、あれ？やばっ顔があっつい。。。

どどどどうしよう！絶対変な顔してる！

ふ、不意打ちだ。

狡い！あーもーなんかうつと来てるよお。

ダンデのバカ！今そんな事言わなくなっただっていいじゃないか！！

「喜代殿。そろそろ夜になる。夕食に行こう。ローズもどうだ？」

「ぐすっええ、一緒に行くわ。」

「ふむ、じゃあ行くか喜代殿。・・・喜代殿？」

さり気なく恋人繋ぎにしたつもりだけど、バレたか。

ああもつ、考える事とかやるべき事とか一杯あるのに、  
なんだかふわふわして考えられない。

不謹慎なのは百も承知。

だけど、、、お願い。今だけは……

うんと背伸びしてダンデの耳に口を寄せ……ようにした。

ウソ、、、全然届かない！？

まじで？

えーちよつとお、今、今凄く勇気ある告白しようとしたのに、、

「喜代殿？どうしたのだ？背伸びして、」

このニブチン！

「ダンデちゃんキヨちゃん。あたし先行ってるわね」  
うふふと言うローズさんの生暖かい笑みが聞こえた。

「あ、ああ。いっといてくれ。……で、喜代殿？」  
きょんとした顔が眩しい。

「ダンデ、、」

「ん？」

「大好き。」

……何もそんなあからさまに拍子抜けしなくてもいいじゃん。

ポカーンとしたダンデを鼻で笑う。

大体、ダンデの過去聴く前にも言った！

あたしもって言ったよ？

「聞いてなかった。それどころじゃ無くて。」

「ダンデの過去聞いた後も言った。泣きながら。」

「そういう意味だとは思っていなかった。」

そりゃ無いよセニョリータ……

悲観にくれたあたしを穴があくほど見たダンデは唐突に吹き出した。

「……プツははははは！！そうかあ、そうだったか……」

なにがそうだったかーだったっつの。

「ふむ、喜代殿。」

「え？何か？」

気づいたらダンデの顔が目の前に来ていた。

驚いて息を呑んだ瞬間……！

音も無く唇同士が合わさった。

いきなりの事に凄く凄く  
びっくりした。

目を閉じたダンデの睫毛が意外と長くて

びつくりした。

ぬるりと入れられた舌の異様な熱さに  
びつくりした。

自分から、鼻の抜けた変な声が出たことに  
びつくりした。

「んんっ……ふっああ。」

舌が絡み合う音が微かに聞こえるけれど、  
すぐに心臓の鼓動でかき消されていく

「あ、むんっ………っはあ!!」  
やっと離された!!!

息も絶え絶えだ、、  
だ、ダンデちよっと、いきなり過ぎるんじゃ無い？  
だってあたしこれファーストなんだけど!!  
ファーストディープって何それ。

なんか乙女の夢がああああ!!!

「喜代殿。」

「ひゃい!!!」

吐息混じりで耳元で呼ばれたら誰だってこんな風になるよ!!

「これは王様ゲームの命令なんかとは関係無いからな。」  
……？王様ゲーム？  
なんのお話だそれ。

はてな顔になって居るとパッとダンデが離れた。

「いや、いい。こつちの話だよ。」

そっか、

まあ気になるけどいつか。

「じゃあ、その、なんだ行くぞ！喜代殿。」

「うん！！って、あ、あれ？ダンデ！」

ダンデはずんずんと先を歩いてしまった  
ちらっと微かに見えた耳は赤い。

／＼／＼／＼！！／／／

なんとも言えない嬉しさを胸に、

白い＼シャツで覆われたダンデの広い背中に向かって掛けて行った。

束の間の幸せになんてさせない。

―もう、二度と大事な人を失わない様に―

決意を決め、喜代は

ダンデの腕に、腕を絡めた。

## 2・6 喜びに代えて

青々とした草原。

温かい春の風。

握った草から変な汁がでて、手がベトベトした。

「おかーさん。これヤダー取ってよー……。」

長い草達に足を取られながらも、トテトテとお母さんに向かう。

「あらあら、喜代ちゃんたんぽぽ摘んできたの？綺麗ね。」

ほのぼのとした声を出すお母さんはどうやら拭き取ってはくれなさそう。

「ねえ〜！手！ベトベトしてるの！……！」

「ふふっ分かつてるわよ。ほら。お手手だして？……はい。これで綺麗綺麗！」

「キレイ？」

「うん。綺麗よ。」

サアアッ

風があたしを横切る。

お母さんの長くて柔らかい茶色の髪が靡いて、とてもキレイだと思った。

「……良い風。……元気かしらねえ。あの子」

頬にかかった髪を整えながら独り言の様にお母さんは呟いた。

「??誰が？」

「ん？あらいやだ、聞こえちゃった？」

「ねえねえ。だあれ？」

しつこく問いかけるとお母さんは笑顔のまま腰を下ろした。

「喜代ちゃん。なんで喜代ちゃんは喜代ちゃんなんだと思う?」

「????????????????」

「だ、だってキヨは産まれたから。」

「ふふっ違う違う。喜代ちゃんはなんで喜代ちゃんって呼ばれているか、」

「名付けられたからじゃない?」

「どっという意味でか、分かる?」

「????????????????????????????????????????」

ふつつと一息ついて、お母さんは柔らかく言った。

「誰かの悲しい心、辛い思いをそっくり喜びに代える人になってほしいから。」

「……だって。」

変えるじゃない代えるの。

そのお母さんの最後の言葉はまだ漢字が分からないあたしには難しい。

「喜代ちゃん。喜代って名付けたのは、

あたしの妹なの。貴方が産まれて、あたしの次にお父さんと同じ位喜んでくれた子。

いきなりよ?丁度喜代ちゃんのオシメを替えている時。

喜代が良いって。大きな声で、ふふふっ今も笑えてくるわ。」

その時のお母さんの顔は笑っていても何処と無く切なそうだった。

「ふーん。ねえねえ。その人はどうしてるの？」

「分からないわ。突然来て突然去っていったの。」

奇想天外、支離滅裂、ハチャメチャ、意味不明、何考えてるか分からない。

そんな子だった。」

どんな子だよ。

「喜代ちゃん。でもね、貴方への愛は凄く深かった。あたしの次にね？」

だから、喜代ちゃんって名前好きになってね？ 名前だけじゃ無く

きちんと自分を好きになってね。

誰がなんと言おうと、貴方は貴方と言う存在を貫くの。」

ポンッと撫でてくれた手が温かい。

「それで誰かを傷つけるかもしれないけど、そしたら今度は貴方がその子を受け止めてあげて。

人と人は、自分をぶつけ合って生きているんだから。」

ぶつけ合って、、、

また頭を撫でられた。

今度は、なんか違う。

お母さんの温もりとは違う。

ゴツゴツした、  
大きな手。

「喜代殿。起きろ朝だ。」

「……もう少し寝ていたかった……」

「?どうしたのだ?そんな顔して……ああ、そうか。」

しかし、別にもう恋人なのだから、

一緒に寝ても良いと思ったんだ。」

?あ、本当だそういえば昨日はあたし自分の部屋に帰って無い。  
確か、えーっと……あ。

それは夕べの事

「ダンデーちよつと疲れた〜。」

「ふむっそうだな。では、行くか。」

部屋にむかっていると思った  
でも向かった先はダンデのハンモック。

「ほら、グリア星でも星は見えるんだ。」

綺麗だろ。」

あの星達は本当に綺麗だった。ぼやけた光を放って優しい夜空。  
そうだそうだ、それで、

なんやかや連れてこられて、星を見て、癒されて、おねんね。。。

「思い出した。」

「お、そうか!今度は思い出したか。じゃあ、グリア星は何まわり

だ？」

「・・・・・・・・・・は??」

「教えたろ昨日。思い出したのだろう？答えよ。時間は30秒。」

いや、知らん！

忘れた！

てか、朝一でいきなり勉強って・・・

「はい終了。何故だ。きちんと教えたのに、」

がつくりと頂垂れても困る。

だって疲れてたもん。

「よし、ならばもう一度叩き込むのみ！頑張ろうな喜代殿！やれば出来る！」

ダンデのランランとした瞳に蒼白のあたしが映る。

「い、いや、今日はちよつと、、、、」

「喜代殿。記憶した事というのは一日たったらほぼ忘れるものなんだ。」

だから復習は大事だ。もちろん予習もな！」

ニツと笑うダンデ。

うつつ言われている事は嫌だけど、その笑顔は・・・・・・・・！！！！

「・・・・・・・・うつ、やります。やりますよ。ええ、やろうじゃないか！！！」

惚れた弱みだ！

「そう来なくてはな！流石喜代殿！じゃあ早速喜代殿の部屋に行く

か。

今日は理解を重点的に、歴史も問題集を一冊終了を目標

数学もな？国語はグリア星の文字を全て暗記。ああ、星座もあるから

それも覚えてもらおう。

朝は一番暗記に適した時間だ！」

・・・・・・・・・・。

フリーズした喜代に気がつかず、

ダンデはむんずと喜代の腕を掴んだ。

はた、と思い出して

喜代に顔を近づけた。

「まだ朝の挨拶をして無いからな。喜代殿、おはよう。」

そつと喜代殿の頬に唇を付けようとすると、、、、、

ドオオオン！！！！

突如、喜代殿がタックルをかまして来た。

「！？？き、喜代殿！？わっわっ！うわあああああああああ  
あ！！！！」

ダンデは真っ逆さまに落ちて行く。

・・・・惚れた弱みでも乗り越えられない壁はあった。

「ダンデ・・・人と人はぶつかり合って生きているんだよ。」

言いながら、いそいそと二度寝に入る喜代。

そういう意味じゃない、、、、

と言う言葉が空から降って来た

けれども

彼女はとうに夢の中であつたとき。。。。

「・・・うーむ、なんとも熱い抱擁だ。これが地球の恋人同士の挨拶か・・・。」

襟が運良く枝に引っかけたダンデは  
腕を組みブラブラ揺れながらとんでもない勘違いをしていた。

にしても、抱きしめてはくれなかったのは何故だろう？

・・・ああ、喜代殿も慣れて居なかったのか！

異文化交際は大変だな。。。

幸せな悩みを抱え、ダンデはため息を落とす。  
一寸先は乾いた地面。

・・・まずは、ここから這い上がろう。

## 2・7彼女の来訪（前書き）

リア姉さん登場

## 2・7彼女の来訪

ここは王邸の談話室。

明るく楽しくおしゃべりする所。

「……なのに、辺りは重い沈黙が漂っていた。

「……なあ。ローズ」

絶えかねたハイドが口を開く。

「……なあに？」

「ホンツトーーーーーに、来るのか？」

「当然。」

ローズがえ？なんでそんな事を？という顔をする。  
それを見たハイドは苦虫を噛み潰した顔になった。

「お・ま・えなあ！今がどういう状況か分かってんのか！？  
緊急事態だよ！き・ん・きゅ・う！！！」

んな時にリアが来たらあいつまた療養生活戻りだぞ！！？」

そう、ずっと前にクレマティスを通じて彼女から手紙が来た。  
そしてローズとアゼイリアは二人で都合を言い合い。

今日になった……

「分かってるわよ。今日が王帝会議初日ってことくらい。」  
ケロリとした顔のローズにハイドは青筋が浮かぶ。

むんずとローズの胸倉を掴む。

「！！！？きゃあああ！！！！なにすんのよ！乙女の胸に手を出すなんて！！！！」

「うつせえ。お前の逞しい胸板に興味なんかねえよオカマ。」

「きいいいいい！見てらっしゃい！？そろそろ地球から留学生が帰ってくるんだから！

そしたら性転換してやるんだからあああ！」

コンコンッ

ん？

二人は同時に扉を見た。

すると、やつれた喜代とランランと輝くダンデが入ってくる。

喜代の顔色がただならぬのでローズは慌てた。

「まあ！キヨちゃん！？どうしたのよそんなにやつれて！！」

名前を呼ばれ、ピクリと肩を震わせた喜代はゆっくりと顔を上げ、

「X||12y||31.....」

.....うん。イカれてる！

「キヨちゃあああああん！？どうしたの、どうしちゃったのよ本当に！！」

「五月蠅いローズ。これは喜代殿の鍛錬の成果だ！素晴らしいだろう？」

よしよしと愛おし気に喜代の頭を撫でるダンデ。

しかしローズは

「素晴らしくないわよ！まともに会話すら出来ないじゃない！」

「ああ、喜代殿は今「大丈夫です」って言ったのだ。」

貴様にはなにが聞こえていた．．．．？

「おい。嬢ちゃん？だいじょうぶかー？」

「イオン性物質．．．」

「だめだなこりゃあ．．．しばらく寝かせておくか？」

！！！！

そう提案したハイドは窓に何かの気配を感じる。

「おい伏せろお！！！！！」

バリバリッガツシャアアアアアアン！！！！！！！！！！

砕け散るガラス

喜代はその音で正気に戻り、

ダンデの腕の中で庇われながら何が起きたのか伺う。

．．．．．カボチャの馬車．．．？

パリッ

ガラスの破片を踏みながら、黒い影が降りる。

それは顔を上げた。

銀の長髪に切れ長の眼の怖そうな男。

「．．．．。」

啞然とした空気の中その男は声を発した。

「アゼイリア様。着きました。ローズ邸で御座います。」  
すつと男が手を差し伸べると、華奢な手がそれを取る。

!!!!!!!!!!!!

出てきたその人に喜代は息を呑んだ。

すごくきれい……

白いヒールを履いた足をそろそろと下ろすアゼイリアさんは金の短髪に透けてしまいそうな肌をしていた。

でもその眼はどこか翳っっていて見ていると心がざわざわした。そしてアゼイリアさんは眼を伏せる。

「……………修理代、出すわ。」

彼女が口を開いて始めの言葉は、それだった……

## 2・7 彼女の来訪（後書き）

かなり遅れました。。。。

すみません（スライディング土下座

けど！明日は必ずPCが壊れない限り投稿します！！  
とりあえず、彼女が遂に来ました  
これから波乱の予感・・・？

## 2・8 憂う彼女は恋敵？挿絵有り

こくり、こくり。

ガラスが飛び散った談話室でアゼイリアさんは優雅に紅茶を飲んでいる。

「・・・シユールだ。」

「？喜代殿何か言ったか？」

「いんや別に・・・はあ。」

彼女を見ていると思わず溜息が漏れる。

するとアゼイリアさんと視線がぶつかった

「あの、ローズ？こちらのお嬢さんは？」

「ああ、そういえば紹介していなかったわね！」

ジャーーーーーン！この子はキヨちゃん！！ダンデチャンの彼女よーん！」

ぐぐいつとアゼイリアさんの前に出され、とりあえずぺこりとお辞儀をした

「き、喜代と言います。。。」

「・・・喜代ちゃん？私はアゼイリア・ツリー・・・よろしくね。」

彼女はふわつと微笑んだ。

くううううう！！！！ヤバイ！なんか心臓がおかしい！

脈拍数が異常に高く・・・！！

「彼女・・・なのね。」

突然そんなことを言われる。

「うえええ！！！！？え？あ、ははいいい！そ、それで、す！！！」

ええ、ええ、緊張してますとも！  
だってなんか、なんかこの人って掴めない！  
全て見透かされてる気がする！

「別に・・・全て見透かしては居ないわ？」

見透かされてるうううう！？

「あらあら！キヨちゃん気付いた！？リアは人の心が読めるのよ！  
すごいでしょう！？」

ちゅげゝ超ちゅげ。。。 （主人公は大変混乱して居ります

するとアゼイリアさんは銀髪強面男を振り返る。

「シスル。」

「はい。アゼイリア様。」

しばし見つめ合う二人。

・・・あれ？なに？何々もしやこの二人！！

ニヤニヤと野次馬根性が育つ

「あらやだ！リア！まさかシスルのことを！？」

いつだって野次馬全開ローズが口を挟む

しかし、おでこさんは何やら呆れた顔でローズさんに言った。

「バーカ。リアは違うだろ。だってあいつには、（ドスツ）！！っ  
げほお！だ、ダンデ！？」

え！？だ、ダンデ！なんでいきなりみぞおちにパンチなんて！！

「・・・すまない手が滑った。」

「ああ、居るよねーそういう人。絶対ウソだってバレバレなのにね  
はっはっは。（怒）」

しまった！おでこさんの輝かしい額に青筋が！！！！  
でもそんな姿も素敵だ！

そんな事を考えて、何でもっとダンデの行動に疑問を持たなかったのか、

あたしは激しく後悔をする事になる。

「ダンデリオン。。。」

風鈴の様な声がした。

ダンデはおでこさんとにらめっこしていたが、  
呼ばれるなりすぐにアゼイリアさんのそばに行く。

「何だ？リア姉さん。。。」

そして、じっと見つめ合うアゼイリアさんとダンデ。

なんなの。さっきから、てか長くないか？さっきより。え、なんなんだい！？

心がむざむざして来た。

やっと二人の視線が離された。ホッとしたのも束の間

ダンデが衝撃の一言を発する。

「ちょっと俺らは席をはずす。」

そして、すいっとダンデとアゼイリアさんはあたしの横を通り過ぎた。

「な・・・！ちょっと！ダンデエ！！何処行くの！？」

慌てて振り返るけど、ダンデは無視を決め込み

アゼイリアさんだけと視線が絡む。

何かを言いたげな彼女の瞳にあたしは無性に苛立つ。

「厨房。」

アゼイリアさんは口だけでそう言った気がした。

閉じて行くツルの隙間から、

彼女がダンデの腕を握ったのが見える。

!!!

なんなんだよ一体！

まさか、、アゼイリアさんは、ダンデを、、？

だとしてもなんでそしたら拒否しないのさ……

彼女の目の前なのに、

あんなに見つめあって、、

ちくしょう。。。

「ダンデの・・・馬鹿・・・！」

小さい悪態をつくけど、ますますそれはあたしを惨めにさせた。  
目頭が熱い。。。

ヤバイ。

誰かが頭を撫でてくれた。

・・・ああ、おでこさんだ。

「嬢ちゃん。まあ、俺もよく分からないんだがアゼイリアの行動は今大目に見てくれないか。」

あいつ・・・けっこう色々あんだよ。そして、あいつが最も頼りにしてるのがダンデなんだ。」

・・・全然大目に見れないんだけど？

「色々って？」

「それはーあー言ったらダンデが怒る。」

・・・もしかしてさっきの？

「リアも大変だったからね。。キヨちゃん。お願いできない？

ダンデチャンを信じてあげて？」

・・・そう、だよな。ちょっとド級の美人がダンデの腕を組んで二人つきりで

部屋をでて行ったただけだもん！！！！

大丈夫だもん！！

「嬢ちゃん。そう言いながら部屋を出て行くのはちょっとだぜ？」  
もうすでに喜代のいない部屋にハイドの声が響いた。

「・・・あら？そっいえばシスルは？」

「嬢ちゃんが行くよりも前に出てった。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「アゼイリアって罪な女だな。」

「本当に・・・あたしと同じ位にね・・・」

「死ね。」



「ダンデエ！！！」

「！？き、喜代殿！」

ずっと見つけたかった

アゼイリアさんとダンデを見た瞬間。

心が砕けた。

アゼイリアさんはダンデに抱きつき、ダンデは彼女の背中をさすっている。

その手つきが優しいから、あたしは胸の痛みに耐える様に顔を歪めた。

ダンデの胸に顔を埋めていたアゼイリアさんは、  
ゆっくりとこちらに顔を向ける。

・・・アゼイリアさん、泣いてる。

涙に濡れたその顔は、  
時を止める程美しい。

・・・嵐が近づいている。

> i 2 2 9 5 3 — 2 6 6 8 <

## 2・8 憂う彼女は恋敵？挿絵有り（後書き）

ええ、29日投稿になりました、すみません！  
挿絵を後で付ける予定です。

## 2・9 情緒不安定な人には気をつける（前書き）

短いです。すみません！

## 2・9 情緒不安定な人には気をつける

修羅場。

この空気を形容するならそれがピッタリだった。

はたから見れば抱き合っているようにしか見えない

ダンデリオンとアゼイリア

そして、勢い良く厨房のドアを蹴破って入ったあたし

双方、沈黙。

・・・先に沈黙を破ったのは、あたしだった。

「・・・何してんの？」

何処の閻魔だ！というような声に

ダンデの背に冷や汗が伝う。

「kき、喜代殿。どうしてここに？」

もはや浮気者がする発言に聞こえる。

「答えて。何してたの？いや、してるの！？」

注意、現在も抱き合ってます。

一触即発の喜代に戸惑うダンデリオン。

すると、アゼイリアが口を開いた。

風鈴のような透明感のある声は酷くこの場には不釣り合いだと思う。  
そして、今のあたしにはその声が憎くて仕様が無い。



積み上げられた皿が落ちて割れる音と共に  
喜代は顔を覆いながらその場から逃げ去った。

嵐が去った後みたいな厨房に唖然とした二人の男女が残される。

「・・・私、何かいけない事を言ったかしら。」

「あ、いや。言つて、ないと思うぞ？」

泣いたリア姉さんを俺が宥めていただけだと言ったのは、  
信じて貰えなかったのか？？」

そう言いつつ、散乱した床を見ると喜代殿が立っていた所に  
2・3滴の、透明な液体が落ちていた

「！！！！！！！！」

喜代殿！まさか、、、！

「喜代殿！！何処へ行く！！」

ダツと駆け出し喜代の後をおうダンデとの背中に  
声がかかった

「ダンデリオン！待って！」

切羽詰まる顔のアゼイリアをダンデは振り返ることなく

「無理だ！喜代殿が泣いているんだ！！」

と、言い残し去って行った

アゼイリアは目を瞬く。

いつだって泣いて縋るとダンデは居てくれた。

自分が落ち着くまで、根気良く背中をさすってくれた。  
そんな彼が、、あんなに必死で、女の子を追っている。

やっと人並みの恋をしている彼に姉としては喜んでいて自分もいるけど

しかし、、困ったわね。

今はやめて欲しいと思う自分もいる。

困り、喜び、感情が混ざりあって

ため息とも笑い声ともとれる声を静かに出した

おもむろに胸元からペンダントを取り出す  
パチンつと開いた瞬間に眩しい笑顔が見えた。

自然と溢れる涙

ねえ、

「あなたの居無い寂しさを、私はどうやって埋められましょうか。  
」

写真の君は変わらない笑顔を返すだけだった。

## 2・9 情緒不安定な人には気をつける（後書き）

なんか新しく書こうかなと思います。

## 2・10 肉まんの涙

「う、ううつひつく、ふ、うう。ずびっずびびー」

ベットの枕がぐしょぐしょになっていくが

今はそんな事気にも留められなかった。

「う、うえええんっええええん!!!」

そんな彼女を見つめる（覗く）影が二つ。

「喜代様。号泣ッス、」

「おつかさん。。。」

「キヤクタス。良い加減喜代様をおつかさんつつのやめたら？」

マジそう言うの意味なんスけど。」

「クレマティス五月蠅い。本当におつかさんソックリなんだ忍！

顔じゃなくてこう、霧囲気？」

「ふん？」

「拙者は遠い遠い星から来たからおつかさんに逢えることは出来ないんだ忍。」

「あ、鬼同情しちゃうッス〜カワイソ〜。」

「・・・棒読みだな。」

「毎週、手紙来てんの知ってるっスから。確かに遠いけど。」

そんなやり取りをして居ると息を切らしてダンデがやって来た。

「き、喜代殿はここに居るか!？」

ゼエハア言いながら尋ねると2人は頷く。

よし、では誤解を解くか。

コンコン

「ごめん！誰も入らないで!!!」

・・・やはり泣いているな。

「喜代殿。誤解だ！本当にリア姉さんとは何もない！」

「・・・分かったから。どっか行つて。」

「いや、入る。」

しゅるるるるるるるるるる！！

ベットを見ると、こんもりとした掛け布団。

地球に、肉まんという食べ物があったと思い出した。

「！来ないで！お願いだから、顔見ないで！」

「喜代殿。傷つけてしまつて本当にすまない。。。」

涙ぐらい拭わせてくれ。」

「やだ。今の顔本当に酷いから。」

「酷くなんてない。喜代殿はどんな表情をしてても素敵だ。」

「酷いよ。だつて、こんな嫉妬してる鬼みたいな顔・・・」

・・・嫉妬してくれてるのか。

ポーンと薔薇が一輪、ダンデの頭から出る。

「う、嬉しいぞ俺は・・・。」

「ダンデにはわかんないよ！嫉妬に狂つた人がどうなるか！

あたしは、あたしは先生の時で良く知ってるの！！」

ガバツと勢い良く布団から起き上がった喜代は、

瞬間、固まつた

ダンデの背後から立ち上る凄まじい妖気。。。。

何？何で??

「・・・ふむ、何時だつたか前にもセンセイ、と言っていたなあ。。。

喜代殿のナンだつたんだ？」

「え？あ？え？よ、幼稚園の先生。。。」

「それだけじゃないだろ？」

「につこり微笑まれたらもう言うしかない。」

「は、はっ・・・恋・・・の人。」

「詳しくその時のこと、聞かせてもらいたいな？嫉妬したのか？  
そいつに」

そ、そいつ呼ばわり！！

ちよっぴりム力つくけど、今何か言ったらヤバそう。。。

大人しく従っておくか。

これでダンデも嫉妬とはどんなに恐ろしいものか分かるだろう。

現在すでに嫉妬で恐ろしくなってるとは露知らず、

喜代は語り出すのであった

## 2・10 肉まんの涙（後書き）

過去書けなかったーーーー！！！！涙

明日は書けると良いな！この喜代の過去のシーンが  
ずっと書きたかったので、

## 2・11失われた恋（前書き）

略して失恋？？

## 2・11失われた恋

あたしは、まだ少し鼻を嚙りながら語り出すのであった。。

「先生ー！佐々山先生ー！」

キヨロキヨロと園内を駆け巡っていると、

光がちかつと眼に飛び込んで来た。

先生から（主に頭部）漏れ出る光だと、直ぐに分かった。

え？なんでかつて？

女の感よ！

まあいいわ。

外の遊具を修理していた先生。結構、腕っ節も良かった。

「先生ー」

テトテトと近寄って行くと先生はにっこりと微笑んでくれた。  
後光が美しい

「何ですか？喜代ちゃん。」

「あ、あのね！！あの、その、、、、」

いざとなると顔が真っ赤になり、  
もじもじとしてしまう。

先生はキョトンとした顔。キュンと来る。

だって、何時もはしっかり者で優しく、けれども締める所は締める！  
ていう感じで頼れる先生のちょっと 抜けた顔だよ！！！！  
喜代5歳、この年で母性に目覚めました。

そして、その日あたしは人生で初めての、あ、あ、愛の告白を  
しようと決意していたのです！！！！

30歳差が何だ！

年の差万歳！

ん？ダンデは27！？うそ見えなーい！10年上かよ（笑）

ま、それは置いといて。

結局、その時は言えなかった。

なんか、休み時間が無くなっちゃって、、

で、幼稚園が終わった後

お昼寝タイムがあつた

それをこっそり抜けたあたしは、

先生に会いに行った。

重そうな物をプールの端に置いて、

腰をトントンしている先生に声をかける。

「・・・せ、先生、」

笑える位震えた声と脚

他にも先生が居た

けど、あたしは見えて無かったので、

その時しか無いと勇気を振り絞る。

「おや、喜代ちゃん。ちゃんと寝ていないとダメじゃ無いか。

喜代ちゃんは寝る子は育つという言葉を知ってるかい？」

やめて。そんな子供扱いは嫌！

お願いだから、今はあたしをちゃんと見て！！

「あ、あたし。」

「・・・ん？どうしたんだい？」

「せ、先生の」

「僕の？」

「お嫁さんになりたい！！！！」

ミンミンミンミンミン！！  
ミンミンミン！！！！

蝉、うつせえよ・・・こうなんか、雰囲気をもっとさあ、、、あ、でも届いたっばい・・・

先生はキョトンとした顔。

可愛いなんて、今は考えてられなかった。

「喜代ちゃん。」

ゴクリ。唾を嚥下する。

先生が抱き上げてくれた。

初めて、上から見る先生の頭部にあたしは頭が真っ白になる。

「喜代ちゃん。」

「はい、、、」

今にも消え入りそうだけど、精一杯だよ。。

でも、大丈夫！先生は優しいもん！！あたしの事裏切らないもん！！先生だって、きっと、きつと好きだと言ってくれる！

あたしは、信じてる！！！！

「気持ちは嬉しい。本当に、本当に嬉しいです。ありがとうございます。」

けれども、僕には大切な恋人が居るのです。

本当に、ごめんなさい。」

刹那。

ブチッ

手に、触りなれない感触がして  
恐る恐る右手を見た。

黒い、艶のある、細い、、、毛髪が1・2・3・・・

目をこれでもかと言わんばかりに見開いた先生。

ああ、先生はこめかみのあたりがやけに涼しく感じているだろう。。

気付けばその場にいた他の先生も口をパツカーンと開けて居る。

あ、あたしは、あたしは今何をした。。

先生の言葉を聞いて、その瞬間先生とコイビトの一緒に居る所を  
想像して、して、、、

意識が遠のいて行った。

「ダンデ。」

ふっと遠い目をしたあたしは、我が恋人に視線を移し口を開いた。

「……声が出ない位、爆笑しないでよ。」

そう、ダンデは人の、人の失恋を本人から聞いて爆笑しているのだ！！

くすりっじゃないぞ！？爆笑だぞ！！

目がキラキラして来る！話すんじゃないかった！！  
ぐるっと視線を扉に移す

「あんたらもかい！！！」

ツルの扉が開いていて、

横倒れにローズ、ハイド、キャクタス！？クレマティス、その他諸々の

女中さんが

腹を抱えて転げ回っていた。

この星の人間は、かなり失礼すぎる！！！！！！

「もお、あつたまきた！皆なんて嫌い嫌い大っ嫌い！！」

「わあ！すまなかつた喜代殿！！いや、余りにも衝撃的オチで。。。」

オチとか言うな！

「そ、そうよねえ。笑っちゃ失礼すぎるけれど、、流石キヨちゃん。。ブフオウツ」

何が流石！？

「ま、その先生だって許してくれたんだろ？まだ小ちゃい嬢ちゃんだったんだから」

「・・・うん。でも、やっぱり、、」

「うじうじするなんておっかさらしくないんだ忍！」

「あたしはおっかさじゃ無いし、、」

「てゆうか、更にハゲて喜代様的にはいんじゃ無いっすか？？」

キラ

「そんな人工的なハゲては嫌ああ！！ハゲってゆうのはねえ、ハゲってゆうのは」

選ばれた人間にしか与えられない！神聖な物なの！！

それを、それをあんな嫉妬に塗れた手で穢してしまうなんて、う、うわああああああん！！！！」

遂に泣き出してしまった喜代に慌てた彼らは、  
明け方まで慰め役に徹したとき。ちゃんちゃん。



## 2・11失われた恋（後書き）

以上、喜代のああああ、な過去でした！

2・12 名前とお花（前書き）

更新が遅れて本当に御免なさい。

## 2・12 名前とお花

次の朝、喜代は爽快感溢れる顔でハンモックから起きた。

んっふっふ。。。。

ここ注目ね？何時ものベットじゃないのさ！ハンモックですよ？？

あたしが眠れるハンモックといえば宇宙でただ一つ、

「ダンデのハンモックだあああああああ！！！！うひゃーっほーい！！！」

「・・・喜代殿。朝の目覚ましは鶏で十分なんだが。。。。」

あ、起こしちゃった？？

照れ笑いを浮かべるあたしを寝起きのダンデは少々呆れ顔で眺める。

「さて、いい目覚めとは言い難いが今日はいい天気だなあ。気分はどうだ？」

「もう最っ高！ここって本当に眺めが良いよねえ。遠くの海の青からのグラデーションも、

絵の具を塗ったみたいな葉の緑も、空気も爽やか〜。」

すうつと息を吸っているとさつとダンデが近づいてキスをした。

柔らかい感触は今だ慣れなくて、何だかこしょばい。

ダンデはゆっくり離れてあたしを覗き込むように見、笑う

「ま、これが恋人との朝の常識だしな？」

そういい、面白いように茹でダコのあたしを放ってダンデは着替えるために上へひよいひよい上がっていった。  
待て。

あたしはどうすれば良いんだよ。

ダンデが先に行っちゃったら登れないじゃないか。

まあ、いっか。もうちょつと寝よう。

あたしは昨日までの事を思い返しながら幸せな微睡に入っていく

昨日、罪悪感で一杯のあたしをダンデ、ローズさん、おでこさん（ハイド）、クレマティス

、キャクタス、女中さん達が慰めてくれた。

それでもやっぱりぐずるあたしをダンデは昨夜あたしがきちんと寝付くまで

ハンモックで宥めてくれていたのだった。

そういえば、アゼイリアさんやシスル？さんはどうしたんだろう？

まあ、きつと客室に居るよね？

日帰りの感じ無かったし。

なんとなくアゼイリアさんを思う時、まだチクチク胸が痛いけど昨日のダンデの慰め方を知ってからあんまり痛まなくなった。

きつとダンデをもつと信用出来た証拠。

そう思うとにやけてしまう頬を掛け布団に隠しながらすつと寝息をたてはじめた。

しかし、

その寝息は馬のけたたましい嘶きに掻き消される。

100%覚醒！！！！

「な、何！？」

思わず海の方を見ると、馬車が飛んでいた。

すごいスピードで・・・

ひひひひひひいいん！！！！

すっげー。馬つてあんなに鳴けるんだ。。。

もう呆然としか出来ない

途端にダンデが窓からあたしを伺う

「喜代殿！今の嘶きは喜代殿が！？」

何とも言えない沈黙の末、喜代は愛おしい人に心から言った。

「死ね。」

- - - - -

「んもう！朝からシスルの馬で起きちゃったわよ！」

「・・・御免なさい。ローズ。シスルはスピード狂で馬を毎日シゴいているのが常なの。」

「おいおい、大丈夫なのかよ馬は。アゼイリアも何とか言っただけでやれつて。」

「馬子と馬夫はどんな試練にも耐えられる根性を持った自慢の相棒です。」

とやかく他人から言われたく無い。」

「まさしく馬だから馬鹿か。。。」

「でも、あたしは分かりますね！相棒つて！あたしもホウキと塵取りに名前付けようかな？」

リビングでの会話は和気あいあい？としたものだった。

だけれども、この会話の輪に入っていない、寧ろ入れない男が一人。

「ちよつとおダンデちゃんも何か言いなさ・・・御免なさい。無理ね。。。」

ローズは言いかけてやめる。

ダンデの喋れない理由。

頬がパンツパンに膨れ上がりでかいガーゼで覆われ小さい料理しか口に出来ない状態であつた。

ハイドはちよいちいっとクレマティスを呼び、

こしょこしょと質問を試みた

「・・・なあ、さつき朝食で呼びに行った時何か見てたか？」

「いいえ・・・ただ、あたしの前にキヤクタスが寝起きのおつかさんを見るつて風の如く去つて

行つたツス。」

「キヤクタスは？」

「憑き物が付いたように何も見ていないを繰り返してるツス。」

哀れキヤクタス。

「あ、ああそうだわ！そろそろ会議の準備に取り掛かりましょう！  
？キヨちゃんはお外で遊んだりしてて？」

思い出したようにローズは言い、朝食の場はお開きとなった。

そしてお昼ごろ。

カサカサと草を踏み踏み喜代は庭の雑草を抜いていた。

「皆今頃会議か」。何かあただけちよつと蚊帳の外っぱい。。。」

王帝会議とは、上級貴族から使用人まで全員引つくるめてする10年に一度あるかないかの会議であり、

よつて、城からは誰も居なくなるのだった。

ちよつぱり不服だけれど、無事にダンデの戦争行きが無くなります

様に！

眩しいお天道さまに手を合わせ、また喜代は庭の草むしりに戻る。  
不意に、小さくて小ぶりの紫色の花を見つけた。

何だっけ？物凄く地球にあるのに似ているな。

あ、図書室にいれば分かるかも！

ピューっと何もかもをそのままにして、図書室に駆け込み  
本を漁る。

「んーと、あ、あった！そうだそうだ！イヌフグリ！名前も一緒な  
んだあ！」

そこからどんどん面白くなってつい夢中で図鑑を繰っていくと、  
奇妙なことに気がついた。

・・・そういえば、皆の名前は植物だ。

ローズさんは薔薇。クレマティスはクレマチス。キヤクタスはサボ  
テン。おでこさん。

ハイド・ランガー？（憶えてた！？）は紫陽花。

アゼイリアさんはツツジ。シスルはあざみ。

ダンデは？ダンデリオンは分かる。

きつとダンデライオン。

たんぽぽだ。

ワクワクしながらそこに浮かぶ黄色いギザギザの葉っぱの絵を探す。  
しかし、捲っても捲っても出てこない。

他の図鑑も、次の図鑑も、

無い。

あたしは、以前トリユフが無いと知った事を思い出した。

たんぽぽ、無いのかなあ。

でも、じゃあ何でダンデリオンはダンデリオンという名なんだろう。  
。。

存在しないという、たんぽぽが酷く懐かしくて、そしてダンデに逢いたくて、

自然と足は会議室に向いていた。

## 2・12 名前とお花（後書き）

出来ればこれからガラスと交代ばんで週1投稿にします。  
ただ、いまかなりテンパっているのでどうなるか分かりませんが  
亀更新でも頑張って完結させてみます！  
お読み下さりありがとうございました！！

## 2・13 魅惑の会議室

テロテロと長い赤い絨毯の敷いてある廊下を駆け巡り、ゼイゼイ息を吐いて吸って、何キロかやつれて、ようやくあたしは会議室に着いた。

長すぎだし、複雑過ぎるだろここ・・・

会議室の扉は重々しく、何時だったかダンデと二人で食事に行った部屋と感じが似ていた。

・・・そういや、結局夕飯あの時食べなかったなあ。。

！！っといけないいけない！思い出に浸ってる場合じゃ無かった。  
・・・でも、今大事な会議中なんだよね。ただ逢いたくなつたから来たとか

あれ、あたし超KY！！！！？

ズガアアアアン！やばい！今更気づいちゃったよお！！？  
どうする！？帰る！？いやいや待て今引き返してもとの庭にたどり着けるか心配だ！

うっうん。あ、待つてれば？それなら良いよね！  
よし！

そう取り決め、重々しい扉に少しばかりの休憩と思い背を凭れた。  
ふう。

向かいには磨き抜かれた十字型の格子に分けられた窓が点々と長い壁に取り付けられて居る。

青空がこれでもか！つつーぐらい透き通って、温かな昼の日差しを透している。

緑色の謎のゲル状の物が木を伝ってぼとりと落ちる。

そんな情景を見て居ると、何だか、とつても、

眠くなっちゃうよおお。。。。

「ふ、ふわあああああつ」

やっぱいかなり瞼重い。

ま、いつかまだ会議中だ、し、、むにやむにや、、、、zzzzz

扉が勢いよく、蹴破られた。

「全く！何を考えとるんだ陛下は！！あのようなモノに自己決定権などあるはずが無いであろうが！！」

「甚だ愚かな化け物ですな。化け物は化け物らしく人間の役にたつてれば良いものを。」

「同感ですな。」

ゾロゾロと出て来た大臣達は口汚くダンデリオンを罵る。

「しかし、城内の人間も半数が戦争行き反対とは驚きました。これからどうしていこうか。。。」

そつと中年の小太りな男はもう一人のガリガリに痩せたヒゲばかり長い偉そうな男に耳打ちする。

「・・・ふん！奴らには金でも与えておけば言つことを聞きそうな下流の人間ばかりだ。」

放っておけ。ムギユ。。。。ぎゃああ！！！！」

驚くガリガリの足には何か柔らかいモノが踏まれていた。

「な、な、なんだこやつは！気色が悪い！」

「う、ううううっいきなり開けるなんて、反則、ゝ、だ。」

蹴破られた衝撃で吹っ飛ばされた喜代は窓に激突したりしてボロボロになり、

しかも踏まれて

まさに踏んだり蹴ったりである。あ、順序が違うか。

でも、喜代さんはめげまつせん！！！！

「ふんぬ！！」

気合いで立ち上がりしかと騒いでいた何人もの大臣達を睨み上げる。

瞬間。

喜代の心臓は大きなキュンツという音を立てた。

え、何故って？

ふはははははだって、だてだって！！！！

全員頭部がバーコードなんだものおおー！！！！！！！！！！

敵ながら天晴れなハゲっぷり。

もうダメクラクラして来ちゃった。

すると、続いて出て来たダンデと目が合う。

ダンデ、喜代の赤面を見た瞬間大臣達を射殺す様に睨めつける。

ひいつとどよめく大臣達。

「おい喜代殿！何があつた！？何故大臣なんかに赤面する！！」  
嫉妬全開のダンデはガンガン喜代を揺すり、

問い詰める。

余りの揺さぶりに青を通り越して白くなつた喜代は、  
その意識を手放してしまった。。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

ここは喜代殿の部屋。

只今、喜代殿は眠れる森の美女（ここ強調）  
状態である。

そこで俺は延々とローズに説教を食らっていたが、ついさつき終わ  
った。

もう外はうつすら暗くなつて来た。

喜代殿が目覚めたら、話しておかなければならないことが沢山あつ  
た。

半数ほどメイドや従者の者が味方に着いてくれた事や、  
諦めないで良かったと、ありがとうと、伝えたい。

・・・早く起きないかな。ちょっと揺さぶり過ぎたか？  
くそう。確かに加減が効かなかった。

会議でストレスやら色々食らつたし、やっと喜代殿に会えると思え  
ば喜代殿はあんな男共に  
現を抜かしているし、

・・・俺ってかなり情けないなあ。。。ハァァ。

いや、でも喜代殿は、こんなんでも好いてくれているんだよな。

俺はそれを信じて、生きていいんだよな。

良いと喜代殿は言ってくれたんだよな。

「喜代殿。。。大好きだ。」

堪らず呟き、

そつと柔らかな黒髪の一束をとりキスを贈る。

それだけで俺は甘く心が締め付けられる

「ふむ、ちよつと、外の空気でも吸って来るか。喜代殿、また来る。」

「

外は海がもう満ちていて、ジャボジャボと膝まで浸かってしまう。

今日は随分と星が綺麗だ。色まで分かる。

どれくらい星を見ていたんだろうか、ふと気づけば海は腿まで上がっていた。

「うわっ早く戻ろう！」

そう言いくるりと身体を回すと、城の隣にある丘に人影が見えた。

・・・？あれは、リア、姉さん？

キラキラと輝く金髪はやはりリア姉さんのものだ。

あんな所でいったい何を？

そうおもっていると、リア姉さんは両手を組み祈る様に額に付けた。

そこで俺は悟った。

ああ、そうかリア姉さんは毎日祈って居るんだ。

毎日、あのもう居ない恋人を思つて。

リア姉さんは俺に慰めを求めたから、事情は一応聞いているがまだよく分からない。

何故、俺に慰めを求めたのかすら分からないんだ。。

聞いてはいけない気がするから、聞かないがその恋人は何処の誰だったのであるう。。。

大きくしゃみが出た。

忌々しそうに俺はティッシュで拭くと、もうリア姉さんは見ずに城へ向かった。

まだ、何も解決はして居ない。

リア姉さんの事も大事だが、今は自分自身の事だ。

喜代殿、俺は、諦めないぞ。

## 2・14うふふなお散歩

カチャカチャと食器の触れ合う音がリビングに響く中、ローズは100年に一度あるかないかという難しい顔をしていた。

「・・・あのローズさん。顔が、、」

「・・・・・・・・。。」

無言でレタスを口に運ぶローズさん。どうやらあたしの声は聞こえないようだ。

今の気持ちを正直に話そうか、

怖い。

ガチ恐い。

ローズさんは、なまじ顔がいいから、真剣な顔つきをされるとその、男性的な魅力が、フェロモンが、男らしさが、

溢れ出ているのですよ!!!!!!!!!!

そして、なにが怖かった？

こんなにいい男の代表!!!みたいな人から、、

「あ、ねえダンデちゃん。お醤油取ってくれないかしらん？」

呼ばれたダンデの顔が蒼白になる。

・・・・・・・・来ちゃったよ。

だから恐れていたんだよ。ハンサムなお兄様から出てきたテノールを無理やりソプラノにしようと足掻いたような声がするなんて誰が想像出来よう！！（泣）

余りのミスマッチさに涙がちよちよぎれる。

ああ、神よ！何故貴方はローズさんを男にした！！

喜代は天を仰いだ。

ノックの後、

コロコロと、クレマティスがお茶を運んでくる。

「陛下」。顔が凶悪ツスヨー？なんかブルーな感じ？」

はい、そこー空気読めてないぜー

しかし、どうやらクレマティスの直球な指摘により、ローズは少しだけ

顔を和らげた。

「なあ、ローズ。最近、色々大変だろうけど食事ぐらいは安心して食べないか？

不味そうな顔をされるのは、まあ、不愉快だし、」

ダンデも、そういい、ローズの反応をみる。

すると、ローズは何かを、決心したかのような声を上げた。

「切るわ。」

?????

「皆、あたし、遂に、お、女の子に、なる・・・の。あのね

昨夜、やっと地球から留学していた研究者が帰ってきて、

もう、今夜から開始できそうで、研究室に、そろそろ行くの。

準備は万端なのに、

それでもやっぱりすごく緊張するの  
もし失敗しちゃったらって、ずっと女の子でいたいって思っ  
て、最後の砦だから。

失敗して、男としても、女としても生きられ無い不安定な生活  
がまたずっと続くのかもって

思う、と。

じんわりとローズさんの目に涙が浮かんた。

不安な気持ち、辺りに伝染していくのが分かった。  
あたしも、思わず俯いてしまう。

「・・・失敗なんか、しないッスよ。」

ハッと顔を上げ、三人はクレマティスを上げた見つめた。  
そう断言するクレマティスはキラキラして、カッコよかった。  
うん、そうだよ。

こんなにローズさんは願ったんだから、失敗なんかしないよ!!

「ローズさん！早くもって綺麗になってね！」

「キヨちゃん・・・！」

「ローズ。いや、姉貴。頑張れよ。」

ダンデの言葉にぼたぼたと、号泣しながらローズさんは部屋を後に  
し、着替えに行った。

・・・遂に来たのかあ。

あたしが思いつきで言ったのに、こんな事になるなんてなあ。  
てか、あたしあの王様の妃にさせられようと・・・？  
思えばであった時は驚いたなあ。

上半身マツパの王様や、

猫の仮面を付けた王子様や、（常識にうるさい）

ギャル系のメイドさんや、

お兄さんのな輝くデコの郵便配達人や、

忍者服のコックさん。

皆皆、大事な仲間。あたしの居場所になっていった。

この星。グリア星。

うん、今日も、きちんと生きていこう。

「ダンデ、今日は会議はなさそうだね。」

「ん？ああ、まあな。反乱も、調査によれば今は休戦状態らしいし、

まだ出なくて良さそうだ。しかし、被害に遭った村や街の復

興も手助けするから

おちおちしてはいられないんだ。まあ、今日はゆっくりさせて  
もらうが。」

なるへろ。

「じゃあさ！皆でローズさんのためにパーティーしようよ！！」

「イイツスね！それ！マジ喜代様パネえッス！」

「いいな、それ。そうだリア姉さんの歓迎会も含めてやるか。」

「うん！やろうー！！ようしガンバッぞ！」

右手を高々と突き上げた。

そして、あたしは

ダンデに頼み、おでこさんを探すために街に出た。

どうやら、大半が木でできてる街だからか、木からロープウェイを付けて移動をしているらしい。

そして、馬鹿でかいクマのぬいぐるみを抱えたおでこさんに無事、たどり着けた。

「おでこさん！！」

呼ぶと、おでこさんはよろめきながら振り返ってくれた。

「おう。嬢ちゃんにダンデじゃねえか。どうした？」

「今夜パーティーをしようと思って！ローズさんとアゼイリアさんのために！」

「ああん？なんでローズなんだい？」

困り顔のおでこさんに、説明してやる。

「ふうん。成る程ねえ。だからあいつ昨日あんな事。。。」

おでこさんはそういい、してやったりというようにニヤリと口元を曲げる。

「あんな事ってなんだ？」

あたしが寝てる間なんかあった？

ダンデを見ればダンデも同じくハテナ顔。

ま、いつか！

「じゃあまたパーティーで！」

「ん。分かったよ。じゃあな。」

おでこさんは颯爽とクマを抱え、走り去って行った。

そして、小さい子達はクマが走ってる！！と興奮して後を追って行った。

残されたあたし達は暫く街をウロウロしようと決める。  
薬屋にて、

「ダンデ！これなに??」

「ああ、それは毒草だ」

昆虫屋にて

「ダンデ！これは？」

「毒虫だな。」

雑貨屋にて

「ねえこれは？」

「毒だ。」

もはや、唯の毒かよ・・・

何故こんなにも、毒が出回っている。。。

おかしいおかしすぎるよ。

「まあ、この星の特産品は毒だし、仕方ない。」

「いや、よくわかんないよ。やってける?そんな商売。」

「毒と薬は紙一重だ。使い方を間違えなければ死にはしないよ。」

そういつつ、あたしの左手をダンデの右手が包んだ。

・・・とりあえず、やるタイミングがずれてるよね。

まあ嬉しいけど。

あれ?待って!

この状況!これってデート!?デートだああ!!!

そう判断した喜代。

一方ダンデは?

・・・こうやって喜代殿と手を繋ぎ、街を歩くのは初めてだなあ。

ん？そういえばハイドに、昔聞いたが、恋人が共に歩くというのは、いわゆる

この星から代々から伝わる。ええと、なんだっけ？

「・・・ニート？」

「は？なにいつてんのダンデ。」

「チート？」

「強いな。」

「あ、デート！！」

「あー！デート！？なんだダンデも気づいたんだ！！」

「そうかそうか。デートだ喜代殿。俺らはデートをしているんだ！」

「そうだよ！そうだよ！じゃあ、さっそく別の店を巡ろうじゃないか。」

越後屋と書かれた看板に向かおうとすると、ダンデに急に腕を掴まれた。

「？何？ダンデ。」

「恋人のデートというのはこの星では何処にいくかルートが決まってるんだ。」

「え！？そうなの？まあこっちも遊園地とかは定番だけど、」

「じゃあ、まず何処に行くの！！」

ワクワクしながら、ダンデの次の言葉を待つ。

ダンデも、ニコニコと無邪気な笑顔を振りまき、口を開いた。

「ホテルだ。」

．．．．．それ、いきなりゴールイン。

そろそろ時刻はお昼になろうとしていた。

え？ナニコレ

断わる？行っちゃう？理由聞く？引っぱたく？

どーすんの！！あたし！！！！

## 2・14うふふなお散歩（後書き）

うつわ怪しく終わった！！しかも終わり方が某cmのようだ。ちょっと古いですかねえ？

## 2・15 肉食系植物男子!!?

ちよ、ちよつまっダンデエエエエ!!

待つて、ねえまとうか!あ、あたはまだ未成年だし、

ここここのう事はその、将来を約束した人じゃなきゃ、、モジ  
モジ

そんな事を脳内で喚いても当のダンデリオンには全く聞こえず、  
喜代はガチガチに固まった状態で手首を握られながらホテルへと引  
きずられて行くのであった。

ホテル、「やどり木」は、モロにピンクなオーラのする所では無く  
寧ろ落ち着いた和風な、旅館と言った方がしっくりくる  
建物であった。

大樹の胴体に作られた障子張りの扉をいそいそと開けるダンデの足  
は地面から  
数ミリ浮いているように見える。(浮き足立つとかいうのは本当だ  
った!!!)

そして、色々とフロントで話し、ダンデは鍵をもらいました。

そして、桜が散って行く様が描かれた襖をダンデは開けました。

そして、ふつくらとした座布団をダンデは二つ並べました。

そして、その座布団を二つに畳み、喜代の頭をそこに置き、横に寝  
かせました。

そして、ダンデは、、、、自らも同じ様な事をして喜代の隣に寝っ

転がりました。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

喜代は、目をぱっちり開けて心から叫びました。

「何プレイだよ！！！！！！！」

「おお！？どうしたのだ喜代殿！？プレイとは！？」

「いや、プレイは、、ごによごによ、まあいいよ！ダンデ！君は何がしたかったの！？」

「喜代殿と寝たい。」

・・・・・・・・まんまの意味いい！！？

喜代、ダンデの純粹っぷりに開いた口が閉じません。

注：ここからは喜代の口が閉じるまで喜代とダンデの目だけの会話となります

・・ダンデ、いくつだっけ？

27だが？

・・えっと、恋のABCって知ってる？

えーびーしー？

すまない。えびで始まる単語は神様とフライしか知らないな。

いや、恵比寿とエビフライのことじゃ無くて、、その、ふ、夫婦

の営みというか、、

夫婦の営み？・・・ああ！理解した・・・・・・・・（赤面）

喜代はダンデの赤面をみた瞬間、稲妻が身体を駆けたように理解した！！！！ピッシヤアアン！！！！

ダンデは、純情純粹チエリーボーイだ！！！！！！！！！！

・・・喜代殿、先ほどから顎の骨がみしみし言っている。そろそろ閉じなさい　　バチン！！！！

「は！あ、ありがとう。気がつかなかったよ。」

「そうか、で、喜代殿？そのう、どうしてあんな事を聞いたのだ？」

「え！？えと、うん！だってダンデもい、一応男の人だし・・・」

「ま、まあな。確かに考える事もあるが、（たじたじ）しかし、場はちゃんとわきまえる！

ここはそんな事をする場所じゃない！」

「え！？じゃあどんな場所？」

「ふむ、そういえば喜代殿にはこの星の建物のことは全く教えていなかったな。

ここはな、付き合ったカップルが落ち着いてのんびり互いを知れるように

畳みと、温かい日差しを浴びておしゃべりやお昼寝が出来る所なのさ。」

現に、今春のような温かい日差しが照っていて  
頭が上手く機能しなくなっていた。

「・・・そ、そつか。かなりほのぼのとしたお付き合いなんだね。」

「そつか？この星では普通だが、地球はどうなんだ？」

「うん？地球は、まあ遊園地とか行く。」

「ああ、遊園地か。喜代殿はそこに行きたいのか？」

「いや、あたしはゴミ溜め。。。」「

「そつかあ、それはいいなあ。」「

「うん。そこでね、一緒にお掃除して青春の汗を流すの。」「

「うん。それはいいなあ。今度やろう。」「

「え？いいのお？」「

「もちろん。喜代殿には喜んで欲しい。」「

「ありがとう。。。じゃあ今度生ゴミを拾い集めようね。」「

ダンデは、後にこの時頭が弱っていなかったらと深く後悔するのであつた。

・・・変色したりんごの皮を拾いながら。

すやすやと寝息が聞こえる。

ダンデ、もう寝ちゃったみたい。ちよつとつまないな。。。

そういえば、何度と無くダンデのハンモックで寝てるけど

ダンデの寝顔ってあんまり見たことないかも。。。

ダンデの寝顔かあ、まあ昼間もそうだけど無邪気だなあああ！！！！

なんなのこの無邪気っぷり！生まれたての赤ちゃんか！？

いやいや！でもちゃんと男らしい感じもあるよ！？僅かだけど！

でも、、、やばい、、、

悪戯したい。

と、ととりあえず鼻を摘まむところから、、イッテミヨウ！

ぎゅうつうつうつうつうつうつうつ！……！……よく、ダンデ起き  
なかったな。）

まあ、まずは軽くね！（マジで！??）

お次は、なんかマジックペンとかないかな？目でも描いちゃえ。  
えーっと机のペンたてを漁ろう。

そうあたしは思っ、ダンデに背を向けてペンを漁る。  
すると、襖の奥で女中さんっぽい声が聞こえた。

「……ねえ、今日はちょっとおかしくない？」

「え？何がよ。あたし今食事を届けに行くんだけど、、」

「ああ、ごめん。でもさ、もうすぐ夕方だったのに一向に潮が満ち  
る気配がないのよ。」

「ええ？……あら本当！カラツカラだわ！どうしたのかしら？」

「さあ、、ま、気のせいよねすぐ満ちるわ。ごめんなさい引き止  
めて。」

「ええ、別に大丈夫よ。じゃあね。」スタタタタ

「……気のせい、、よね。だって、潮が無いとこの星は壊れ  
ちゃうんだし。うん！

さーて、仕事仕事！」スタタタタ

THE 聞き耳喜代さんは全てを聞いた。

夕方になっても潮が満ちない？そんなわけあらへんやろお。  
でも、、そんなに潮ってこの星にとつて大事だったんだ。。  
まあ地球もそうだしね。お、ペン見つかった！油性か、、まあい  
つか！

「ふんふんふーん。ダン・ン・デ。お待たせ。。。。」  
ゆつくりと振り返りながら立ち上がったあたしは、  
漫画のようにペンを手元から落とした。

それは、音も無く畳の上を転がり、薄茶色の物へとぶつかった。

ダンデは、まだ心地よく眠っている。  
しかし、ダンデには確かな変化が起きていた。

薄茶色の物。

ダンデの、緑色の髪の毛が、  
薄茶色の人間の髪へと、変化していた。

## 2・15 肉食系植物男子!!?(後書き)

更新!やっとできましたああ!

そして、今度こそはちゃんと続けて更新したいです!!!(、|、)

## 2・16 アゼイリアの想いピト

段々と喜代殿と横になっていると、  
瞼が重くなつて来る。

もう、寝てしまおうか、、、

いや、まだ、もう少し、、もう少しだけ喜代殿と居る実感を味わいたい。

ああ、なんだか身体もろとも重いなあ。

どうしたんだろうか。。。喜代殿。喜代殿俺は、  
なんだかおかしい。

なのに、、、ねむ、い、、、

遂に瞼を閉じてしまった。。。  
でも、明るいなあ。

ああ、そうか。あれは夕日だ。もうすぐ潮が来る。

早く、帰ろう喜代殿。。

ローズが、姉貴になって、、帰って来るから。

.....  
.....

「それで、嬢ちゃん。ダンデはずっと目を覚まさないのか？」

すっかり人気のなくなったホテルの一室で、

喜代は涙目になりながらハイドにこの事を話していた。

「？ん、な、なにが、何だかもう、良くわかんなくて・・・ずずず」

おでこさんならすぐ来てくれると思ったの、  
ふるふると黒目を揺らし、溢れた涙が畳に染み込んで行く。

「そつか。怖かったろ。頑張ったよ嬢ちゃんは、

よし、こっからは俺の仕事だ！しっかりこの荷物を運ばせて貰うぜ！」

そっくり、喜代の頭を二回ほど撫でると、  
ダンデを軽々肩に担ぎ上げた。

喜代は、おでこさんは意外と力持ちだと思ったが、

ハイド自身は、ダンデの身体の軽さに心底驚いていた。

・・・なんでこいつ、こんなに軽い？これは異常な軽さだ。。

まさか呪いのせいとか言わないでくれよ・・・？

寧ろ呪いは解けている筈なのに。

胸騒ぎが止まらない。

城に戻ると、クレマティスやこ、怖いけどキャクタスも迎えてくれ

たし、

アゼイリアさん達も心配してくれていた。

ローズさんは、、まだ帰ってない。

「喜代様ああ！！！！ずっとぐじんばいしまじたーッス！！」

クレマティスなんかは、何時もの気だるい感じが消え失せて号泣してたし・・・

そして、あたしはダンデをローズさんのベッドを借りてそこに寝かせ皆に事情を話した。

呪いについては、

あたしも少しうやむやな感じにしまった。

だって、人の暗い過去だし、絶対ダンデは嫌がるから。。  
ちよっと嘘ついちゃった。

「な、なるほどダンデ様には、そんな壮絶な過去が、、」

クレマティスがよろつとよろけている。

「せ、拙者ダンデに呪われ王子なんて、言っちゃって、、ぐすん。」

キャクタスは自分を責める。

「・・・ダンデの、髪は、、イメチェンだと思っていたわ、、

」

何気にすごい事言っているアゼイリアさん。

「だって、まさかダンデ様がハゲの神になる運命を背負いになり、

それを妬んだ多くのフサフサ共に草の髪の毛になる育毛剤を飲まされたなんて！！」

遂に、クレマティスの目から少女漫画の様な涙が溢れた。

「そう、そうなの！！まさにリアル飲んで飲んで育毛剤。。。」「  
喜代は目一杯悲観にくれた顔をしたが、  
内心したり顔であった。

しかし、ダンデの問題は片付いてない。

喜代の心に不安が入り込み、覆い潰そうとする。

そんな不安を余所に、

唯一、何故か事情を知るハイドは思った。

嬢ちゃんの頭を針で刺したら

無数のハゲ映像が噴き出るんだろうな、、、こう、プシャアアっと、  
、、

ふと、遠い目になりかけていたがドアのノック音でハッと我に帰り、  
扉に視線を注ぐ。

シウルシウルと開いて行く扉の向こうに小柄な人影。

・・・暫く見惚れてたのは仕方ねえだろこれは、、、

そうばやき滅多に変わらない顔色が仄かに赤らんだ。

ハイドの視線の向こうには、

王子の自分を救ってくれ、この星で彼に仕事を与えてくれた恩人。

そして、王子の時から親友。

ククア・ローズの面影が確に残る、美女が立っていた。

時が止まるって、きつとこういう事だ。。

ハイドさんもクレマティスもキャクタスもアゼイリアさん達も  
みーんな、彼女を見て、固まっている。

ローズさん。ローズさん！ローズさん！！

そこにいるだけで安心が生まれる。我らが王女！

「ロー、ズさぁん！！！」

ぶわぶわと一気に涙が零れる。

おでこさんもそう、あたしの周りにはあたしをホッとさせてくれる  
人のばかりだ。。

ローズさんは、くるりと皆を見回し。

ダンデに一直線に向かって行つた。

「・・・ダンデちゃん！髪が、、」

「そうなの！！ダンデが、ホテルで寝てたら何時のまにか、こうで、  
もうずっと起きなくて、う、うわあああぁん！！！」

「キヨちゃん。泣くのを10秒でやめてダンデの手を握ってて、も  
う少し詳しく話して。」

キャクタス！あなたは今すぐたくさんの料理を作りなさい！  
体力をつけておくのよ

クレマティス！貴方は大臣達にこの事を知らせて！

ハイド！研究所に連絡を！まだそこら辺にいるわ。

アゼイリア達は、キャクタスの手伝いをお願い！

全員。これは非常事態なの。すぐに始めてお願いします！！」

その言葉を引き金に、皆は一目散に去って行つた。

・・・アゼイリアさんだけは、残ったままで。

「アゼイリアっお願い込み入った話をするの、部屋を出てくれない？」

シスルさんは真っ先にキャクタスとともに行ったのに、なんで？

すると、アゼイリアさんが口を開いた  
何かに責められるように、酷く青い顔をしながら。

「ダンデリオンが、目覚めない。そして、潮が満ちない。

私、この原因がわかっていないのかもしれない・・・！」

！！？

緊張が走る。

「それは？どうゆう事？アゼイリア。」

「もう少しでこの星に、あの人が来るの。それも、理解し難い方法で、」

「もったいつけないで教えなさい！」

ピリピリと振動する空気を物ともせず、

アゼイリアさんは何かに浮かされた様にロケットペンダントを取り出し

開いて言った

「あの人ったらあの人よ。喜代ちゃんと同じ異世界の人間。私の、唯一愛した

運命の人よ・・・!。」

途端にアゼイリアさんは崩れ落ち、  
ローズさんは、アゼイリアの側に駆け寄る

カランカランツと乾いた音と共に落ちたロケットペンダントを  
あたしは拾い、  
一目見た瞬間、落としてしまった。

「え・・・？なに、これ。どういう事、、、」  
上の空で呟く喜代の声は酷く小さく、震えていた。

ペンダントの写真は微笑んでいる  
その人は紛れもなく、

先生だった。

## 0 量の上で（前書き）

アゼイリアの過去編です。

## 0 畳の上で

また、咳が止まらなくなった。

もうこんな生活にうんざりして、

見飽きた森林の風景を眺めていた時

私はあなたの元に来たの。。。

あれは、ダンデリオンの行方が分からなくなり10年がたとうとしている時で、

漸く18になったローズは王位を継承し、

父親が亡くなった瞬間からダンデリオンの行方を本格的に探し始めた。

そうして、あたしはもうすぐ17になろうとしているのに、

何も出来ずただこうしてベッドで横になるばかり、、

情けなさすぎよ。。。

「はあ。。。」

「アゼイリア様。お具合のほどは？」

「ん？ああ、シスル。。まあいい方よ今日は、」

本当は咳したいけれど、ここでしたらまた療養生活が長引くわ

「そうですか、、ところでアゼイリア様。」

「なあに？」

「先日、馬子に弟が誕生しまして名前をつけていただきたく思うのですが、」

・・・どうでもいいって言うのはさすがに駄目かしら？

「そう、ね、馬夫でどう？」

「いいお名前！！さすがアゼイリア様！素晴らしいでございます」  
シスルが感涙の涙を流す。

・・・馬に関してだけ彼は感情豊かだ。

ああ、なんだか動きたい。  
ん、そうだ。

「シスル。。。」

「はい。なんでしょうか。」

「馬夫を見せて欲しいの。駄目かし！いいです！寧ろお願いします。」

「

やったあ。

そして、喜んだその瞬間。

私は畳という所に座っていた。

目の前には、紙コップをもち中の麵をズズズズ啜っている男性。

いや、その男性はもう啜るのをやめ、

目を見開いて私を見ている。

・・・ここは、何処？誰？何でいるの！？

頭の中はパニックなのにあたしは顔には出ない。

そして、男性はゆっくり箸をおき、

微笑んだ。

・・・トクン、と場違いな鼓動に更に内心焦る。

え、えと、まずはここが何処だかきこう。

「あ、あの、ここ、はどこ、です、か？」

震える声で途切れ途切れに質問する。

すると、あなたは少し驚いた顔をして安心したように笑った。

「ああ、良かった日本語が話せるんですね。

そうですね。安心してください。僕は普通の保父を目指す学生です。

そしてここは私の家。ああ、申し遅れました僕は佐々山。と言います。」

そう言っただけで会釈をする姿に私は思わず見入ってしまった。  
いきなり家に現れた人間にここまで礼儀正しくするなんて、

そして、あなたはちょっと困ったようにはにかんだ

「あの、こんな状況ですから僕もかなり混乱しているんです。

良かったら、あなたのことも教えてくれませんか？名前とか」

「・・・あ、アゼイリア。です。」

「アゼイリアさんですか。よろしくお願いします。あの、あとは、

日本には何故いらしたんですか？」

「え？ニホ、ン？」

静かな間が流れた。。。

「も、しかして、日本を知りませんか？」  
静かに頷く。

「貴方の、出身地は？」

「あ、グリア星から来ました。あの、でも何で来てしまったのか、

ここはグリア星では無いのですよね。

ニホン？？ニホン星なんて星あったかしら？いやでも、、」

何時の間にか独り言を呟くアゼイリアを  
しばらく佐々山は観察して見ることにした。

そして、わかった事。

信用はしても大丈夫だが言動に多少おかしな点が見られる。

グリア星。

聞いた事もないその星に、少なからず精神障害の可能性も考えるが  
すぐに却下した。

会話は普通に成り立つし、見なりもきちんとしている  
多少顔は青白いけれど健康状態は良い、、かな

「あの、すみません。グリア星というのを僕は聞いたことが無いんです。

ここはニホンという国ですが、大きく言ってしまうと地球という星なんです。

地球はお聞きしたことは？」

チキュウ、、

いや、無い。

左右に首をふる。

「そうですか。。。では、今から僕が言うことは僕の世界では100%迷信だと

言われてきたことです。」

「は、はあ。」

「ですから、本当にそうだとは言い切れないし、

どうしていいのかもよくわかりませんが、一緒に頑張っているってもらえますか？」

コクンと頷く。

それに安堵したようにあなたはまた微笑んで、言った。

「あなたは、異世界にトリップをしてしまったんです。」

## 0 辛い辛い嬉しい

あの衝撃的な言葉を聞いてから、もうどれ位経ったのだろうか、、、ササヤマ君はあたしの帰る術を全力で見つけてあげると言ってくれて、

気がつけばあたしはササヤマ君と二人で暮らしていた。

まあ、あたしも年頃で

しかも一つ屋根の下で何も無いなんて考えられないと思うけどササヤマ君はあたしに何もして来なかった。

それは始めはあたしに安心感を与えたが、ある時を境に不安へと変わっていった。その、ある時とは

あたしがササヤマ君に恋心を抱いていると感じた瞬間だった。

ササヤマ君はあたしをどう思っているのかしら。

いつ見ても笑ってくれるのに、絶対に考えていることが分からない。もしかしたら、他の女の人の前では違うのかな？もっと、色々言っているのかな？

ササヤマ君は、いつも言うから、

「アゼイリアさんのやりたいうようにして良いよ。」って。

その言葉はどこか壁を感じて苦しいの、、、

そんな事を思っていたある日、

決定的な瞬間を見た。

ササヤマ君が珍しくレポートを忘れていった。

ダイガクという所の場所は一度連れてってもらったから分かるし、何よりササヤマ君の役にたてるのが嬉しくて早足でかけていった。

ダイガクはとても大きく、どうやったらササヤマ君に会えるかまで考えてなかった

あたしは、途方に暮れた。

すると、中庭から声がした。

・・・ササヤマ君！

確信した瞬間に脚は中庭の方に向かう。

そして、見てしまった。

「英雄君！」

「ん？何かな？」

「何かなじゃないよ！一緒にお昼食べよって言ったの英雄君じゃん！」

「ああ！ごめんごめん、、考え事してたらね、、」

「もゝ。まあいいよ！早く行こ！」

そう言った女の人は、ササヤマ君の腕に自分の腕を絡めた。

それだけで、全て分かる。

でも、なんで？ササヤマ君は、ヒデオなの？

彼女にだけ？そう呼ばせるのは、、

そんなに特別なんだ、、

その場で泣くのは流石にあれだから、

部屋に戻って泣きはらした。

帰りたい、もうここに居たくない。

帰る、帰る帰る帰る！！！！

でも、目を開けても目の前はもはや見慣れてしまったあの人に部屋。

「・・・帰りたい。」

ドサッ

物を落とす音がして

バツと後ろを振り返った。

「ササ、ヤマ君」

「・・・ただいま。」

その返事が異常に暗い事に、気づく。

「ど、うしたの？顔色、悪いよ？」

あの女の人と喧嘩したの？

ああ、貴方がそんな顔をするのを初めて見る。

あの人だけが彼の心を動かせるのかな。。。

痛む心が更に悲鳴をあげ、  
緩んでいた涙腺から涙が膨らんで、溢れた。

もう、限界よ、、

「ササヤマ君、あたし、」

ここから出て行く。

その言葉はササヤマ君の胸に埋れて、  
伝わらなかった。

・・・あたし、抱きしめられてる。

それがたとえ涙を流した人間を宥める行為だとしても  
あたしは天にも昇る気持ちだった。

「・・・ササヤマ君？」

「ゴメン。アゼイリア」

初めて呼び捨てにされた！！

「アゼイリア。アゼイリア。本当にごめんなさい。」

「な、なんで貴方が謝るの？」

ふっとササヤマ君の腕から力が抜ける。

「・・・僕は、君の帰る術を見つけないとずっと思っていた。  
そして、君の気持ちを無視して、僕はなんの努力もしないで  
のんきに君と暮らして居たんだ！

呆れたろう？君には帰れる様に全力を尽くすといっておきながら、

本当は帰らずずっと、、、、」

ずっと？

「ずっとここで僕と共に生きて欲しいと願って居たんだ。

僕は、君のいない生活になんて最早耐えられない。だって君が余りにも魅力的だったから。そうして愚かな僕はそれに抗えずに、君をここまで追い詰めた。」

「・・・・・・・・。。。」

「アゼイリア。ごめん。」

ササヤマ君があたしの身体を解放し、床に頭を付けて謝る。

「う・・・ひつく・・・ずずっう、うわああ、んんっぐすっえええんっ・・・・・・・・！」

遂にあたしの涙の堤防が、決壊した。

「う、ううっずびっサ、ササヤマ君。あたし、あたしね、

あのね、聞いて、ずずっあたしね・・・・・・・・！」

「うん。何だい？ゆっくりでいい。何でもいつて。」

ササヤマ君の大きな手が、宥める様にあたしの後頭部を撫でた。

「あたし、、、、ササヤマ君が、好き。。。。大好き。」

「っ!？」

ササヤマ君の手が止まった。

そして、ササヤマ君はさっきよりもずっと強く、あたしを抱きしめた。

「今の、前言撤回は許さないよ？いい？」

「ずずつ。い、良いに決まって、ゝゝ」

「アゼイリア。愛してます！」

そう言って、ササヤマ君とあたしは互いの唇を重ねあった。

## 0 離れても、離れても

意外とササヤマ君の身体はがっしりしていた事に、改めて驚き、そして、昨日の事をありありと思い出してしまった。あたしはササヤマ君の裸の胸と腕に包まれながら、恥ずかしさに悶えていた。

そう言えば、ここへ来てから全く体調を崩していないなあ。ササヤマ君と居ると凄く落ち着くからかな？ ああ、きっとそうなんだろうな。

ササヤマ君、、、　　ササヤマ君、、、、

いつしか貴方はあたしの全てになっていたんだね。

あたしの全ては貴方次第。

きつともうあの星へは戻らないし、戻りたく無い。。。

ローズや、シスルにも会いたいと思うけれど、、二度とササヤマ君に会えなくなるならいいと思ってしまっ。。。

ここで、ササヤマ君と一緒に、幸せになりたいな。。。

私は、今思う。そんな事を願ってしまう様なズルい人間だったからササヤマ君の側から落っこちてしまったんだと、、

神様がこんな醜い人間はササヤマ君に似合わないと思ったから、私に罰を下したのだろう。と、

・・・ソレは、唐突に私たちを引き裂いた。

ある日のこと。あたしは、毎朝起きるとササヤマ君の朝食を作る。ずっと向こうでは家に引き籠もっていたから、料理を趣味としていた所があつてそれが昂じた。

鼻歌まじりに目玉焼きを作っていると、ササヤマ君が起きてくる。

「んん？・・・いい匂い。。。アゼイリアさんおはよう。」

人懐っこい笑顔で挨拶をしてくれるササヤマ君。

彼が朗らかに笑う度に寝癖のたつ髪がふわふわ揺れて、優しい波の様だと思った。

それにしても、夜のその、あの時は何時も呼び捨てなのに普段はさん付けだから逆に恥ずかしい。。。。

「おはよう。ササヤマ君。コーヒー？紅茶？」

「緑茶で、」

そう言つて、ササヤマ君は軽く笑いながら洗面台に行った。

最近ササヤマ君の洗面台を使う時間が増えた、、気がする。どうしてなんだろう？

お髭を剃っているのかな？いや、でもそんなの前からだし、、

・・・少し手が空いたので、ササヤマ君のいる洗面台に行った。

「あの、ササヤマ君？」

ガツッガシヤガシヤガツチャーン！！

「あ、アゼイリアさん！？ななに？かな？ん？」  
ものすごく挙動不審ね、、  
それよりも落とした洗面器具壊れてないかしら？

「えっと、そのなんでも無いの。ただササヤマ君なにしてるのかな  
って、、」

そついいながら、あたしは落ちた洗面器具をとろうとする。

「あ、あああ！だ、駄目！」

「えっ・・・？」

ササヤマ君の怒鳴り声、初めて聞いた

「つづ、ごめんなさい。。。」

「あ、いや。こっちこそごめん。。その、ここは僕がやるから、  
行つていいよ。」

「・・・うん。」

・・・どうしよう。。怒っちゃった？

ああもう、あたしってなんて不器用なの・・・！

こんなんじゃない嫌われてしまう！

その後の朝食は、気まずくて重苦しかった。

何も喋らないササヤマ君は、仏頂面のような感じで、少し、怖かつ

た。。

「・・・アゼイリアさん。その、聞きたい事、があつて、  
歯切れ悪く、ササヤマ君が口を切った」

「ん？なあに？」

「ア、アゼイリアさんには、昔、その、恋仲、、の人っていたの  
？」

突然の質問。

「え？いないよ？」

「そつか、、えと、な、なら理想の男、とかは？」

ますます意味が分からなくなってくる。

理想？？そんなもの抱く余裕なんて向こうでは無かった。

ひたすら咳と戦い。病を悪化させない様に氣を使う生活で、、

もしも、今考えるなら、、居てくれるだけで安心出来て、ふわふわと

空を飛ぶような気持ちを持たせてくれる。。

「・・・理想は、ササヤマ君だよ。」

思わず、呟いていた。

「・・・？ササヤマ君？」

ササヤマ君が机に突っ伏してしまった。

あれ？お腹痛いのかな？

「・・・・反則だね？その顔。。。」

呻くように机と顔の狭間から声を漏らすササヤマ君。

?? 顔?

「ああもつ。。。いいです、はははっ・・・まあつまり、

僕は幸せすぎて今にも天から迎えがきそうって事です。」

!!?

「そ、そんなの、、、いや、、、」  
死ぬなんて嫌。。。

「え? あれ? アゼイリアさん? じよ、冗談ですよ。

大丈夫。アゼイリアさんが居るなら神様に縋られたって僕は死んでなんかやりませんから。」

そう言つて、ササヤマ君はあたしの頬を撫でて、大学へ行った。

・・・何時か。皆死んでしまふ。

ササヤマ君だつて、あたしだつて、

ササヤマ君を残して逝くのはやだな。

また、ササヤマ君はカップラーメン生活に戻っちゃうし、

ササヤマ君が大学を卒業したら、結婚とか考えてくれるかな?

「ふふっ・・・」

一人でリビングで笑ってしまった。

・・・そう言えば、ササヤマ君。なにしてたんだろう?

トコトコと洗面台に向かうと、棚の一番上、あたしの手の届かない所に

何かボトルを発見した。

「???なにかしら?・・・んー読めない。  
ん?これはなんだろう?」

小さな可愛い小箱が洗面台の棚の中にあつた。  
上には届かなくても、これにはやすやす届く。

開らいてみると、ロケットペンダントだった。  
手紙がはいっている。

もしかして、、誰かから贈り物?

いけないとは思いつつ、手紙を、開けた。。。

【アゼイリアへ。僕は正直言つて、とても、とても不安です。

毎日貴女が居ることに大きな喜びを感じつつも、これが永遠  
だと信じることが、

今の僕には出来ないで居る。

だから、これを贈る。

僕らがたとえ離れようとも、心は離れてしまわないように、  
、佐々山英雄。】

・・・手紙に雫が落ちる

なに?これ。

これが、ササヤマ君の気持ちだったんだ、、  
永遠だと信じることが、出来ない。つて。  
なのに、

あたしは、信じている。

それだけじゃ無い。信じて、叶えられる様にいいお嫁さんになろうともしているのに、

ショックだった。

目の前が真っ暗になる錯覚をつけながら、  
辺りを見回す。

ササヤマ君。

貴方は、こんなもの贈ってどうしたいの？

地面が次第に光っているのに、アゼイリアは気がつかない。

貴方は、どんな事をしてでもあたしを止めようとしてくれないの？

だんだんと意識が鈍ってきた。

すると、丁度

玄関のドアが開き、佐々山が入ってきた。

「アゼイリアさん？ちょっと忘れ物が、――アゼイリア!!」

光が洗面台から溢れ、アゼイリアはその中で佇んでいる

「ササヤマ君、、」

「アゼイリア!アゼイリア!!どうしたんだ!」

「ササヤマ君、、あたし、」

「待っている!今いくから!」

余りの眩しさに目を潰される思いをしながら前へ駆け寄る。  
なのに、たどり着けない、、

「ササヤマ君、もういいよ。あたし、帰る。」

「アゼイリア!？」

ほんの僅か見えた彼女は、ポロポロと涙を流していた。

「・・・さよなら。」

「アゼイリア!! 嫌だ! いくな!」

・・・そんないいうのなら、これは何?

こんなの、別れてしまう事を肯定している様なものだ、

「アゼイリア!! 絶対に君をいかせない!」

必死で、手を伸ばしても、空気をつかむ様なものだった。

いかせない! アゼイリア!!

もうあの星へは!

やっぱり駄目なんだ、耐えられない!

アゼイリア!! 君を、必ず迎えに行く!!

たとえ、君の星を破滅させても僕はもう一度君に会いに行く。  
この身が滅びようとも、誰かを傷つけようとも・・・!

人道に反する事だっってやってやる!!

僕は、声のあらん限り叫んだ。

「アゼイリア。待っていて。」



## 0 離れても、離れても（後書き）

アゼイリアさんの過去編終了です。

今度は一気に話を進める予定なので、一回番外編とかいれたいなあ。

### 3・守るための戦い。

アゼイリアさんは、意識を取り戻した後  
自分の身に起きた事を冷静に話してくれた。

あたしの困惑顔とローズさんの苦々しい顔を見つめながら、  
アゼイリアさんは、更に続けた。

「・・・あたし、ね。還ってから、ずっとして来た事があるの。  
彼の幸せを毎晩毎晩空に向かって願う、、届かなくなっただけ  
良かった。

ただの自己満足で済むはずの儀式が、ついこの前、取り返しが  
つかなくなっただの。。。」

「・・・いつも通り、潮の満ちない丘で祈ってる最中に  
彼の声が聞こえたという。

その声は昔と変わらず、なおかつ彼は迎えにいくと言っていた。

「・・・迎えにいく、、。」

「そう、そしてこんな事が続いて、私は彼が、帰る直前に言ったあ  
の言葉が

真実になってしまふのかもしれないと、思ってる。。。」

そんな、嘘でしょう？

佐々山先生は、いつだって、他人の幸せを願って、絶対に人道には  
反しちゃいけないって、、

「・・・嘘だよ。そんなの、、」  
「喜代ちゃん。。」

すつと向けられたアゼイリアさんの氷のような瞳が、  
あたしの怒りを燃えあがらした。

「勝手すぎるよ！！！！先生もアゼイリアさんもなんで！！！！そんなの  
！もしもあつたら、許される事じゃ無い！！」  
このままダンデが目覚めなかったら！

いや、それよりももっと前にこの星が無くなつたら！！！！

不安と怒りの混じった涙がボトリボトリと重く落ちる。

ダンデ、ダンデ、ダンデ！！！！

「キヨちゃん！落ち着きなさい！まだ決まったわけじゃ無いでしょ  
う！

貴女がやるべき事はアゼイリアを傷つける事じゃ無い！恥を  
知りなさい！！」

喜代はローズの一言に気圧され、  
俯き、ふるふると静かに震え出した

・・・・・・「だって、ダンデがあ、、」

「キヨちゃん！」

だって！！！！！！

「~~~~!!」

もどかしさで吐き気がする。

思わず胸の辺りを掻きむしって、

部屋を、出て行った。

酷く痛い静けさと重苦しさがのしかってくる。

「アゼイリア。」

ローズは鋭く能面の様に無表情の彼女を睨みつけた。

「・・・喜代ちゃんが、怒るのも当然よ、ね。

だって、あたし達があんな風に別れなかったら、ダンデは、  
、」

続きを言おうとしたアゼイリアを、

ローズはその眼光で制し

厳しく突き放した。

「アゼイリア。貴女はあの子に謝るべきだわ。

貴女の下らない自己中心的妄想に付き合わされて、酷くあの子を動揺させた罪として。」

ピク、

肩を震わせ、目を大きく開けるアゼイリア。  
やっと出てきた表情には驚き意外の色は無い。

「妄想、、、ですって？」

「ええ。声が聞こえたというのは貴女の幻聴かもしれないし、  
偶然こんなことが続いている可能性もある。

それをよく考えもせず決めつけて、その責任から救われよう  
と告白してあの子を不安に

させたのよ。」

「!!!!!!」

自分の軽率さと愚かさがまざまざと叩きつけられ、  
アゼイリアは本当にワナワナと震え出す。

私は、自分の不安をあの子に押し付けてしまった。  
あんな年端もいかない女の子に！  
私は、私は、

ああ、なんてこと！  
どうしましょう。なんて愚かな行いを・・・！

「ローズ、、わた、し、、、」

「もしも、貴女の言っている事が本当だとしたら、貴女はどうする  
の？」

「え？」

唐突な質問に、何も答えられない

「貴女は、多分すごく不安を感じたでしょうね。だから一緒に考えて貰おうとした。」

でも、とローズは王が羽織るマントを掴み、  
ふわりとそれに腕を通す

「貴女は、昔からそうだったわ。自分から考えず、人に頼り、ひとに流されていく。」

そんな貴女が、本気で愛した男性でしょう？」

「・・・そう、ね。」

「迎えなんて待たずに、行っちゃえば良かったのよ。」

地球にね？」

そう言つて、彼女は軽くウインクをして、出て行った。

彼女の言いたかった事が、そのウインクに込められているかのごとく胸がギュッと締め付けられた。

・・・流されてばかりの私

彼のために幸せを願ったって、届きっこない。

結局、私は何も出来ないで、、、、

ワタシ二八、ナニガデキル？

あの子に償うために、

もしもの時のために、、、、

アゼイリアは、静かに扉へと向かい  
喜代を探す第一歩を踏み出した。。。

「たのおおおおおお！！！！」

そして、大絶叫と共にアゼイリアの第一歩は二歩目を踏み出すことなく、

終わった。

「アゼイリアさん！もう！もうあたし決めたから！！！！和解しよ！」  
「え？え？え？？」

何もアゼイリアは喜代の大声にこんなに戸惑ったわけではない。

そこには喜代の素顔が奥にあるであろうフルフェイスのヘルメットと、

右手には空飛ぶフライパン（高速ですぶりをしている）  
左手にはいつしかの黒いブヨブヨ。（流石に手袋越し）

そして、ヘルメットのおでこ部分には、

【夜・露・死・苦！】

の四文字が乱舞したハチマキが括り付けてあり、

モロ戦闘モードじゃねえ！？

とツッコミ魂を刺激しまくるこの様子で和解と喚く喜代。

・・・遂に、イッタカ。。。。

「き、喜代ちゃん。和解って？許して、くれるの？」

そしてそれ全てをスルーして和解だけに食いついてくるアゼイリアも中々大物だ。

「うん。アゼイリアさんは、先生に会いたんだよね？」

「先生・・・？佐々山くんのこと？そりゃ、会いたいけど、でも、これ以上我が儘は言ってられないわ

と、続けようとした瞬間喜代の素振りが激しさを増す。

「だったらもう！アゼイリアさんとあたしは、敵だから！全力で先生を追い返すから！！」

「ええ！？ちよつと、喜代ちゃん話を聞いて、ゝゝ」

戸惑うアゼイリアの声を遮るかのように更に更に喜代は続けた。

「絶対絶対ぜー！ー！ーったい！！この星を壊させないし！ダンデも守るし！

皆ハッピーにするし！誰も泣かせないし！

出来たら、アゼイリアさんと先生もくつつけるから！！！！だから！

あたしに協力して！アゼイリアさん！！！！」

・・・空いた口が塞がらない。

何なのかしら、この子は。本当に、  
エネルギーシユすぎるわよ、、、  
私の撒き散らした不安を、この子は、こんな年下の女の子が、、、  
ローズの様に疑いもせず、

尚且つ、立ち向うなんて、、、

完、敗。

佐々山くん、、、  
貴女は、いい生徒を持ったわね、、、

どうなるかなんて分からない。

でも、喜代ちゃんは全身全霊で戦おうとしてる。

だったら、あたしのやる事は、決まっているわ。

軽く息を整えて、

喜代を真っ直ぐに、見つめる。

「喜代ちゃん。もしも、佐々山くんが来るならば。

貴女に協力する。

・・・そして、佐々山くと共に、地球に帰るわ。」

-  
-  
-  
- 貴女の居場所を貴女と共に、守ります。。

### 3・守るための戦い。(後書き)

果たして有言実行なるか・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8072q/>

---

実はあの子はごによごによによ

2011年9月19日23時17分発行